

の氣分に觸れた天才は、歸來得意の健筆を揮ふて一世を警醒したが爲に、例の民族性の情熱的氣分が挑撥せられて、茲に過激極端なる革命を誘發するに至つたのであつた。ヴォルテールは實に革命の種子を蒔いた第一人であるのだ。彼の靈犀なる論鋒に依つて、鼓吹せられたる佛國社會の政治宗教の腐敗官僚教會の痛罵は、佛國人を眩酔せしめて、當時の政府教會を怨恨するに至つたから、彼は本國政府から逐はれて、或はボツツダムに、或はロンドンに、或はジェネーブに流浪したのであつたが、偶ジェネーブ流竄中に、北米合衆國の志士フランクソンの獨立救援の使命を齎らして、巴里滯留中、此の東西の二大人氣役者が、不圖邂逅搦手して自由を景慕する民族に隨喜の涕をこぼさしめたと云ふ人氣を扇つた事もあつた。英國に在つては、感覺論は心理的の觀念聯合説に留まつて居つたが、佛國に入つては感覺主義と轉じ、人生觀には唯物主義となり、宇宙觀には機制論とならざるを得ないのだ。舊來の欣求憧憬の標的であつた道德、宗教は、佛國に入つては反抗的態度を探る事となり、靈魂、未來を否認するに至つたのだ。英國に於ける純理教は、佛國では宗教的懷疑となり、信仰は破壊せられてしまつた。英國に於ける功利主義の道德は、佛國にては利己主義に墮し、利己的衝動の完全に發達したるもの即道德である。同情慈悲博愛等は之れ皆自己心満足の手段と化せらるゝに至つた。佛國は、果して幸福であつたであらふか、人心の根柢此が爲に動搖し、山雨將さに到らん

として風樓に滿つる形勢と惡化するに至つたのだ。個我の自覺に覺醒した佛國は、遂にデモクラシーを觀て、純然たる個人の自由平等を要求するものとして、個人主義化してしまつたのだ。ヴォルテールと並んで、佛國人心を警醒した一人は、ルッソーであつた。彼は時代の謀叛兒であるが、同時に彼は聰明鋭敏なる時潮の轉回を直覺し得る天才であつた。彼は百科全書の著者グランメール等と交遊して、唯理思想の根本源理を理解したが、直に其短所に着眼をした。理智萬能で果して人生は可なりや、世は主智的に流れて、法則、制度、儀式、典禮を偏重するが、之は人生生活の常態であらふかと懷疑するに至つたのだ。ルイ十四世以來、儀禮、制度は一層煩瑣に陥つて、内的生命を拘束するの弊に堪へざるを悟得した。茲に彼は局面の轉回に着眼して、人生の内部的生命は、枯淡なる理智でなくして、豐溫なる感情であるのだ。冷やかなる理智の文明は、形式に走り、虛偽の社會である。人類の眞生命は、此の不自然にして冷酷なる理智の桎梏から解放せられて、感情の欲するまゝに放任すべきである。自然に復歸せよとの絶叫は、斯くして發せられ、主情主義の新文明建設に着手せんとして、世を浪漫的の理想時代に回轉せしめんとしたのであつた。此の見地から、彼は人格の尊嚴を力説し、吾人の最貴きものは理智の所産たる法則でなくして、内部生命の人格である。人類は生得的に、此の天真の人格を享有するものであるから、此の人格の完全を圖るのが、難て社會改造を達成する所以であ

る、人類は本来自由平等の生存権を有するものであると力説をしたのが、天賦人權論であつた。ルッソーは主情主義に依つて理智の束縛から、自我の解放を謀つたが、謂はゞ情を以つて知に對抗せしめた丈である。到底満足なる解放は不可能であるから、止むなく詩に入つて理智の束縛を脱する主情主義の浪漫的詩風を誘導するに至るは當然の徑路である。

#### D 獨逸の啓蒙運動

##### 1 思想突進期

啓蒙思潮時代の唯理萬能主義は、其所説淺薄、平板、皮相、無味の弊を脱することが出来ない。偶獨逸民族は、當時漸く覺醒の狀態に進み、思想習慣に對して批判の見地に立つに至つて、世は之を批判時代と言ふが、如上の思潮に對して不安を感じ、所謂思想突進期 *Sturm und Drang* に入つたのであつて、ゲーテの「ヴェルテルの悩み」は此の狀態を最よく描寫せられて居るのだ。碩學カントは此の時代に立つて苦心八年、コパルニカスの回轉にも優る、人類救済の大功業を完成した苦心は大なるものであつた。

##### 2 批判主義時代……カントの哲學

元來自我は知情意の三作用から成立して居り、然かも知性の職能には、自から限界を有するものであるのに、獨り主知主義に偏するが爲に、道德に於ては感覺論より自利主義に墮し、

的思想に陥り、宗教は懷疑より無神論に入るが如きは、到底忍び難い所である。思想上の過激的學説が、實行上革命の動因となるが如きは許し難い所である。知情意の統合せられたる自我は、普遍、妥當、必然の要素を充足する法則を内部から創造するものである。理性、普遍我意識一般、超個人我とは此である。吾人は文藝復興によつて、教權の束縛から解放せられて、自由研究の妙境に入つたが、啓蒙時代に入るや、主知主義の爲に再び囚へられて、唯物の奴隷となつて見れば、其拘束せられたる點に於ては、五十歩百歩であるのだ。茲に於てカントは、外物は自我の所産であると喝破したのであつた。自然物が若し我を離れて物自身の世界であるならば、其が普遍的、妥當的、必然的に認識され得る道理はないのである。自然物は出沒往來極りのない、千差萬別限りのない感覺の雜集でなくして、其前に秩序統一、連絡のある一の世界として存在するのは、要するに、自我中に、先驗的に創造せられたる時間空間範疇、因果律の機能に攝取せらるゝからの事である。若し先驗的機能の攝取するなくば、自然的の認識は不可能であるのだ。此の意義に於て自然は自我の所産であると斷定したのであつた。然かも自然が自我の所産であるにも拘はらず、何故に我を離れて存在すると考へ得るか。疑問は、儼然として存するのである。カントの苦心は、此解決の鍵鑰を得るにあつたが、八星霜間慘憺の成果は次の様であつた。自我は個我と超個我意識一般とに區別すべきである。超個我が此の自然を

創造したものであるが、個我は其を知らず、唯其結果の動作のみを意識するが故に、外界は自我を離れて居るのだと誤認するのである。恰も地球が日夜自轉しながら、太陽の周囲を公轉して居るのに、却つて太陽が常に東から出て、西に入るものと獨斷して居ると同様であると斷定したのであつた。コパニカスの回轉にも優る成績として、世に推賞せられて居るのは此である。此のコパニカス的回轉に依つて、十七十八世紀間、壓迫せられた自我は解放せられたのであつた。カントの超個人我の發明によつて、人類の宇宙萬物に對する位地は明瞭になつて、自我の眞價を高調するに至つたのである。カントの努力に依つて、人生觀、宇宙觀は改造せられ、唯物論機械觀は破壊せられたと同時に、情意は主知の束縛から救濟せらるゝに至つたのだ。主知の所産に非らざる宗教、道德に對しては、主知は何たる力をも有するものでないとし、自由意志を高調するに至り、道德の權威を力説し、人格の尊嚴を論ずるに至つたのだ。人類が行爲を決定するは、利害、好惡、適否等で決定せらるゝものにあらずして、自律的、普遍的善の定言的命令に依つてのみ行動を律すべきである。全然自律的で定言的であるのだ。他からの所與に非ずして、自主的、獨立的のもので、絶對、必然、妥當の要件を充足する道德法に依つてのみ行爲を決定するものである。人格が目的であつて、人類を方便とすべきでない論じて、人格尊敬の價値は、カントに依つて高調せられたのであつた。社會改造には、此の高貴なる人格の人

に依つてのみ其目的を達成し得るのである。今後論すべき社會改造論は、カントの言に深き注意を拂ふべしである。人類意志の自由に關しては、哲學者の間に於ける長き爭論の點ではあるが、要は絶對的自由は、到底成立し得ないものである。吾人は環境に依つて絶えず制御を受くる事は、生物である以上は許さなくてはならない點である。寒暖の氣候によつて、氣分の上直ちに影響を受くるものである。居は氣を移すものである。景に依り情を移すものである。山川河海の地形が、個人性乃至民族性に大影響を及ぼすは、自明の理ではあるが、さりとて、行動を決定せんとする動機選擇の際には、全然其個人の自由意志にのみ依るものである事は當然である。性格、品性が動機決定の有力分子ではあるが、其性格、品性も、總ては個々行爲の反復練習の所生であるとするれば、意志には自由の境地を許すべき制限的意志自由論は動かし難い眞理であるのだ。所が如上の個人的デモクラシーは不幸にして此の自由を曲解し、我儘に墮し、利己に陥つて社會國家を危くするに至つたのが、十七十八世紀に於ける當時の思潮であり、社會の通弊であつたのだ。眞の自由は衝動、本能、欲望の儘に行動するのを謂ふのではないのだ。若し然りとすれば、此は其等の奴隷となつたのである。吾人の衝動、本能、欲望は本來は純潔のものだが、吾人が其奴隷となつた時に、始めて惡を造るのである。眞の自由は、此等衝動等に制限されず、知情意の統整せられたる理性、普遍我の爲に衝動を淨化して行く所に、

眞の自由の妙境が存するものである。眞正の自由は、衝動、本能等に制限せられなから、普遍我理性の純粹無規定の境地に還元する。那に於て、始めて享有し維持せらるゝものであるのだ。實にカントに依つて、人類は自由意志ある生物として、其權威を與へられ、外物の拘束と内心の奴隸とより解放せられて、人格の尊敬を増した事は、誠に痛快の極みであつた事を感謝すべきであるのだ。山中の賊を亡ぼすは易く、心中の賊は容易に亡ぼし難しとあるは、衝動、本能の奴隸となり、個人我に即して、普遍我の淨化を経ない行動に出づる多きを戒めた名句である。當代デモクラシーの傾向は、此で明白となつたと思ふ。物既に自我の所産であるとすれば、宇宙の本體論には、必然、唯心論に入るべきは勢の嗜易き所で、遂にフヒテ、シエーリング、ヘーゲルを生んだ獨逸に、ローマンチック哲學の全盛期を現出したる思潮の叙述は、茲では略するが至當であらふ。

## 二 政治的革命運動

文藝復興期に依て覺醒したるデモクラシーの基調たる自由の要求は、自我の覺醒となつて、内面的に宗教の改革、學術の勃興を起し、遂にカントに至つて自我の解放を完成せられた事は、如上の叙述で其概略を盡したと思ふが、デモクラシーは、政治に表はれては、其が如何に變遷したかを詳述する順序となつたのだ。十字軍に依て封建制の解體する動因を與へられ

てから、遂に中古史の終頃に近世的國家の勃興した事は、前既に論述したのであつた。此等國家制の中で、デモクラシーの氣分の最濃厚であつた國は英國である。

### A 英國……二度の革命……議會政治

英國民が個人主義の民族である事は、此も其民族性を述べた際に記して居いた通りで、加ふるに政治的天才の民族である。十三世紀の頃に、ブルジョア階級の崛起に依つて、市民權の擴張を斷行した彼等は、近世的中央集權的國家となるに當つて、政治的自覺の念慮の旺盛となるは、事の自然であるのだ。當時君主は自家の尊嚴を維持する必要上、色々の儀式、典例を定めて臣民に對したは勿論、君主の權力は天賦でありとの帝王權神授説が唱導せらるゝに至つたのである。之に反して政治的に自覺したる民衆は、主權在民説に立ち、社會契約説を立し、自然法説を主張して、兩者の間に非常なる思想上の争闘が起つたのであつた。此等君主と國民との間に、何が故に如上の争闘が起つたかと謂ふ原因を調査するに、色々の因子も此に加はるのであらふが、主要なるものは二つあると思ふ。一は國體成立の歴史、他は國家君主の施政に依る事と思ふ。一體世界中我國を除いて、家國一致の國體はないのである。同一民族の膨脹が即國家であると謂ふ國は、世界廣しと雖も、唯日本帝國のみである。今英國の如きは羅馬時代、ブリタニヤと稱して、ケルト民族が移住して居つたが、中世に入るや、例のゲルマニ民

族が北海を渡りて英國に移住し、此等先住民族を驅逐し、或は之と混融して、漸く國家を形勢し、でもので、同じくゲルマニ民族の中にも、ノースマンであるノルマンあり、ブリンダルあり、サクソン等があつて、相前後して渡英したもので、其主權者と臣民とは、互に優者たる征服者と劣者たる被征服者との關係にあるのである。征服者、侵略者としての君主は、被征服者に對立し、其威力を揮つて統治を行ふが故に、劣者たる臣民は、止むなく之に屈服したるに過ぎないので、彼が善政を布いて居る間は、雌伏して居るが、悪政暴虐が打續けば、國民蜂起して、茲に争鬭が起るのは、隣國支那に於ても之を知り得るのだ。支那二十四朝の盛衰興亡の例も此であるのだ。今英佛二國に之を見るに、チユードル王朝にあつても、專制の政治を以て臣民に臨み、宗教、政治に於て臣民が自由の壓迫を蒙つた實例は、枚舉に遑がない程である。エリザベタ女王の一世は、英國國運發展の第一歩に入つた隆盛期であつて、國民は此に眩惑せられて、其暴政を忘れて居つたが、次朝スチュワード家に入るや、帝王權の神授説を振りかざして、時々、議會と衝突したのであつた。カロロ一世即位後、形勢益惡化して、二回議會を解散して、所要の財を得る事が出来ず、止むを得ず第三次の國會を召集し、國民の權利請願案を通過せしめたのは、臣民が君主權に對する強迫であるのだ。爾後十一ケ年間議會を召集せず、司法院を設けて恣に裁判し、權利請願を無視して暴戾至らざるなきに至り、國民は憤慨して北米は

自由の天地に渡航するもの多かつたのは、此時代の事であつた。一六四〇年に、蘇格蘭出征費の支出を要するから、議會を召集したが、國民の公憤は既に頂點に達したる時とて、議會と君主との衝突が猛烈になり、茲に革命の端緒を開き、王黨議會黨に二分して、戦端を開き、王黨の大敗となり、カロロ一世は捕虜となり、高等法院は王を國賊なりと宣言して、一六四九年一月三十日には、斷頭臺上の露と消えたが如き、悲絶慘絶の大革命を起すに至つた。カロロ一世に死刑を宣言したオリバー・クロムウェルが、英國では大忠臣と崇めらるゝが如きは、到底我國民の首肯し難き所である。鎌倉幕府が開かれてから、武門に政治の實權が遷り、王綱弛廢の端を開き、大義名分上、誠に悲しむべき變則政治に入るに至つたのは、遺憾此の上もないのであつたが、然かも最初源氏の三代、殊に實朝の如き勤王の志の切なる士もあつて、多少恕すべき點もあつたのだが、北條に至つては、陪臣を以て政權を弄し、殊に承久、元弘戦後の如きは、大義名分上、我國民は到底之を看過するものではないのだ。建武の中興、僅に四年にして、吉野朝時代となり、足利の暴虐無道は、吾人國民の決して許さざる大罪である。室町百八十年間は、皇室の式微最甚の時代、此を思ふても我國民の血は煮沸して、足利を惡む情は痛切なるものがあるのである。此等は彼我國體の相違、蓋し止むを得ないのである。スチュワード王朝百年間は、不幸にして專制の歴史である。第一革命後、王政復古してカロロ二世の即位となつたが、資性

凡庸の上に、放逸に流れ、民権を蹂躪し、専制政治を行つたから、國民は審査律人身保護律を要求して、信教、生命の自由を保證せしめ、尙位を王弟ジェームス二世に譲らしめたのだ。一六八八年之を名譽革命と云ふ。ジェームス二世も、即位後例の帝王神權説を奉じて、壓制を圖つたら、位を他に譲らしめ、爾來英國王は民權尊重を公約し、議會の權利を蹂躪せざる事を誓約し、國礎愈鞏固になり、政治的自由は保障せられたのだ。次朝ハンノーフェル家は、獨逸ハンノーフェル家から入つて王家を即いだのであるし、英語に親まなかつた爲に、議會に萬事を委任して國王は僅に裁可の權を保留するのみとなり、君主臣民間の情誼は濃厚になり、議會は二政黨の互に至誠國家發達の爲に獻替翼賛に努力する姿となつて、英國の國勢は、十八世紀以後、駁々として進歩の跡は顯著のものがあつたのである。斯る國體であるからして、臣民は社會契約説を立て、主權在民を主張し、或は自然法主義に立つて、個人の自由を強要するに至つたのである。全然君主と臣民との間は喧嘩腰であつたのだ。ホッブス、ロツクは、共に社會契約説を主張したが、ホッブスの議論は、却つて君主擁護論に偏し、ロツクのは、革命鼓吹の議論に墮したのであつた。人類は原人時代から利己的動物で互に争鬪を事とし、弱肉強食の修羅道を演ずるから、茲に政府を造り、君主を戴き統治の大權を全然之に委任するのである。斯く決定した上は、國家君主を臣民は自由に處置し得べきに非ずと論じて、専制政府擁護の議論

となつたのに反して、ロツクは豫大の筆を揮て、主權在民説を力説し、社會は契約によつて成立するものである以上は、君主の存廢の如きは、人民の自由處置に委ねべきであると論及して、革命煽動の過激思想となつたのだ。當時は唯理思潮の全盛期である。ストイック學派の自然法説を論據にして、個人を規正し制約するものは、宇宙の大法のみで、臣民は其他の何物にも服従する義務なきものであると論じて、個人の自由を強要したのであつたのだ。英國の憲法は、斯くの如く血を流し、血を以て獲得したのである。國體が既に侵略的歴史である以上は、主權在民の民主的政治の要求せらるゝは、毫も怪しむに足らないのである。

### B 佛國……フランス革命

佛國に至つては、ブルボル家の治世相當に長くあり、歴代の君主は、専制暴虐、民の膏血を搾つて、少數たる貴族、僧侶の專横奢侈に浪費せられたのである。ベルサイユ宮殿の宏壯、雄大、美麗は、當時世人の耳目を聳動せしめたもの。巴里城外の西南僅に十二哩の地、宮廷の美女三千、艶を競ひ、妍を争ひて、君主一人の寵を得ん事に苦心したとある。支那唐代の詩人杜甫の阿房宮の賦にも、優る驚くべき華奢である。一將功成つて萬骨枯る、一宮殿成つて生民蒼しの言を思はざるを得ないのだ。豪奢なるルイ十四世の政治は、専制政治であればこそ、かゝる宮殿も出來たのであつた。工費約二億圓とあるからには、今日の時價に換算すれば多額に上るもの

である。十四世の治下は、内治外征に最多端なる時代、國帑の誅求過酷で、人心漸離反せんとしたのであつたが、朕は國家なりとの大抱負の下に、國民は止むを得ず屈服したのであつた。一七一四年、十四世の崩後の佛國は、人心皇室を離れて、貝時運の到来を待詫びた姿となつた。十八世紀には、英國は革命を経て民意尊重の時代、自由の空氣は國民に活氣を横溢せしめ、國勢の隆盛時代であつたから、佛國の天才、英國に入つて、此形勢に吸込まれ、歸來モンテスキューの「萬法精理」は、三權分立論となつて、統治權は一人にて掌握すべきでない、宜しく三權分立すべきである。英國の政治は此であるから、佛國は先進國の例に倣ふべしと誇稱して、ブルボン家の政治を批判し、ヴォルテアは前述した如く、宗教政治に向つて、其暴虐と腐敗とを極論して、民心を沸騰せしめ、ルツソーは革命の兒であつた上に、天才的肌の人、奇警峻厲の氣を以て、天賦人權論、社會契約説を盾として、主權在民、個人の絶對自由を主張し、加ふるに北米合衆國の自由運動着々成功して、其範を示すに至つたから、一面には堅實保守の點のある佛國民ではあるが、同時に狂熱性も潜在するから、忽ち之に共鳴し、歴代の暴政を惡む情は極度に達し、一七八九年に時ならぬ暴風が佛國に起つたのであつた。當時佛國の土地は、三分の二は貴族、僧侶の所有であつて、僅に三分の一のみが、人民の所有に係るだけで、人民は租税を納むる器具に過ぎないのであつた。三分の二の所有者たる上流人士は、無税である上に、其生活の豪華

なる事想像以上である。狂熱的に皇室、貴族に對する反感は高まつて、革命の暴風が起ると間もなく、疾風迅雷が一時に襲來して、巴里の都は、忽ちに修羅の巷と化し、斬頭斷上の露と化する上流人士の數は、一日中にも相當の數に上り、戦々競々として所謂恐怖時代を現出した事は、今之を想像しても、悚然たらざるを得ないので、自由、平等博愛は、革命の三旗幟であつた。如何に當時の佛國民の耳朶には、此の三語が快く響いたかを想はしむるのである。英佛二國に行はれた政治的革命は、要するにデモクラシーの個人的色彩を最赤裸々に表現したものである。

### C 當時のデモクラシーと其批判

茲に至つてデモクラシーは、嚴正なる批判を受くべきである。然かも其根本義は、元來個人と社會とは、如何なる關係にあるべきかと謂へる事が、第一の解決問題でなくてはならないのだ。如上、政治的デモクラシーを見るに、君主的側面に於て、專制暴虐の税政百出して、個人的側面は之に堪へなかつたから、苦し紛れに發した叫喚の響ではあるが、然かも其根本の思想には、許すべからざる缺陷を有して居るのだ。即ち個人を主として、社會を客にしたる思想である。抑當代の人士が思惟した様に、個人が第一次的であり、主であつて、社會は第二次的、第三次的で、客であると思惟するのが正當であるかを考察すれば、直ちに其正否を甄別し得るのである。

である。成程個人の自由平等は、カントの力説した様に、人格は自律的で、他から何たる制限を受けず、自己目的で他の何物の方便でない事は眞理であるが、其個人は同時に夫婦親子家族の關係から毫頭分離し得ないものである。否、郷黨社會國家更に人類としての個人であるから、之を社會から孤立的の個人としては實在しないものである。眞正の個人は、社會的個人であつて、其が眞の實在的個人であるのである。斯く考察すれば、個人と社會とは對立的に見るのが誤謬の基であるのだ。今個人の絶對的自由を主唱したる社會契約説、天賦人權論、自然法學にしても、皆此の誤謬の上に建設せられたのだから、其主張する自由も、勢、個人の利己を主張する私利とならざるを得ないのだ。國家對臣民の問題に於て、國家は消極的に出づべきである。個人の自由に放任すべきである。只個人の安寧幸福秩序を妨碍するものがある場合にのみ之を除去すべきである。決して積極的に個人の自由に干渉強迫を加ふるものに非らずと言へるが如きは、其淺見其皮相到底認容し得べきものでないのだ。此には人性とは果して如何なるものかを研究すれば、直に之が正否を判明し得るので、人性は善惡何れにも分れ得べきもので、性善性惡と何れかに決定し得べきものでないのである。人性は無記の状態にあるもので、此が表現する時にのみ始めて善惡明暗勤怠の兩面を表はし、排他猜忌嫉妬等の性情を表はすのである。人性が眞に善良の方面のみを表はすものと假定し得るならば、茲に始め

て個人の自由を高調し得るのであるが、縱令其處には少數であつたとしても、多數の安寧幸福秩序を紊亂する人士がある場合には、個人の意志を、或程度迄拘束し制限するのは必要である。國家社會の存在の必要は、實に此に存するのである。従つて其一面の横暴壓迫に對する反抗から出でたるが如き個人の自由ならば、斷じて許すべきではないのであるのだ。人類は元來平等であるとの思想にしても、如何なる意義に於て、平等であるかを深く考ふべきである。然るに實際を達觀すれば、個人的差異は儼存して居つて、其性的心力體力の方面から見れば、萬人萬異で男女賢愚銳鈍強弱の差を有するのが、此が實際であり、自然であるのだ。世界の人類は平等に造られたりとの、米國獨立宣言書の意義は、ストイック學派の、理性萬能、個人主義的見地に基する主張であつて、社會的見地に入るに非らざれば、其真相を發揮し得るものではないのだ。自他を眺めて見れば、其處に差別相のあるもので、今吾人の道德界を見るに、愛の發現には必ず順序を要するものだ。遠近親疎の區別に依て、自家の誠意を盡すが、此が其の平等であるのである。墨子の兼愛の如きは、差別を無視したものである。否、現實の實相を無視したものである。博愛の念は近親を先にし、遠疎を後にするに依て始めて公正を保ち得べきである。博愛の徳は進歩せる人類の最高の道德ではあるが、此は絶對的境地に於ての理論に過ぎないのだ。差別的現實界には、其事は近親から遠疎に及ぼすべきが正當である。常に



眞理は中庸にあるのだ、プリストートルの「徳は中庸に在り」と謂ふ句は、眞に千古不磨の金言であるのだ。如上の見地に立てば、十七十八世紀に絶叫せられたるデモクラシーは、まだ醇化と洗煉を経ない、素朴にして偏見、悖理の思想を伏在したるものであると謂はなくてはならない。之を要するに個人的色彩の濃厚なるデモクラシーであつたのだ。反言すれば、ブルジョア階級者が第一第二階級者に對する反抗の叫、咒咀の聲に過ぎないのだ。ブルジョアの發したる叫喚の響は悲愴であるが、個人的自由、無差別的平等を力説した空理であつたのである。此が爲に自利我儘に墮し、一世をして不正なる迷路に漂はしめたものであるのだ。斯く謂ふもの、政治的に謂へば、少數階級の暴虐無道の極、止むを得ず之に對抗せん爲の一理窟に過ぎないのであつた。天下の公道、道徳を高唱したものと謂ふ事は斷じて出来難いのであつた。此が正當防禦として正義を主張し、個人的自由、平等の侵害に備へたのであるから、決して眞正の正義 Justice ではないのである。暴に報ゆるに暴を以てしたに過ぎないのである。誰か烏の雌雄を知らんやであつた。個人的正義は個人的自由、個人的平等の防禦的武器として、當代唯一の權威であつたのである。斯る偏見、我執から起つた西歐の天地は、我利、排他、專恣の弊風を助長し、社會生活を攪亂するに至るは當然であつた。佛國革命三十年間を一瞥するに、最初は革命の氣分に依て勃興した内亂は、一天才那翁の輩出に依つて、忽ち軍國主義に約變

し、他國の侵略戰となり自由戰爭が十九世紀劈頭に、歐洲の天地を震撼する形勢となつたが如き、極めて無自覺、無批判の輕舉であつたと識者を聳縮せしむる大事變となつたのも、亦猶稽であつたのだ。要之當代のデモクラシーは、反抗の思潮で、不徹底、矛盾を藏するものであることは此で明瞭となつたが、此の際、國體政治の要諦が那邊にあるやを警告せられたものと思へば、世界の政治に向つて、非常なる教訓を與へたものであると思ふ。政治の目的は、國家全體の幸福を増進するにあつて、少數階級の利益を擁護する者でない事と、其政治の運用にも、國民の全部が參與して、國民幸福の増進に努力すべしと言へる立憲政治國本政治の要求が、多大の犠牲を拂つて獲得せられたと謂ふ事であつた。國體は其建國の歴史が決定するものであるが、争鬭的觀念の基礎の上に立つ國家、反言すれば侵略的國家に在つては、君主臣民間には、易姓革命は是認すべきもの、又當然起るべきものだとの實證を、世界の政治に與へた一大事實であつた。非争鬭的國家たる我國の國體の如き、家國一本の國家にあつては、政治の目的、政治運用の方法の如きも、古來から、此のデモクラシーの意義を體現して居つた事を自覺的に反證せられた様な心地がするのであつた。況んや君臣の義は父子の情である道德的國家である我國體には、報本反始、孝道を以て立國の精神とし、忠孝一本にて進み得る國體では、革命の如きは決して起るべきものでない事の自覺と信念とを喚起せられたものと思ふ。

て感謝に堪へないのだ。

斯る個人的色彩の濃厚であつたデモクラシーは、然らば之が如何に發展すべきであらうが、順序として直に之に論述を進むべき筈ではあるが、暫く時代を遠観するのも徒爾ではな  
いと思ふから、十八世紀末から現代に至る時代の潮流につき、極めて概略ではあるが、之に一  
瞥を與へて見たいと思ふのである。

#### 7 近世史概観

##### イ 歐洲諸國民の狀態

文藝復興に依て、個我の覺醒をしたる西歐民族は、近世に入りデモクラシーの氣分横溢し  
て、内外の改造を行つた事は、既に述べた通りであるが、ピリニー半島のラテン民族は、新領土  
擴張に腐心し、本國に富を輸入して、國民は之を奢侈贅澤の無用物に悪用すると同時に、人心  
頹廢し、國勢頓に衰えて、文化の先驅者たる事が出来ず、當時スラブ族は、漸く擡頭して國礎  
を据えた位で、文化の餘澤を受くるには、まだ民族は覺醒をして居ないのであつた。スカンヂ  
ナビヤ半島の諸國及丁抹國は、位置餘りに偏北して、文化的活動に目醒しき運動を起し得な  
かつたのであるし、和蘭は商業立國を策して、盛に商權を擴張し、殖民地の獲得に力を致して  
東洋貿易の如きは、殆んど獨占に歸し、バタヴィアを根城とし、我長崎の出島に於ける貿易の如

きは、和蘭人特得の舞臺ではあつたが、西歐に於ける文化活動には大なるものを有しないの  
は遺憾であつた。然らば、近世史の舞臺で活躍したのは、英佛獨の三國民であると謂つても過  
言ではあるまい。

##### ロ ドイツ民族の覺醒……突進躍進期

###### A 第二の文藝復興時代……新人道主義の擡頭

就中獨逸民族は、自我の覺醒に第一步を占めた民族であつたが、不幸小邦分立の狀態、加ふ  
るに内部的の改革運動に熱心して、三十年戦役の瘡痕は、國家に取つては大なるものであつ  
た。七年戦役の如きも、獨逸民族に取つては相當の打撃であつたからして、此等列邦の中で文  
化運動に立後れをしたのは、又止むを得ないのだ。處が十八世紀半頃から、漸く民衆の活動旺  
盛になり、終に十八世紀末に及んでは、英佛を凌いで、ドイツ民族性の發揮となり、文運の隆昌  
は、眞に希臘文化を凌駕するの機運に乗ずるに至つて、ドイツ民族は、多年の雌伏狀態から擡  
頭するに至つたのであつた。獨逸文運の勃興は、十八世紀半頃に起りし突進躍進期 *Drum und  
Draug* に、其新紀元を劃するものであつた。當時啓蒙思潮の全盛時であるが、其唯理思潮の餘  
りに皮相淺薄、平板無味には、當代の青年は満足すべくもないのである。ウエルテルの惱に惱  
まれて、一條の活躍を案出して、茲に新人生主義を生じ、遂に浪漫的時代を現出した勢は大な

るものであり、此から獨逸の文化は、英佛に波及して、十九世紀文化の樞軸となるに至つたのであつた。獨逸の生んだ碩學カントの輩出は、此時代で、批判主義時代を劃したのであつたが、カントの學統は、勢ローマンチック時代に發展せざるを得ないのであつた。今新入道學派が如何にして獨逸に起つたかと謂ふに、華麗絢爛の文藝復興の花は、反動として起つた。エスイ派の宗教運動に依つて、萎縮して其影をさへ留めない状態になり、世はローマ風となつて、ギリシヤ文化は、肉感的、俗人的であつて、教會の神聖を汚す者であるとして排斥せらるゝに至つては、ギリシヤ文化に憧憬したる人士の煩悶は、其儘に離伏するものではないのだ。加ふるに當時の政治、社會、思潮等を眺めて見れば、一として不滿の狀態でないものはなく、唯理萬能の思潮の如きは、到底彼等を満足せしむる事が出來ず、一入古典憧憬の情を増大し、古典の蒐集に力を入るゝと同時に、ギリシヤ文化の理想を欣求したる熱は、茲にギリシヤ文化の崇拜即古典主義の勢を造つたもので、此を新入道學派と稱し、第二の文藝復興に比するのであるが、ヴンケルマンの古代美術史の如きは、よくギリシヤ文化を描寫して、新文明建設の理想郷を與へたものと思ふ。ゲーテが佛國革命前二年間は、伊太利に遊び、心の行く迄、古典文化を味讀した事は、史上有名な逸話であるのだ。ウオルフ、ウキル、ヘルム、フオム、フムボルト、ヘルデルの如き、皆此の派に屬する驍將である。

#### B ローマンチック時代創造

一度目醒めて突進躍進の狀態に入つた獨逸は、茲に、ローマンチック時代の盛時を造り出すに至つたのだ。何が故に此のローマンチック時代が生れたであらふか、長らくの間、啓蒙時代の唯理、法則形式に閉ざされて、其思想が淺薄、平板、皮相、無味になつて居るから、勢、ギリシヤ文化の渴仰に走るのは當然であるが、唯理、古典の兩主義は、共に、現代の歴史、國民性を無視し、宇宙的態度を採つて、一方は個性的純理に出入し、他方は古典の仙境に遊んで、靜平なる理想生活を享樂する姿である。一般市民を見れば、現實に墮し、利己、實益をのみ事として、何れも皆國家の安危休戚を眼中に置かない時代に、突然大那翁が侵略戰を起したのであるから、堪らない學者、詩人、市民が一齊に起つて、自國の自由、獨立の必要を泌々と身に感ずるに至つたのだ。文獻家は、ギリシヤ古典を離れて、自國民の傳説、神話に、祖先の抱壞した思想の有難味を研究せんとし、詩人は自國民の文學に憧憬の情を起し、國民文學を考ふるに至つた。宇宙的態度を持し、「吾人は國民に非ず」と澄し切つて居つたゲーテ、迄が、其晩年には國民的自覺の特色を帶ぶに至つた。哲學者も、思惟探求の奥深き宮殿から飛出して、現實の社會、國家問題に奔走するに至り、國民の前に起つて、慟哭、哀求の熱烈さを示すに至つたのだ。フイヒテが、一八〇七年に「獨逸國民に告ぐ」との大講演は、殊に悲痛のものであつた。當時獨逸は、佛軍に征服せられて

守備嚴重の際にあつたが、其十二月に首都に於てなしたる大演説こそ、後年ドイツ民族勃興の動機となつたのであつた。市民も覺醒して共鳴をした。斯る空氣の間に、ローマンチックの氣分は、獨逸國內に瀰蔓した。今回大戦争を距る百年前の獨逸の國狀と比較して、吾人は感慨無量である。要之、ローマンチックは、古典主義に對する反動と、唯理主義に對する反動との合成で生れたものである。ギリシヤ文化の憧憬も去る事ながら、現代自家生活に最深き關係ある祖先の生活……中古チュールンデンの森林に野蠻未開の生活をして、キリスト教の文化に浴し、封建制度の成立、及十字軍等に盡したる凡百の傳説、神話、言語、風俗の追慕に至つて、現在の自家生活が、此等尊き祖先の生活中に存在する事を思ふて、事實以上に之を理想化し、崇美化せんとするに至つたのである。唯理思潮、啓蒙思潮は、客觀を偏重し、主知、冷靜、無味、現實化したから、之が反動として主觀を尊重し、主情、内面、情熱、理想化するに至つたのだ。中にも理想を尊重するを最特色とするから、浪漫的派は唯理主義に對して、理想主義と命名せらるゝに至つたのであつた。ローマンチックの特色は、唯理思潮の人生を、平板淺薄、理知形式化するに對して、自我實現、自由解放を高揚し、人生を理想化して、其光明善美の側面を高潮するに努力し、人類を靈的の最高位地に高め、縱令人生、宇宙には、其の醜惡、不完全の現象があるにしても、其奥には偉大神祕の統一的、調和點のあると言へる信仰の狀態にまで高調するに至つたのであつた。

#### ハ ドイツに於けるローマンチック運動

##### A 唯心哲學の建設

随つて浪漫的の哲學には、フイヒテの人類を、一切の創造者としての自我の所有者として、然かも此は理智、快樂、幸福の追求に非らずして、道德的活動が其究極地であると論ずるが如き、之を前代の唯理哲學に比すれば、一種の崇高美、人性美に打たれざるを得ないのである。シエーリングに至つては、別けてローマンチックの代表哲學者である文、自然即藝術の境地に立つて、自然は奧妙なる絶對者の表現であり、無限の生命を備へたる神の象徴である。山川草木も皆生命の表現であるとして、藝術主義を鼓吹し、藝術は調和の妙境であり、美化淨化を主とするものである。哲學は知識に、道德は行爲に關するものだが、藝術は知識、行爲の綜合で、最高最貴の人生活動なりとして、藝術至上主義に走に至つたのだ。ヘーゲルに至つては、理想主義の頂點に達して、自我を最高の原理とし、人類は理性的動物として、科學、道德、藝術、宗教の創造者である。萬有は人類が創造作用を行ふ前提に過ぎざるものとして、理想主義は唯心的、目的論的の立場に進み、價值哲學の體系を大成するに至つたのであつた。此等ローマンチックの哲學大系が、獨逸に發生して、獨逸民族に高遠なる理想を憧憬せしめ、人生生活に深刻なる

思索をなされた當代は、ギリシヤ文化の夫に比して、一種景望の念を禁じ得ないのである。

#### B ローマンチック文藝

此と同様に、ローマンチックの文藝があつて、例の理想主義を標榜し、人生の光明、善美の情悦となり、人性中の靈性發揚に努力し、華麗、絢爛、神祕、雄大の諸相を發揮したのであつた。之を擬古文學の主知的特色たる理詰生活、嚴格生活の長所はあるが、一方には人生を枯淡、冷灰、淺薄、平凡、無味なる生活に墮せしめたものと相對して、如何ばかり人生生活を深刻高遠にせしめたか知れない事と思ふ。餘りにグレートは、自我の活動を藝術的に解釋し過ぎて、不完全なる現實界を美化する事に努力し過ぎたが爲、其弊としては自由、奔放、想像の世界に人生を誘ひ、感情生活に偏するに至つたのは止むを得ない點であつた。獨逸に於けるシルレルのウキル、テル・オルレアンの少女、ソレーレン、スタインの如きは、人生の善美を高調したるもの、讀者の心性を淨化、美化しなくては止まないものである。餘りに想像に走つた爲に、チーク、ノヴリスの如きは、空想の世界に走せ、神祕の境に迷入つた恨があるのである。ハインリヒ、フォン、オスター、チンゲンの如きは、青い花の幻影を挿へんとして、終生放浪したるものもあり、ヒアチンテの如きは、ヒアシンスの花を尋ねて、深山幽谷に迷入つたのもあるのだ。此處に到れば、人生は現實を離脱して、詩の世界、藝術の世界に迷ひ入つて、世智辛き人生生活と餘りに懸隔するの恨

みは到底免かるゝ事は出来ないのだ。

#### 二 英佛に於けるローマンチック運動

此が英國に入つては、湖上詩人としてのライズ、ブリス、コルリツヂを生み、人生の善美描寫に特得の表現となつて、何れも浮世の俗塵を離れて、山水明媚の湖畔に、大自然の靈妙神祕に浸り、梢を吹く風、谷川を流るゝ水に、無限の靈妙と神祕とを感じる生活を鼓吹するあれば、スコットの如きは、古代騎士の華麗なる生活描寫に、一世を酔はしむるがあり、バイロン、シエロ、キーツの如きは、英國に於ける當代の最盛名ある作者であつて、各其特色を發揮するのがあつた。カーライルの如きは、此派中にて重きをなした一人、加ふるに英國思潮に大影響を與へた有力の思想家であつて、フイヒテ、ゲーテの思想を最よく代表し、ローマンチックの思想に燃えて、激越痛烈の情調を取つて、唯理思潮竝に英國風の現實、經驗、功利の主義に反抗の氣焔を擧げ、英國學風に一轉機を與へて、大陸風の唯心主義、人本主義を輸入せらるゝに至つたのであつた。佛國にても幾多の人材を輩出したが、ビクトル、ユーゴーの如きは、其代表的作家であつた。ノートルダム、ド、パリの悲惨、レ、ミゼラブルの悽愴、悲絶、天下の逸品である。如上、ローマンチック文藝は、擬古文學が明晰の理智を以つて、宇宙、人生を觀察して、人生生活を無味乾燥ならしめたのに對し、感情を以つて之を補ひ、人生の描寫に、一種の溫味を與へ、或は壯麗、雄

大に、或は悽愴、悲慘に波瀾重疊の極、夢幻、空想に走るに至つたのだ。

#### ホ ローマンチック運動の轉機

ローマンチックの思潮は、其哲學、文藝の何れにしても、其長所としては高踏的態度を以つて人類精神生活を高調し、人生に深刻味を與へた點は大なるものがあつた、餘りに理想を高調するに過ぎて、現實世界、理知を忘却して、極端なる夢幻、空想に走り、人生の善美を過大に描寫した點が、其短所となつたと思ふのである。此のローマンチック思潮に依つて、十八世紀と十九世紀とは鮮明なる區別をなさるゝので、十七八世紀は唯理標準の社會隨つて論理的で、個人の自由權利の高揚となり、一切の政府、教會、社會の解放となつたのだ、處が其論理は主知的、個人的のもので、空想の世界であつたのだ、十九世紀に入つては、此が一變して傳統を重んじ、習慣を尊ぶに至り、隨つて國民及其國の歴史の尊重となり、民族的國家の勃興となつたのだ、空想を去つて現實に就くを要するに至つたのであつた、民族的國家の勃興には、希臘が一八二九年に獨立の公認を経るや、一八三〇年にはベルギーの獨立となり、一八六一年にはイタリヤ帝國の勃興、遂に一八七一年には北獨逸諸州が統一の大業を完成して、獨逸帝國を造りしが如き、實に十九世紀は、民族的國家の續出した時代であつた、斯る間に自然に國家主義の勃興となり、個人對社會の關係が解決せられて、デモクラシーの意義の變轉を見るに至

つたのである。

#### へ 科學時代

##### A 實證主義時代

抑人生の進路は、常に律動的運行の繼續であつて、其は常に正反合の辯證路を通過するものであるのだ、十九世紀劈頭のローマンチック思潮も、茲に其變轉の時機に向はざるを得ないのだ、十九世紀は、科學勃興の時代である、實驗、觀察は、其唯一の研究法である、今ローマンチックは、其論據を思辨に置いて居るから、科學萬能の時代には、到底其所説を貫徹する事が出来ないのだ、殿將ヘーゲルが、一八三一年コレラ病に罹つて逝つてから、俄然ローマンチック哲學は、其根據を覆へされた、哲學に於ては實證主義の勃興は當然である、ローマンチック哲學に於ては、人類生活を高揚し、其善美の點を鼓吹したが、科學全盛になれば、人類必ずしも善美の靈的動物でなくして、醜ろ醜惡、缺陷、悲慘の肉塊である様である、カール、フオーグトは、比較解剖學に依つて、人と動物とは量の差に過ぎずとか、ロバート、マイヤーは、勢力不滅律に依つて、人類も此の法則に支配せらるゝに過ぎずとか、チャールス、ダーウキンは、種の起源に依つて、生存競争、適者生存の原則に人類も拘束せらるゝ、等、人類の崇高なる位地は、次第に降下し來つて、目的論的の哲學は、勢を失ひ、實證主義の傾向旺盛となつたのであつた、隨つて萬

有一切を物質で説明せんとの大膽なる企圖となり、遂に機械論、唯物論に墮するに至つたのであつた。人は自我の絶対價値を認めず、只成行きの儘の現實生活の繼續反復が、人生であると謂ふに至り、理想を無視するに至つたのであつた。

### B 哲學に對する態度

然かも實證主義哲學の科學に對する態度に三様式あつて、第一は、科學が全然哲學を包含するもので、此以外に哲學の領域は存せないので、哲學は哲學史の研究であると謂ふに至つたものもある。第二は、科學を基礎として、然かも科學以外に哲學の建設をなさんとするもの、第三には、哲學と科學とを結合して科學を批判するもの、此が哲學であるとするとなつたのであつた。

#### 1 純科學的態度

第一様式に屬するものは自然主義であつて、此が實證主義哲學の本領である、即ち自然科學の方法を採用して説明し、然かも自然科學の結果を採用して、宗教、道德、法律等の説明に及ぼさんとしたのだ。善を論ずる道德には、本能満足主義を生じ、美を論ずる藝術上には、自然主義、寫實主義となり、眞を論ずる哲學には、自然主義(實證主義)となるのである。カントに依つて人格の尊敬、人類の位地を高められた事は、既に述べた通りであつたが、吾人の行爲が各人の

氣分の儘に行動して、果して正善の行爲をなし得らるゝべきか、超個人我に純化淨化せられたる個我にして、始めて正善の規範に合致し得らるゝものなるを知らば、道德上の自然主義は、吾人を驅つて本能満足主義に墮せしむるものである。斯る危険醜惡なる議論が、果して正當であらうか、哲學上の自然主義は、ヘツケル、オストワルドに依つて唱導せられたるもの、世界の謎は一八九八年、動物學者、ヘツケルに依つて著はされたものだが、原體 *Gustav* を以て世界の一切を説明せんとするものである。物の説明にはよし許すべしとしても、宗教、道德、藝術は、果して此の原體にて説明し得べきか、獨斷に非ざれば、空想であるのだ。一科學者の哲學觀に過ぎないものだ。オストワルドは、化學者として有名なる人である。エネルギーを以つて機械的に、宇宙、人生の解釋を與へんとしたのであるが、精神科學である宗教、道德、藝術は、遂にエネルギーでは説明し得ないのだ。自然主義の哲學が、幾多の缺陷を有するは、科學を以つて哲學を論ぜんとするの僭越の罪である。此を以つてスペンサーの如きは、不可知論を立て、宗教、道德、藝術、意識等は、不可知界に屬するものとし、科學的説明を避けたのは、寧ろ賢き論述である。ジュボア、レーモンの如きは、世界の七不思議を著はして、自然認識の限界を論じたが、如きも、スペンサーの輩に倣ふたるものだ。

#### 2 科學哲學の妥協的態度

第二の様式に属するものには、シヨツベン、ハウエル、ロツチエ、フエヒネル、ヴンド等がある。思辨的形而上學的の觀念論に立脚しながら、之を科學的方法で説明せんとするものだから、隨て哲學、科學の調和的妥協的態度を持つる者と謂ふべし。シヨツベン、ハウエルは、ヘーゲル死後獨逸に最多く歡迎せられた學者であつて、ヘーゲル學派の理想主義、國家主義に反抗し、宇宙の圓滿調和を排し、人生は生活慾望の目的意志に依つてのみ行動するものだと論じ、人生の理想を否定し、人生に悲觀厭世の思想を與へたものだ。東洋の佛教、老莊の説を祖述し、人生をして無理想、無努力の消極的態度に出でしめたのだ。何が故に獨逸に此の思想が歡迎せられたかを思ふ時に、吾人は思想の世道、人心の興廢に大關係すべきを思ふて、思想善導上特に留意すべきものだとの警告を得た事と思ふ。當時の北獨逸は、幾度か國家統一の計畫はあつたが、此が何時も破れて、民心は努力、理想の無効を體驗したる際とて、人心沈滯、國家を輕視し、茲に涅槃、無常の三昧に入らんとした時であつたからであつた。フエヒナ、ロツチエ、ヴントは、哲學は科學を外にしては空想である、哲學は科學の結果であり、統整の位地に立つもので、然かも思辨の上に立つべきものだと言するのであつた。

### 3 科學の批判的態度

第三の様式に属するものには、エルンスト、マツハ、アペナリウス、ボアンカレ、等があつて、

要は科學を哲學と結合して、科學を批判するのが、哲學の任務であるとする論者である。實證主義の餘りに科學を信用し過ぎて、一切を科學で解決するの不可を悟り、科學的態度を批判し、以つて純正なる經驗に依つて哲學を建設せんとするのである。

### C 當時の人心に及ぼしたる影響

要之、實證主義の哲學は、十九世紀は、ヘーゲル滅後、一八三一年から、一八七〇年頃に至る、約四十年間、十九世紀の前半を横斷して、全歐に勢力を占めた思潮ではあつたが、此が如何なる結果を、社會人心に與へたであらうか。實證主義は、實に科學萬能主義である。隨つて宇宙、人生の根源推究に對して絶望し、精神生活は自然の奴隸となり、物質を以つて人格を無視し、生活は唯物的機械的に墮して、皮相淺薄となり、人生に對する懷疑、煩悶を増大して、不調和、不具醜惡の肉塊たらしめ、只現實生活に甘んじて、氣分本位、享樂主義に至らしめ、循俗便宜主義たらしめ、個人主義、利己主義のものたらしめたのは、如何にも残念であつたのだ。社會生活の激變(つては尙後に至りて詳述す)に依り、社會主義の勃興し、社會改造論の急調を呈するに至るは當然の成行きであるまいか。

### D 自然主義の文藝

#### 1 生活狀態の激變



實證主義時代の文藝は、自然主義の文藝である。此の根本基調を研究せんとすれば、生活状態の一變した事を叙述する必要がある。随つて經濟生活の激變を述ぶるを要し、此には産業革命に溯るを要するから、此は次に譲り、要するに科學全盛時代、機械發明に依つて、吾人の生活状態は一變し、生存競争激烈、生活難の爲に煩悶懷疑に陥る者多く、唯物的傾向は、利己主義打算主義に偏し、都市の膨脹は富の増大を象徴し、娛樂の追求となり、分業の隆盛は、勞働の單調激甚に伴ふ疲勞困憊を増し、此が慰安を要求する結果、刺戟性の強烈を要請して、趣味の低落を誘ひ、官能の満足は、肉感享樂に墮するに至つたのであるが、ローマンチツクの文藝は、斯る生活をなす民衆には、餘りに空想に近いものである。春の夜の暖い夢は、切實なる實生活の苦悶を慰するに足りないものである。嚴肅なる秋霜烈日の感が、寧ろ當代の人心の焦點となつたから、自然主義の文藝は、此の人生の要求に對して生れ出でたものだ。佛國に其源流を發して、此が北歐及東歐に蔓延し、露國文學は此の潮流に乗じて、露國民衆の自覺運動と合同したのであつた。(此は既に露國崩壞の條下に述べた一參看)

## 2 佛國に於ける状態

科學萬能時代、生活難に追はれたる時代として、如上の要求に應ずる爲に、自然主義の文學は勃興したのだ。現實曝露、無技巧、客觀的態度を以て、外界の知覺、感覺偏重となり、藝術上の眞

を描寫するを生命とするに至つたのだ。人生の爲めの藝術と化し、現實、平凡の我を描寫して慰藉、反省の伴侶とした社會劇、思想劇から、傾向小説、問題小説となるは當然である。

### 一 寫實主義

寫實主義 Realism は、現實の世相を其儘に描寫するから命名せられたもの。我が井原西鶴の亞流である。佛ではバルザック、フローベル、コンテール兄弟は、其代表者である。バルザックは努めて英雄、貴族を避けて、市井人、殊に勞働者、罪人、遊治郎等を手當り次第に描寫して、其眞を描かん事に苦心し、外面描寫に一點一劃をも見落さず、科學者の如き態度で記述し、特に生理的研究には得意の壇場であつた。フローベルは、人生を悲觀厭世し、運命を冷靜、無私に傍觀し、之を科學的に記述するを生命とした人で、一字一句をも濫にせず、多年の考察と洗練とは「ボワリー夫人」の傑作を出すに至つたのだ。コンテール兄弟は、共に感受性は精緻微妙の性格である。忠實に其觀察を記述した病中日誌の如きは、其尤なる物である。

### 二 自然主義

自然主義 Naturalism は、エミール・ゾラに依つて命名せらる。自然科學の精神に支配せられたから、科學的物質觀、機械觀に基き、殊に人生の暗黒面、悲哀、猥褻の描寫、人生の斷片的、事物を補へて、之に精細なる周圍(ミユウ)の描寫をするのが特色となつたのだ。ゾラが事物の眞相を描寫す

る事の精緻なる筆致は、天下一品であつて、人類の生理學的研究により、遺傳、境遇の研究から其が必然の成行を脚色としたルーゴン、マツカール全書二十卷は、ゾラの傑作である。醜惡下劣も人の真相であるならば、之を文藝に取扱ふに於て何の不可かあらんとの見地に依り、社會萬般の研究をなして精密なる記述をしたのであつたから、當時ナポレオン三世の失脚以來、佛國人心は萎縮沈滞、希望と光明とを失つて、官能生活に耽溺した時代として、ゾラ一流の文藝が、佛國人に愛讀せられた勢は大したものであつた。晩年ドレフス事件に累せられ、佛國政府及國民に憎まれて、ロンドン指して出奔したが、生前ゾラの文藝の價値を景慕してバルテノーに合葬せられ、彼の著作は、永く國民から感謝を受くるに至つたのだ。モーパッサン、プロヴァンサル、フランスの如きは、肉慾的小説、市井一匹夫の暗黒面描寫に墮して、俗世間に歡迎せらるゝに至つたのは遺憾であつた。

### 3 露國に於ける状態……人道主義的自然主義文藝

佛國に起つた自然派の文藝は、此から諸國に波及したが、其良圍はロシアであつた。十九世紀は、其前半頃からロシアの知識階級が、西歐は佛國に留學し、政治文藝の研究に身を窺つたのであつた。此がロシア政府の歡ばざる所となつて、抑壓拘束の嚴令に束縛せられて、止むなく文藝に隠れて、政治を談ずるに至つたのだ。佛國流の自然主義も輸入するが、其は寧ろ其

主目的でなくして、止むを得ず文藝に其隠棲の地を求めたに過ぎなかつた。スラブ民族は、農業の簡易、素朴の生活に甘んじたる時代として、外部的感官的の享樂よりは、主觀的幸福を要求したのであつた。文藝を通して内心の悶え、憧れ、望み、悲しみ等を表現せんとしたのである。要するにロシアの文藝は、人生生活の現實描寫ではあるが、文藝は遊戯に非ず、生の眞劔勝負の生活である。斬れば血の出る生々しき文學である。現實描寫は深刻透徹だ。此の意義に於て自然主義の文藝と謂ひ得るのだ。人生内面の動搖、矛盾、苦悶を深刻に描寫するから、悲愴、凄慘の文藝であつた。ロシア文藝が、世界の文藝に一種の刺戟を與へたのは決して偶然でない。ツルゲネーフ、ドストエフスキ、トルストイ、マキシム、ゴルギの輩出は、眞に露國社會の要求に依つて飛出したる新人であつた。一九一七年迄ロシア國內には、美はしき色彩が、いやが上にも濃厚に彩色をして居つたのだ。社會上、政治上に自由を奪はれて居つた國民は、藝術に隠れて政治を論じたのだ。ロシア文藝の發達は、社會的、政治的壓制の賜物であつた。自由解放、人道主義の叫であり、社會的、宗教建設の喚びであつた。人類最深の要求に接觸したる世界的苦惱、神を人心の内部に求めんとする宗教的情熱の迸出であつた。虐けられた人々、死人の家の文藝であり、百軒長屋の裏棚に淫蕩、祕密、利己の矛盾衝突、生活の描寫であつたのだ。一九一七年の三月には革命があつたが、今後新時代の希望、歡喜に満ちたる清新、自由の道への文藝が、眞

にスラブ平原の間から起るのであらうか。

### E 實證主義の轉機

ローマンチック時代は、一七八〇年頃から其萌芽を發して、一八三一年ヘーゲルの死により、五十年間の華やか生活から、俄然凋落して、以後一八七〇年頃まで、約四十年間は、實證主義時代を現出したが、自然科學萬能は、人類生活を外的、機械的、唯物的、主知的に還元するもので、餘りに人生生活を無視したものである。自然物質に對して、個人精神は、左程に微弱であるか。精神は物質作用の副産物に過ぎないものであらうか。人生には高尚なる價值感情はないのであらうか。如何に努力をしても高き理想に到達し難いものであらうか。ローマンチック哲學の高揚する人生は、果して夢幻であらふか。空想であらふかとの煩悶、懷疑が起らざるを得ないのだ。

### ト 新理想主義時代

#### A ドイツに於ける反動

十九世紀前半期の獨逸は、統一の宿志幾度か挫けて、國民の元氣銷沈し、厭世悲觀に陥り、自然物質の憧憬に走つたのであつたが、何時までも此の趨勢に停滯せず、一八六〇年頃から、一轉化の機運熟して、クレーノー、フイツシャの「カントに歸れ」の絶叫となり、一八六五年オットー

リーブマンの「カント及其末流」の著となり、カントの研究旺盛となる時も、時、一八七一年は、ドイツ帝國建設の大業新になつて、北歐ゲルマニ民族の歡喜は、洋洋々として揚がり、國民は新理想探求の熱に高揚せられて、時代は急轉直下、新時代に入るに至つたのであつた。一八七〇年以後現代に至るまで、之を、新理想時代(新ローマンチック時代)と言ふ。當時ドイツに二明星：ニイチエとウキンデルバントの輩出するがあつた。ニイチエは、實證主義時代の科學萬能では、到底人生の撞着、疾患、煩悶は救済し得るものではないのだ。現代文明の破壊、新文明の建設を要として、勃然蹶起して獅子吼した勢は、物凄しいものであつた。ルツソーと同じく、自然に歸れとあれど、彼の自然は、平凡のものではないのだ。偉大なる人格が、人生の本義である。女々しい、平凡の人を造るに非らずして、不平等の人間を造るのにある。偉大なる人格個性の發揮、生れ甲斐のある人を造り出すにあり、此が新文明改造の第一義であり、と高揚し、個人性の尊嚴を力説したのだ。「超人説」とは此である。現代文明を咒咀し、剛毅不撓の人格を鼓吹したのだ。勇敢、自信、自重、節制を美德として、同情慈悲の如きは、奴隸道德、弱者の道德なりと罵倒して、一世を睥睨した概があつた。此がドイツ帝國發展の機運と合致して、ビスマルク、ベルンハルデ、トライチユケの國家主義となり、軍國主義に變じ、遂に今回の大戦争の大原因をなしたと思ふのだ。ニイチエと相並んだ新人は、ウキンデルバントである。彼は一八七〇年は、年僅に廿

二歳の青書生であつた偶然の諸説『Die Jahren von Zufall』を著し、一九一五年の死に至るまで約四十六年間は、此が力説に全力を傾注した學者であつた。

B ドイツに於ける新理想主義の哲學

今日獨逸西南學派は、ハイデルベルヒ大學を中心として、彼の築いたる根城であるが、門弟リツケルトは、師説を祖述して、茲に新理想主義を鼓吹し、價值哲學の建設に、盡瘁して居るのである。ツキンデルバンドは、前代の科學主義を採用しては居るが、然かも科學的研究法は、之を人文科學には採用するのが誤りであるとし、文化科學(歴史科學)の建設に、一新生面を開いた努力は大なるものがあるのだ。科學的現象は、反復を豫想するものである。隨つて其の現象中から、偶然を棄て、普遍を取り、法則、定理に導くのであるが、文化科學の現象は、其生起は只一度丈である。之を同一現象であると見るならば、之は誤りであるのだ。即ち歴史は偶然の反復である。時代、場所の中に、人類が創造、建設の作用をなして、價值を體現する。其事實が歴史であるのである。個人の仕事、時代の推移は、皆各人が自家の理想を體現したものであると論じて、自然科學の領域から人文科學を救済し、精神科學は、要するに人類理想の具現を研究するものであるとして、茲に新理想主義を鼓吹した功績は大なるものがあるのだ。人類は自家の理想を向上せしめて、絶えず之を實現する文化事業に全力を傾注すべきである。人生の究極

目的は、現實に捉へられて唯物、物質に墮するものではないのだ。文化具現の努力こそ、人生最高最貴の天職なりと謂ふて居るのだ。獨逸には、此の外、マールブルヒ學派にコーヘン、ナトルブあり、獨逸學派にフレンタノ、マイノング、ブツサールあつて、各其立場を異にして居るが、最近思潮の新理想主義の價值哲學を唱導する點は、共通である。新ヘーゲル學派に、オイツケンあり、自然科學は自己保存、生存競争、環境順應、實用を主として居るが、却つて眞善美の根本原理を失つて、宗教は迷妄に、道徳は功利に墮するを慨し、舊理想主義の宇宙は、合理調和であるとの説にも反對して、人生は奮闘である。精神生活全部の奮闘であるとして、自主獨立の人格實現を主張するのであつた。

C 英佛に於ける狀況

此等は獨逸哲學界のほんの大觀に過ぎないのであるが、英佛に於ても、略其歸趣を一にするを窺ひ知り得るのである。英米兩國は、民族性が上來度々陳述した通りに經驗現實常識を宗とするもの、隨つて學術に於ても實際的立脚地に立つは止むを得ないのである。ベンザム、ミルの如き碩學、大家も、自然科學尊重は、引いて人生生活には功利説を高唱したのだ。チャールズ、ダーウキンの「進化説は、經驗説を具體化したものだ。スペンサーの進化的快樂説皆同一の色彩に屬するのであるが、トーマス、カーライルの鼓吹に依つて、ドイツ學風の輸入とな

り、茲に新カント派の勃興を來たし、グリーン<sup>Green</sup>の唯心論は、神本的自我實現説となり、英國としては非常なる變化である。カーライル<sup>Carlyle</sup>の如きは、唯心論の立脚地に立つて、人生の努力理想を高調し、英雄崇拜論となつたが、此は獨逸の唯心論、精神主義を採用し、人格主義を宣傳して功利思潮に反抗したのであつた。シラー<sup>Schiller</sup>は人本主義の立場にあり、依然としてブラグマチスト<sup>Pragmatist</sup>（實用主義論者 *Pragmatist*）ではあるが、尙真理の標準は、人生生活の有利、有用に依つて決定し得ず、理想主義を借るに非ざれば不可能である事を主張するに依つても、近代思潮の趨勢が、經驗主義の英國學界を如何に風靡し居るかを知り得るのだ。バートナンド<sup>Bartolando</sup>、ラッセル<sup>Russell</sup>の如きは、新實在論の立脚地にはあるが、社會改造の理想を論じて、人生の向ふべき道は富、權力、戦争の如き死に向ふ衝動でなくして、愛、科學、藝術の生の喜悅に向ふ衝動でなくてはならないと高揚するに至つては、精神生活の尊重を力説するもので、英國近代の思潮の傾向をも知り得るのだ。佛國では、アンリー、ベルゲソン<sup>Bergson</sup>の如き、其實在は純粹、持續で、不斷に流轉する所謂創造進化説を主張し、人生の最高理想は、此の創造進化の過程を毎刹那に具現するに在りと論ずるが如き、近代思潮の歸趣を知り得るのだ。

#### D 米國のみは經驗主義 … 實用主義と其批判

如上の様に現代の思潮が理想主義に趣いて居るのに、獨り米國のみは、經驗主義の立場に

嶋居して例の實用主義 *Pragmatism* を鼓吹して居るのだ。ブンダグロサクソン<sup>Bundagrosaxon</sup> 民族の經驗主義、功利主義は、米國民には一層其色彩が濃厚である。民族性と其思潮との關係は、此に於ても其相即不離の状態にある事を知り得るのである。實用主義は、絶対主義、主知主義に反對して起つたものである。絶対主義は、ギリシャ時代のソフィスト<sup>Sophist</sup> 一派が、判断の標準を人に置いて、人は萬物の尺度であると謂つたに對して、三哲は口を極めて其淺薄、皮相なる事を論破し、プラト<sup>Plato</sup> は絶対主義を提唱し、眞偽は何に依つて判定すべきかと謂へば、完全無缺なる實在に照して之を決定し得るものである。眞善は此の實在の模寫に過ぎないとして、永久不變の絶対的實在界を立したのに發源して居るのである。所が世の中には眞善美のみが存在せずして、偽、惡醜が存在するのは、如何なる理由であるかと謂へる事は、遂に説明し得ずして過ぎたのであつた。之を決定するには、獨斷論か、懷疑論か、不可知論かに陥らざるを得ないのである。然かも實在は、形而上學的考察に過ぎず、人生との交渉は、餘りに空疎である。止むを得ず、人は萬物の尺度であるとの人本主義を見るに至り、隨つて眞理は自己直接の人格的經驗を與件として、其眞偽を決定せんとするに至つたのだ。絶対主義は眞理、法則を靜的に考へて、之に少しも進化發展の跡を認めないのである。然るに科學の進歩に依て、眞理、法則の可變なる事を實證せられ、ユークリッド<sup>Euclid</sup> の幾何學等に於ける幾何學の法則、例へば三角形の内角の和は必ず

しも二直角にあるざる事を實證せられ終にポアンカレをして真理も矛盾あるばかりでなく、只人間に便利なるものなりと謂はしむるに至つたのであつた。進化論の發展は、凡てが可動的なる事を實證して、茲に經驗即實在説となり、永久普遍の實在説を否定するに至つたのである。然らば日常經驗が實在であるとすれば、其眞善美は何によつて決定するかに至つて眞とは實用にありと謂ふに至つて、再び其難局に到着したのである。此を倫理的に謂へば自利主義に墮するに至り、世に一定の標準が立たない事に至るのである。斯くして實用主義は現在幾多の批難を受けて、惡戰苦闘をして居るのである。其宗教の如きも唯物論者の如くに神を否定するものに非らず、寧ろ宗教を尊重するのであるが、其神は超越的神を否定して之を内在的とし、神を原理とせずして、之を目的とし、神を最初のものとして、之を究竟的目的とし、神は要するに吾人に依つて形成せられ創造せらるる過程なりとし、吾人が努力に依つて、將來立派なる神を創造すべきものなりと論ずるに至つたのだ。此等唯理絶對主義に反對すると同時に、主知主義に對抗し、彼の純粹理性の如きは、一種の假想で實在ではないのだ。吾人の知的作用は、情意を離れて單獨に存在するものに非らず、情意の目的活動が、寧ろ知的活動の根本動機でありとして、主意説を採用するに至つたのだ。随つて眞偽の判断は純粹理性の如き超越的原理に依るに非らずして、目的興味により、其實用效用によつて決定せらる

べきものなりと謂ふに至つたのである。反言すれば、情意の満足が眞偽判断の規程となるのであるのだ。實に認識過程を支配するものは、叡智に非らずして、實に精神生活の有目的性なりと決論するに至つたのだ。随つて經驗は、生活の動的過程の全體であつて、實在即經驗である。二者同一物の二面に過ぎないのだ。經驗は變化の過程を表現する語。實在は内容方面を示すものだとするのである。要之從來の唯理論、超越哲學に反對して、經驗論、主意論に立脚し、現實的生命の哲學を鼓吹せんとするものである。アブリオリを否定するが爲に、新理想主義派からは深刻なる批難を受けつゝ、あつて、將來此が如何に進轉すべきかは注意に値するものと思ふが、此の哲學觀に立脚して、教育學説を建設して居る米國の教育思潮は、自ら我國教育界に甚大の影響を與へて居る事を忘れてはならないのである。主意説を奉じて、人格主義を標榜して居る點が、教育上の過去の弊害を指摘して居るのである。現代思潮は、生の充實を要求し、自己意識の擴張、人格價値の實現を要求して居るのであるが、此が社會的には、デモクラシーの主張であつて、随つて民本主義となり、自己を自由なる一個人として、叡知の如き、超越的宇宙的勢力を排斥し、寧ろ之を方便として認容して、自己の情意の創造をなす點に、個人としての眞正の自由を容認する事となり、眞の民本主義を發揮し得るとするのだ。随つて教育上に於ては、個性の尊重となり、兒童内部生活の開展を自由ならしむるのが、眞の教育なりと

極論するに至るのだ。児童を静止の状態に置かずして、自發活動の状態に置くにあり、指導にあらずして教師は暗示の位地に立つべきである、自から考察して眞の個性の發達を示さしめよと謂ふにより、創造教育過程尊重の教育となるのだ。時代に適應せしむる教育に非ずして、児童の生活に即したる教育が眞の教育でありとし、社會の方便視する児童にあらずして、児童自からが社會的個人として行く點に、眞の社會の改造も行はるゝに至るとするのである。詳しくは後日に譲りたい。

#### E 新理想主義の要約

要之、新理想主義は、舊理想主義に比して、一層醇化せられたるものである。科學萬能時代を經過したるが故に、實證主義の洗練を経たるは、其特色の一である。理想が主觀的、形式的、經驗的、一元的、內在的たる點が、殊に其異彩を呈するものである。世界を生活でありとして、生命の哲學となり、隨つて主知的に反對して、情意本位の哲學となつた。生活の根本に潛める眞相の探明には、分析の不可能を悟つて之を直觀で捉へんとして居る。無限の世界中にあつて、有限の生活をなす間に、幸福、光明を得んとするのであるが、運命の不可抗力が在つて如何ともする能はずとしても、毫も厭世悲觀に墮する事なく、聰明なる理解を以つて人生を悟達し、一向に奮闘、努力、光明、歡喜を味はんとして居るのだ。傳説、權威を排斥し、清新、自由の自我を基礎と

して、新生活の價值實現に入らんとして、創造本位、人格本位の人生觀を立して居るのだ。人生に對する熱烈なる愛慕と執着とを有して、向上努力せんとする自我の努力は、更に社會聯帶、共存主義の下に、自我の覺醒を要求するに至つて、現代思潮の根本基調に到着したものと思ふ。デモクラシーの本義は、茲に在らねばならぬのである。此所に至つて、現代文明の缺陷が救済し得るのである。現代文明の短所は、實に機械的、唯物的、皮相的、外的、物質的、分科的、自利的である點であるのだ。之に對して、全的生命の意義價值を力説し、生活の統一と、充實との可能と必要とを力説し、新しき理想に向つて、全精神を傾注して、猛進する動因を與へ、個人をして自己保存並に社會共存の爲に貢獻せんとする復活の元氣を鼓舞し、更に物的以外に神祕玄妙の心靈界ある事を憧憬せしめ、科學、藝術、宗教の混融を理想とするに至つたのだ。

#### F 新理想主義の文藝

現代の哲學は、如上の特色を有するものであるが、更に文藝に至つては、之を最鮮明に表現して居るのである。自然科學萬能時代にあつては、人類は自然の法則に左右せられて、機械的に束縛せられ、境遇、運命の儘に肉感的、享樂的、唯物的の生活に墮したのであり、意氣地なき人類に落ちたのであるから、隨つて當代の文藝は、此の人類を捕へて、其の眞相の描寫をなさんとしたのが、所謂自然主義の文藝であつて、平面描寫、客觀描寫に流れたのは、亦止むを得ない

のであつたが、時代思潮が轉回しては、斯る生柔しい事では、到底現代人の感興を惹き得るものでもなく、機械的法則境遇運命に反抗し、因襲道德、法律、社會、生活難に反抗して、茲に自由を求め解放を叫びて止まない生命力、個性表現の慾望、人間の創造性を強調するに至つて見れば、文藝は、此等人間苦惱世界的煩悶から解脱せん事を要求するは理の當然であるのだ、吾人の胸底には、奥深く潜める内心の悶え、苦みがあるが、此の人間苦、世界的苦惱を経験しつゝ、然かも人生を少しも悲觀厭世せずして、人生の行路を突進せんとするのが文藝であるのだ、非常なる痛手を負ひ、煩悶、苦惱に悲みつゝ、も、人生を飽くまで愛慕執着して、此から放つ呪咀、憤激讚歎、憧憬歡呼の聲が、即て文藝となるのである、斯くして當代の文藝は、眞善美の理想に向つて向上の一路を辿り行く生命の進行曲であり、又進軍の喇叭であるのだ、然かも此の人生現實の奥底に潜める或物を掘み、更に之を具象化、象徴化するに至つて之を象徴主義 (Symbolism) の文藝と謂ふのである、抽象的の表現法では無用である、具體的の人物、事件、風景等を生きた儘に、此を透して表現せられたる時に於て、其内部の真相が、外部に活躍するものである、此の具象性を賦與するものが、即ち象徴 (Symbol) であるのだ、色で謂へば、白は純粹清潔を象徴するのだ、黒は死や悲哀を、黄金色は権力や、光榮を表明するのである、象徴の稍複雑なるものとなれば、或は諷諭、或は寓話によつて表現せられ、更に深刻になれば、ダンテの神曲が、中世の

宗教思想を、ミルトンの失樂園は、文藝復興以後の新教思想を、シェイクスピアのハムレットが懷疑の煩悶を暗示象徴するが如き、茲に至つて眞の藝術品となるのである、象徴主義の文藝には、或は未知の神祕境に入つて、直觀的悟入の心境に到着せんとするものもある、然かも過去の浪漫的文藝が、徒に空想に走つた恨みがあるのに、象徴主義の文學は、現實の苦き經驗を、科學的精神の洗練を経たる文藝であるからには、神祕に入つても、其處に餘程の深刻さを異にし居るのである、沈靜の方面に立つて人生の批判をなさんとする文藝であり、向上努力を重ねて確乎不拔の信仰に到着せんとする文藝である、考へさずする文藝に非ずして感じさずする文藝である、讀者を空想の境に誘ひ去つて、之を陶醉せしむる刹那に、沈黙の境地に入らしめんとする文藝であるのだ、非物質的、情調本位の文藝であるのだ、作家には、瑞典のイブセン、那威のストリムベルヒ、獨逸のハウプトマン、ゾーデルマンあり、ベルギーのメーテルリンク、英國には、オスカー・ワイルド、之とは稍所屬を異にするが、バーナード・ショーウあり、佛國には、ローマン・ローラン、ピエール・ロッチ等がある、此等人士に共通の點は、現代思潮が要求する人生の愛慕と執着、此が爲に奮闘努力して人生の光明と歡喜とを獲得せんとする情調が、何れにも漂ふて居ると謂へる事は、誠に愉快な事と思ふ、自然派の作家が、人生に對して客觀的傍觀的態度を執り、人生の斷片を描寫するが如き、まだるつき行き方をせずして、直に



流動し躍進せんとする生命の眞の中核に突入せんとする熱烈なる態度を執つた事である。現代歐洲最大の作家であるローマン、ローランの傑作、ジャン・クリストフの如き、人生生活の奮闘が、此の作の中心思想であるが如き、讀者に一讀を推奨して止まない名作と思ふのである。強烈なる自我の創造、自由解放の叫び、現實生活の充實、社會聯帶の共同公存の生活下に、自我の創造をして止まない現代は、茲にデモクラシーを驅つて、遂に文化主義に向はしむる一大轉機でなくして何であらう。

### チ デモクラシー運動の進展

#### A デモクラシーの社會化

前述に依て、十八世紀末から現代に至る哲學、文藝の大觀をしたから、再びデモクラシーに戻つて、十九世紀以後の推移を述ぶる時となつた。中古の十字軍遠征を動機として、西歐、南歐に互つて起つた民衆覺醒運動は、デモクラシーの勃興に、屈竟の聲援を與へ、ブルジョア階級の擡頭となり、近世に入つて唯理思潮の純理方面から、個人の自由、平等を要求するに至り、遂に宗教、政治、學術に社會改造に幾多の改革を斷行したのであるが、要は個人的、特色濃厚で随つて反社會的、反抗的、爭鬭的態度に出たもので、決して純眞、純潔の思潮として之を許容すべきでないのだ。佛國革命の推移を一瞥しても、如何に其動機、其影響が不合理であるか

を察知し得るのである。十九世紀から現代に互る思潮變遷の梗概は、前既に叙述したのである。現代は科學萬能の弊、唯物、功利の害に飽き足らず、人生の眞味は、空想ではなく、科學、經驗の試練を経たる後の理想憧憬に至り、奮闘努力、生の充實、統整、創造を社會聯帶公存の間に實現せんとする要求の切なる時として、デモクラシーは、此の趨勢に引かれて、轉化の途に上つたのであつた。今之を佛國の社會に例證を探れば、最標本的に其趨向を察知し得るのであるのだ。佛國は十七、十八兩世紀、殊に十八世紀に入つて思想界に大動搖を起し、其結果が革命となつたのであつたが、社會の大破壊に依つて、其結帶は斷絶せられ、民心統一を失し、自利に走り、收拾すべからざるなきに至つたからして、佛國識者の憂慮は格別で、思想方面、生活方面から、此が改造を企圖した苦辛は大なるものがあつたのだ。傳統派は、古來の歴史、傳統を尊重して、中世の世界に佛國民を復歸せしめんとしたのもあつた。一度新しき方面に向つたものを、凡て中世の狀態に戻すと謂ふ事は、餘りに固陋であり、淺見でなくてはならないのだ。到底此丈では、正當の方途に向はしむるは、徒勞に歸せざるを得ないのだ。社會改革派が起つて、傳統に偏せず、復古に捕へられずして、新社會組織の建設に意を用ひたのであつた。サン・シーモン、ブーリエ等の如きは、社會組織の改造と、人心の改造との兩面からして、共同連帶を國民に造らんとしたのであつた。オーギュスト、コムトは、實證哲學の建設者であり、其實證哲學の陥るべ

き弊害は、現實に拘泥し、唯物主義に墮するにあつて、哲學上幾多の缺陷ある事は自覺して居つたのであつたが、十八世紀思想界の如き定説、信仰の人生社會に確立して存在しないやうでは、到底人心に安定を與へ得るものでない事を知悉して、兎にも角にも、宗教、道德等には共通の定説、崇高なる信仰心の嚴存する事を實證せんが爲に、如上實證哲學を創造したのであつた。尙此丈では不安心で堪へられないから、晩年には人類教を主唱し、人類博愛の思想を高調すると同時に、個人と社會との關係を明晰にし、個人は社會連帶の一成員である、社會と個人とは對立的關係のものに非らずして、一種の有機的、團體的の關係をなし、社會體に對し個人は社會構成の一細胞の位地に立つべきものであると論述して、社會學の創建、社會連帶説 *Solidarity* の根據を据えた努力は大なるものがあつたのであつた。十九世紀の愛嬌科學たる生物學は、チャールルス、ダーウキン、ワレリス等の努力に依つて、其發達を成し遂げたのだが、此の科學が人類社會の考察に利用せられて、人類は社會的有機的關係にあるものだとの説明に大なる刺戟と教訓とを與へた事は、論ずる迄もない事である。然かも生物は、生存競争 *Struggle for Existence* と同時に、相互扶助 *Mutual Aid* をもするものであるとは、チャールルス、ダーウキンの種の起源中の二大骨子であるが、不幸にして生存競争の方面のみが力説せられて、十九世紀には、世を適者生存、優勝劣敗の争鬪社會に誘ひ去つた様な感がするのである。殊に十九

世紀の國際關係は、此を象徴した様な根が切にあるのだ、相互扶助の側面を輕視するのは、ダーウキンに對して恥づべきであるのだ。

#### B 佛國に於ける社會連帶責任説

斯くの如く、生物學の進歩に依つて、個人と社會との關係は明白になり、個人は社會的存在物として、社會連帶の一人格者であるといへる社會連帶説が、佛國に提唱せらるゝに至つたのであつた。チュルク、ハイムから現代に及んで、レオンブルジョアに依つて、一層深化せられ、此が一方には、佛國の民心に一の結帶を與へ、他方には、個人的デモクラシーを醇化して、社會的たらしむるに至つたのであつた。レオンブルジョアは、個人は絶對的、孤立的存在物に非らずして、社會的、相對的の生活をなすものである。吾人の心身的存在は、一に社會的連帶の賜物であるのだ。個人は時間的に祖先以來の延長生命であると同時に、吾人の使用する言語、思想、感情、儀禮、風習等の文化は、一として社會共同の財産に非らざるはないのであるが、更に個人の生活は空間的に世界人類の所與に關與せないものはないのである。衣食住から始まつて現在の社會は、眞に空間的連帶の關係に非ざるはなしである。斯く個人は社會的連帶共存の一細胞として、始めて現實的生活を成し得るのである。反言すれば、個人は社會に對して一個の債務者であるのだ。債務は法律上、個人の自由契約に依つて成立するものだが、斯る法上

の契約は、個人對社會間にはあつたのではないが、社會の所與に依つて個人が生活し得るのは法律上の準契約に擬すべきものである。此の準契約によつて、個人は社會からの債務者である。と論じたのは、餘程巧妙の説明振りだと思ふ。權利を主張する前に、先づ債務の履行を要件とすべきである。社會奉仕をなして後、徐々に社會生存權の主張をするのが隱當であるのだ。社會聯帶の思想は、デモクラシーを醇化するに屈竟の思想であるのだ。此等思想の洗禮を受けたデモクラシーは、社會的・自由・社會的・正義を主張するに至り、十八世紀迄のデモクラシーは、茲に其本質上に變色を強迫せらるゝに至つたのである。反言すれば、デモクラシーは、社會的個人主義とならざるを得ないのである。此の間に政治的改革は着々進捗し、立憲制の施行となつて、自由平等の確證となり、更に選挙法の擴張となつて、デモクラシーの要求は、各國家が容認したのであつた。

C アブラハム・リンカーンのデモクラシー宣言

一八六〇年、北米合衆國には……アブラハム・リンカーン入つて任に大統領にあり、自由主義の念熾烈で、之を敢行する勇氣を備へたる人として、折柄内亂は、南北戦争を惹起した。奴隷解放の人道問題を経とし、産業上の自由保護政策を緯として、一八六一年から五年に互る人道戦争の中間の一八六三年十一月二日に、戦績記念碑の除幕式が、ゲツテスブルグに行はれ

た際、リンカーンのなした演説は、デモクラシーの宣傳と、政治的デモクラシーの意義を明白にした大演説であつた。

回顧すれば八十七年前には、自由に生き、一切の人類は平等に創造せられたりとの思想を以つて、一新國家を建設したが、然るに今は内亂突發して、デモクラシーは、其試驗を受けて居るのだ。祖先の偉功を思ひ、The Governments of the people, by the people, for the people、人民の人民に依つて、人民の爲の政府をして、地球の表面から消滅せしめないのが吾人國民の責任である。此の政府の維持發展が吾人の爲に残されたる大事業であるから、最善の努力を盡さなくてはならないと獅々吼したのであつた。

D 政治的デモクラシーの意義明瞭

此の人民の人民に依つて人民の爲の三句は、政治的デモクラシーの意義を宣揚したと同時に、之が又國體を異にせる國家國民の間に批判の種子となつたのである。リンカーンの講演の眞意竝に最力を入れた所は、何處であるかは、地下からリンカーンを呼び起して、之を聞糺すに非ざれば知る事は不可能であるが、其當時リンカーンの大演説を傍聴したる人で、プリンス頓大學の總長であつたジョン・グリー、ヒツベン、の感想談に依れば、ミシシッピと漸次に語調を強めて居つたと謂はれて居る。だからして政治的デモクラシーは、政治

の目的は人民……全<sup>○</sup>民の安寧、幸福、進歩を圖るにあり、此がリオンカーンの主眼である。謂ふのもある、斯くデモクラシーを解釋すれば、何れの國家でも、聖帝明君ならば、常に施政の大眼目を茲に置かないものはないのだからして、デモクラシーは、世界の各地に、古來から相當に行はれて居つたとも謂ふべしである。

#### E 我國家とデモクラシー

之を我國に就いて謂ても、三千年間の國史は、實に歴代帝王の偉業の結晶であつたので、デモクラシーの眞義たる國本主義を、體現して居つたと謂ひ得るのである。然らば、デモクラシーの人民の、人民に依つてとは如何なる意義であらうか、人民のとは、主權の所在を意味し、人民に依つてとは、統治權の運用を示す語であるのだ。統治權の所在は、國體の決定するものである。國體とは其國の自然に發達したる歴史の成果で、變がては國民の信念となつたもので、各國共に其建國以來の歴史の成果が、即ち國體となるのである。だから侵略的國家、争鬪的國體を有する國家では、當然主權は國民にあつて、十八世紀時代に高唱せられた、主權在民説は決して不穩當ではないのだ。然かも其は各個人には存在せず、國民全體の中に普遍して居るのだ。北米合衆國の建國は、先住民民族印人から謂へば、侵略的國家であるが、縱令其は別論としても、アングロサクソン民族が、年代を逐ふて移住し、建設した國家でありとすれば、當然主

權の所在に就いては、民主的國家であるべきだ。舊慣歴史の何物も存在せず、加ふるに舊帝國に對し、新國家を建設せんと意熱烈であつたからして、世界人類に共<sup>○</sup>和國の新組織を提供したのであつた。此が北米合衆國の生命であり、特色であるのだ。今デモクラシーの思潮の隆盛時に際して、デモクラシーを歓迎し、或は之を恐怖する人士が、若し其國體を云爲する意味ならば、痴人夢を語るの愚にも及ばない事と思ふ。自家祖先以來の良風美俗が其國體をなし、自家の生命を構成して居るのであるから、國體即國家の生命である。此の國體の改造を云爲するのは、自家内體の顔容、軀幹、毛髮を改造せんとするの愚に比すべきものである。生命を毀損するなくば幸福である。如何に世界改造の機運熟したりとて、國體の改造をなさんとする人はあるべきではないのだ。獨逸、露三國の崩壞も、實は其古に復つたに過ぎないのだ。身體的改造には數世紀に互る間に皮膚、毛髮、唇の厚さに於て、形態的には多少の變化はあらふが、遂に黒を白とし、白を黒とする事は不可能と思はるのである。アフリカの黒奴が、一六一九年に和蘭人に依つて、商品として北米の野に輸入せられて、茲に三百年、人口増加して千五百萬人に上つたといはれて居る。此の間北米自然の環境に順應し、或は雜婚等に依つて、皮膚の黒色が漸次褪色する實例はあるが、アフリカ人たる本性は、永久に消滅し難いものと見るのが穩當である。況んや其の國體が、只單に信仰的で、毫も聰明なる理智の試験をも絶す、寧ろ不合理

的のものであるならば、之が改造も或は必要上許すべきであらふが、國家生活は、現代社會の最進歩たる組織であつて、中にも我國體の如きは、合理的にも、道徳的にも、世界の何れの國にも優して、萬國には模造し難き美事なる成果であるとしたならば、之を保存し之を美化して、其特色を發揮するのが、其國の發展上、國民個人の生存上に於て、一入緊要の事であり、國民の誇るべき事と思ふのだ、眞に我國體は世界無比である、金甌無缺の國寶であるのだ、其内容は後に尙評論するから略する、今デモクラシーの意義を討檢するに際して、北米風にするのが、世界の大勢であると曲解速了する人士あらば、此は眞に悲しむべき現象であつて、自家生命の眞義を悟らざる愚人の夢と思ふ、只此等の人士に對しては、我國體美を十分に理解せしむるを必要とするのだ、先に三帝國崩壞の條下に詳論した様に、彼等には滅亡すべき十分の理由と缺陷とを有して居るのであつた、デモクラシー思潮の輸入波及に對して、一部識者の歡迎又は恐怖は、痴夢か、老婆かに過ぎないものだ、我國體の精華は、決してガラス細工の如き脆弱なるものではないのである、三千年間鍛錬、試練を経たる世界的奇蹟の一とも謂はるべきものと思ふのだ、だからリーンカーンの三意義中、討檢すべきは、僅に第二の意義であるのだ、人民に依ての義である、我國は神代の昔から、廣く會議を起し、萬機公論に依て決せられたる美風を存し、之が文獻を隨處に發見し得るのである、神代史、古代史を研鑽するに連れて、益國

體美の優秀性に驚かざるべきである、天安河に神集ひに集ひ、神議りに議り給ひし太古の昔から、上古、中世に互つて歴代列聖の大御心は、一に此大方針に依り給ふたのだ、只我は一家膨脹の國家的國家である、君父、臣子の關係的國家で、其敬愛の至情に依つて成立したる道徳的國家であつたからして、西歐民が自覺して、反抗的、争鬭的態度に依つて立憲制を獲得した國とは、自から其運用の方法を異にした爲に、現今の如き形式を整へなかつたと謂ふ迄である、此を以つて明治聖帝が、明治維新の五ヶ條御誓文の前書にも、皇祖皇宗の遺訓とあるは、其精神の實在を顯證し給ふた不磨の皇謨と思ふのである、だから此を歐米の大勢に依つて、其形式を御採用になる事は、何等の躊躇と孤疑とを要しないのであつたと思ふ、世界の何れの思想にも順應し得る自由、無碍の國體である我國こそ、眞に醇美なる歴史を生んだものであつた、吾人祖先の偉烈、忠烈を敬慕すると同時に、此の至醇至美の血を受け繼げる吾人後昆の光榮と幸福とは感謝の外にない事と思ふ、だが其立憲制を布いて我は漸く三十餘年を経過したに過ぎないのである、其近世的政治には不馴の民族であり、民衆も、政治に對しては訓練を経て居ないが爲に、目下の議院政治は決して十分に進行して居るとは謂へないのである、だがリーンカーンの第二意義は、我にも具在して居つた事は、此で明白となつたのだ、デモクラシーの横溢する時代、之を政治的に眺めて見て、之に對する歴史的考察は、如上の通りで決し

て誤らざるを確信するものである。第二の民に依つてに就いては、今後國民の政治的教育を向上せしめ國民の政治的自覺に依つて其形式も整ふのであらふ。選舉法の問題が政治的デモクラシー中に、今後の問題として残存する丈で、他は何等珍奇の思想でも危険の思想でもあらざる事を述べれば、此の項に於ての任務は盡きたと思ふのだ。

### 三 デモクラシーの總括

#### 1 何故にデモクラシーは世界的になつたか

デモクラシーに關しては最早歸結をする時が來た。如上の叙述に依つて、デモクラシーの起るには、個人的、社會的共に、自覺期に到達するに非らずんば、發生し難いものである事は、實證せられたのである。然かも其内容は、自由平等であつて、其を防禦する爲に、正義を要するものたる事も知れたが、眞正のデモクラシーは、個人的ではなくして、社會聯帶の公共共存の條下に於て、始めて達成し得らるゝものたる事も證明せられた。茲に残つて居るのは、此が現代の根本基調であり、然かも、此が世界共通の現象となつたと謂ふは、其は何に依るかの問題が未解決の儘に残存して居るのであるから、以下之が説明する時とはなつたのである。現代生活の根本基調と謂ふには、デモクラシーの内容が醇化せられて來ての事である。世界共通の

現象となつた事は、世界の民衆が相當に自覺期に到達した事を豫想せしむるのである。然らば其事實はあつたかと謂ふに、十九世紀文明に依つて、歐米民族が自覺の境地に向つた力は、大なるものであり、政治的、社會的改造の運動が、潮の如く寄せ來た事は、文藝復興期の其にも優したる盛況で、曰はく人種解放、民族自決、立憲制實施、選舉法改正、擴張、農奴解放、社會主義の勃興、一として自覺に伴ふ改造運動でないものはないのだ。此には教育制度の完備充實に伴ふ民衆の文化活動が旺盛になり、學術、文藝、科學の勃興と同時に、印刷、出版の發達に依つて、思潮宣傳の普及が容易になり、生活難に對する奮闘は、民族自覺の眞生命となつて、遂に世界的に民衆の自覺を喚起したのであつた。就中科學新聞雜誌、軍隊學校の四つは、民衆教化向上の四大原動力として、千古無比の自覺黎明期に入つたのである。斯る形勢の間に、突如歐洲大戰亂の勃發するあり、世界を舉げて之に参加する姿となり、交戦國民が全力を傾注して、國家の爲に戦闘したる間に、個人の實力を試験せられ、從來までは、左程に自家も自認せず、社會からは、より低く認められ過ぎた民衆も、六年間の戦争に、其實力を相當に悟得するに至つた。機運は、蓋し誰人も之を抑過する事は不可能であつたと思ふ。男も女も、老いたるも、若きも、夫々相當に自家の實力を認めざるを得なくなつたのであつた。北米合衆國が、一九一七年最後れて参加し、俄造りの兵二百萬人を、歐洲戦線に送つた爲に、獨逸軍側に、精神的打撃を與へた事が

大であつて、敵國崩壊の主因に數へらるゝのは、其が幾多訓練を経たる精兵と謂ふ義であるよりは、枯木も山の賑ひである所謂民衆の力が然らしめたのである。虐けられた各種の階級が、此所に解放を絶叫し、改造を要請するのは、勢の自然であるべきだ。只此の際吾人は其解放改造の主體が合理的、穩健、中正的である事を要求するのである。破壊、革命は避くべきである。建設、創造でなくしてならないのだ。民衆の自覺が如上の勢で、世界各地に勃興した時に、北米合衆國の大統領ウエルソンは、一九一七年四月六日の宣言書に、米國は世界のデモクラシーの爲に止むを得ず立つのであるとの大宣傳をなしたので、デモクラシーは、忽ち世界の隅々にまで響き互つて、我も彼もとデモクラシーを口唱し、其正體とウエルソンの眞意とを究はめずして、世界が一齊に唱導した勢は、今から思つても恐ろしさを感ずる程であるのだ。デモクラシーが、世界的共通現象となつた由來は、如上の經過であると思ふ。

## 2 人類行爲の根本基調たり得るか

然らばデモクラシーは、世界人類生活の根本基調であるべき價值ありやの問題に進まなくてはならなくなつたのだ。

で過去のデモクラシーは、個人主義の立場に於て自由平等を要求したが、此は當時のブルジョア階級の人士が第一、第二の階級人士に對する反抗の叫聲であり、革命の咒咀であつ

た。此では決して穩健純眞の要求とは謂ひ難いのであるから、此が醇化せられて、社會聯帶の公同共存の下に於て、社會的自由、差別的平等、社會的正義の念を加味するものたるを要するのだ。反言すれば、個人尊重、他人尊重、社會尊重が最もよく調和せられて實現さるゝ事が、デモクラシーの要求であるのだ。個人尊重とは、個人の人格尊重の義である。個人の赤裸々なる知識、技能、才幹は勿論、其個人の人格を尊重する意義である。過去に於けるが如く、性別、階級別、國別、人種別等に依つて人を左右するが如き、之を不公正なりとするのだ。男女間には、男尊女卑も罪惡であり、女尊男卑も不合理であるのだ。高度の文化を有するが故に、低度の文化國を侵略するは不都合であると同時に、自國の生存權を主張する事餘りに急であるが爲めに、其本國の厭忌し排斥するにも拘はらず、移民を強要するが如き、公正の原理に悖るものである。さりとて人種の差別に基く感情に支配せられて、謂はれなくも、之を輕侮し、侵略し、排斥するが如きは、決して之を順理と謂ふ事は出来ないのだ。富民であるから尊くして、貧民であるから賤しいと謂ふ理はない。身分門地の高下に依つて人の價值を上下するが如きは、尙更不都合である。と謂ふのである。斯く個人の人格を尊重すると同時に、他人の人格をも尊重し、一切人類が協力して、人格の自由を發展せしむる事を要求するのだ。更に進んでは、社會は各員の共同聯帶責任の團體であるから、此が爲に各員は、其社會の發展に對する努力をなすべしであ

ると謂ふのである。此を社会奉仕と謂ふ。此の三點が調和的に實現せらるゝ、社会を稱してデモクラシーの行はるゝ、社会と謂ふのである。一部分の少数の利益権利の擁護に過ぎない社会は不都合であつて、全社会的、全人的の自由平等正義を要求するのがデモクラシーの究意地であるのだ。斯る要求に對して、我明治の聖帝は救世済民の根本義として、既に五ヶ條の誓文の一に掲げられ、國民指導の根本方針とせられたのである。官武一途庶民に至るまで、各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめん事を要すと宣せられたのであつて、吾人國民は叡慮の程を拜察して、恐懼措く能はざるものがあるのだ。デモクラシーの本義は、よく我が國に體現せられて居るのである。

### 3 デモクラシーの根本概念

要之、デモクラシーは、凡百の情實階級拘束等を打破し、解放して、一に公明正大の天則に基いて、人類生活を律せよと謂ふ義であるのだ。だからデモクラシーは、之を公正主義と譯した方が、最其意義を表現し、象徴して居ると思ふ。民主、民本の譯語は、往々にして狭義に偏する恨みを脱する事が出来ないのである。倅人格尊重主義であつて、其人格相當に價値つくるのであるから、各個人には常に機會を均等に與ふる事が其屬性の一となるのだ。社会生活の第一歩を踏み出す際には、恰かも人生長途競走のスタートに立つのであるから、誰人にも機會の

均等を與ふる事を要求して居るのだ。誰人にもハンチー、カッブを附與する事を拒反するのである。勿論各個人は、現實の社会に於ては、事實不平等のものである。男女の性別もあれば、身體の健否強弱、美醜もあるのである。精神上には、賢愚鈍鈍もあれば、環境上の順否もあり、更に不測の故障に基く運不運も伴生するからして、人生のマラソン競走場内にも、其最後の決勝點に到着するまでには、縦令、先後遲速の差を生じ、甚しきに至ては、非常なる運命に逢つて中途倒るゝが如き落伍者の生ずるは、自然の結果又止むを得ないとするのだ。然るに現代の社会を達觀するに、貴賤貧富の階級が儼存して、餘りに個人の天分を無視して居るのであるが、若し之に機會の均等が與て居たならば、夫迄に極端なる懸隔を生せずして、濟むべきものが、何の因果か、貧家に生れ、労働者を親としたる不運の爲か、教育の如きは國民學校の修了期を待兼ねたる親は、直に社会の各種の雜業に追ひ遣つて、遂に其の子は終生貧弱なる低級の生活に泣きながらの一生を暮らさなくてはならないと謂ふが如きは、其の罪何れにありやと謂ふに至るのである。社会組織の缺陷もあるのであるが、人類生活に機會の均等を缺いた爲で要するに公正主義が行はれないからだとするのである。機會の均等を要求するからといって、個人的差異を否定するものではない。悪平等を主張するのではないのだ。社会的平等(差別的平等)の義を含み居るのである。悪平等の義ではないのだ。只出立點のみは、之に均等の



スタートを與へよと謂ふ義で、其の後は各個人の天分のあらん限りを盡させよとの要求であるのだ。スタートを切つた後は、各人の天分に準じて、努力競走をさすべきである。官武一途庶民に至るまで各其志を遂げ人心をして倦まざらしむるの義であるのだ。社会的平等とは、各個人の素質、天分の差異を公認するので、悪平等に非らず、差別的平等を認むるものであるが、其天分素質の異なる各個人も、皆社會奉仕に參與する點社會發展に貢獻する點に於ては、萬人平等であると謂ふ義であるので、過去のデモクラシーが主張した如き、自利的、反抗的、争關的態度とは非常なる差異を有するに至つたと思ふ。公正主義は、實に人生生活の根本基調である。斯る社會の一日も早く實現せんとする事を希望するのが、現代人の最要する叫聲であると思ふ。斯る堅實純潔なる社會を築き上げるには、デモクラシーは遂に其機鋒を他に轉ずるの必要に迫られたもので、民衆の質の改造を先決問題としなくてはならなくなるのだ。社會文化の價值創造は、即個人人格價値の實現であつて、文化主義の主張せらるゝは、當然の道行であるのだ。此は後に詳論しよう。

如上の叙述にあるが如く、各個人の素質天分に基き、人生生活の出發點に於て、公正に機會の均等を與へ、各自が文化價值創造の道程に上るにしても、元來素質天分に於て缺陷を有する不具廢疾、癡癲、白痴等は、到底自由競走をなし得ないものである。勿論此は、先天的に親の因

果が子に酬いての不完全官能者もあり、或は精神的に不具の状態に陥つた不幸不運の人であるから、デモクラシーの社會では、此等の發生する原因芟除には、一入努力し、禁酒禁煙から、遂に優生學の見地に立つて種族改良の着々實行せらるゝ、矯風改俗の道德的社會に進行すべきは當然の道行であるが、差當つては、各個人を競走圈内には入れても、落伍するし又入れ難き者も相當にあるのである。さりとて之を放棄して我關せず焉と社會が之を見捨つるが如きは公正を根本主義とする社會の安堵し能はざるものであるから、此等不幸不運の人を一部、少數の慈善、温情に放任せず、社會は積極的に、人類相互扶助、相互依存の原則により、此が救濟慰安を與へて、其を彼等が權利として主張し得る社會に築き上げる事を要求するのだ。此がデモクラシーが要求する内容であるのだ。

要之、デモクラシーは、個人主義の舊套を脱して、社會聯帶の共同共存の下に、社會文化の創造に參與するを、個人の目的として、此に公正に機會の均等を與へ、各個人は其天分に應じて各其志を遂げしめ、人類生活の道程に上らしむるを本義とするのである。だが落伍者たる不幸の人士も、安堵して生活し得る様に積極的に權利として主張し得る社會を實現せんとするもので、之を公正主義と謂ふのだ。斯く論ずれば、デモクラシーは、社會改造の根本義であり、としたとて、決して不合理、過激、革命的のものとする事は出来ないのである。デモクラシーは、

道徳主義であり、人格主義であり、社會改造の根本基調でなくして何であらうか、然らば、此等の……公正主義を實現するのを是認するとすれば、個人の質は現在の儘で可なるべきかは當然起るべき問題である。随つて公正主義は文化主義に轉回するは理の當然である。以下文化主義を詳論すべきのであるが、公正主義の包括する各種のデモクラシーを述ぶるが順序であらふ。

#### 4 デモクラシーの語……使用法

デモクラシーは、現今色々の意義に使用せられて居るのだ。通俗的には、共和國體に對する民主國體の義に、或は貴族政治に對する人民政治に、或は專制政治に對する自治政治に、或は官僚政治に對する平民政治に、或は軍國主義に對する平和主義に使用せられて居るのである。野蠻主義に對する文明主義、政黨本位政治に對する民本政治主義に使用して居るのもあるのだ。何れも、少數者、特權階級者の利益擁護に對して、全人主義、全社會主義、民衆主義を目的とする事は共通の現象であるのである。其民衆の待遇を公正にし、民衆全體の進歩、安寧、幸福を目的とすべしと謂ふのである。如何にも其主張は穩當と思ふのである。然して此の公正主義が、更に國際的、國內的と分れて、國際的公正主義、國內的デモクラシーとなるのである。國內的デモクラシーは、政治的、經濟的、社會的、文化的の各デモクラシーに分る、のだ。

#### 5 デモクラシーの種類

##### イ 國際的デモクラシーと我國民の態度

國際的デモクラシーは、北米合衆國の大統領、ウヰッドロー、ウヰルソンの提唱したもので、眞に世界に向つて宣傳した氣焔は大なるものがあつた。國際的關係は、今日までは道徳的になつて居なかつたのであつた。歐洲にて近世的國家制が發達し、國際關係が密接複雑になるにつれて、漸次道徳的に進行した様ではあるが、其始めは極めて幼稚極はまるものであつたのだ。國際間は諂詐權謀の祕術を盡して、其輸贏を争ふを通則としたのであつた。イタリアのマキャベリー主義は、不幸にして近代國際關係には止むを得ざる方法だと是認せられたのであつた。随つて和蘭にグロウシウスが輩出して、今日所謂國際公法の基をなしたと謂ふ。海上自由の主張の如きは容易に行はれ難きものであつたのである。和蘭が此の主張をなすにしても、純然たる公正の見地からの主張でなくして、和蘭が先進國は、イバニア、ポルトガルの海上獨占到對する攻撃用の一爆彈に過ぎなかつた事を思ひ出した時には、吾人は悚然たる感があるのだ。當時ピリニー半島諸國が東西に馳驅して、領土の蠶食に全力を傾注し、利權を壟斷した勢は、植民史を一讀すれば明白の事實であるが、後進國の和蘭は、茲に自國發展の門戸を開放せしむるが爲に、海上閉鎖、海上獨占は、世界人類の大罪でありとして、正義の的を向け

たのであつたからして、和蘭の主張が、功利的、利己的の立脚地にあるのは止むを得ないのであらふ、一旦和蘭に商權が移れば、海上獨占を主張したのであつた、斯く國際關係が道德的、公正主義にて律せらるゝに至るには、社會人文の進歩に待つより外にないのだ、和蘭の商權が英國に移れば英國は之を永く獨占せんとするのであるからして、今回の大戦も、實は英國の海上獨占に對する獨逸國民の義憤であるとも見らるゝのである、だが國際的關係は、漸次文化的、道德的に進むべき曙光を見るに至つたのは、人類の爲には慶賀すべき事と思ふのである、今國際的デモクラシーが如何なる要求を有するかを見るに、國際關係は、漸次平和人道の方面に進まんとするのである、國際聯盟の設立の如き此である、國際間の爭議は、成るべく此で決定して、世界をして戦争と謂へる凶事から免かれしめんとするのである、國際間の爭議を決定するのみならず、萬事國際的にして、労働問題、國際間の爭議等の解決をなさんとするにあるのだ、軍備撤廢と迄行かなくとも、軍備制限を斷行し、斯る不生産的、破壊的の方面に人生の努力を向けるよりは、生産的、建設的の方面に力を注がんとする思想となつたのである、労働者の位地を向上するには、世界の労働者を同一状態に立たしめ、八時間労働制、賃銀同率等の要求の如き此である、彼には労働者の能力増進が必要であり、此には労働者の教育向上を要求すと謂ふが如き此である、國際聯盟の規定に基いて、近時色々の會合が開催せられ、第一

回は、一九一九年、米國のワシントンに、今は其第二回を瑞西のゼネーブに開かれんとするが如きは、國際的デモクラシーの發現であるのだ、人種差別撤廢、海上自由の勵行、民族自決主義の如き、一として國際的デモクラシーの好題目に非らざるはなしである、ベルサイユ會議にはウキルソンは、無併合、無賠償を標榜して、本國を出立し、會議に於ける解決の根本原則とする勢であつたが、一旦英國を訪ふや、海上の自由は、飲口せられ、議場では、クレマンソーの怒號絶叫に依て、無併合、無賠償は粉微塵と碎かれてしまつたのであつた、民族自決主義は、世界の人民は、皆生存權を確有するものである、文化を異にし居る民族が過去に於て他の侵略に逢つて不幸併呑せられて居るが、之を領有して此等異文化の民族を壓抑するが如きは、國際間の公正主義に背戻するものであるとの主張を與へ、此が今度世界の既成國家の存立基礎に少からざる動搖を與へて居るのは事實であるのだ、斯くの如く國際的關係を律する根本法則としてのデモクラシーにまで及んで居るのである、若し世界の人類間に、國際的、道義心が向上發展した曉には、如上の問題は、忽焉として解決せられて、人類生活の理想郷に進み得るのであらうが、人生には表裏があり、善惡あり、今俄に其に到着せん事は不可能と思ふのである、現に人道、正義博愛の本家であり、自國も然か誇負して居る北米の野にも、リンチングの爲に泣ける黒奴もあれば、排斥を受け居る有色の民族もあるのだ、自家の領土を侵略奪取

せられて、自分等は侵略民族の爲に山に隠れて哀寂しい生活をして居る敗残の民、印向人も居る時代、人種差別の撤廢は、何れの時に實現せらるゝのであらふか、軍備撤廢、軍備制限、引いて文化向上の語は如何にも人道的の人氣を博する好題目ではあるが、今日の實際的國際關係は、まだ斯る境地に迄は進まないのは遺憾至極である、吾寧ろ盛に海軍擴張に、正規兵の増加等に力を盡して、國防充實に維日も足りない様な状態である、吾人は國際的關係が、漸次道徳的、平和的關係に進み、又進むべく希望するものであるが、又一方には國家生活は、現代國際的道義の上から見れば、最進歩し且堅實なるものであるから、自國の獨立自存を講ずるは、最焦眉の急であると思ふ、徒に理想主義に走せて、絶對平和を主張し、軍備撤廢を論ずるが如きは空想に非らずんば、僻論であるのだ、他國を侵略するが如き野心は、今日の國家としては毫頭懷抱すべきではないと同様に、さりとて反國家主義の下に無政府主義を主張するが如きは、此は現實を離れて、徒に星の世界を憧がれたるものと思ふのである、只國家生活を通じて國際的關係の圓滿を保ち、自國の特種文化を發展せしめて、永く世界の文化に貢獻するのが、眞正の國際的デモクラシーの大義に適ふのであるのだ、我國文化は西洋文明と其趣を異にするものである、益其特色を發揮して世界文化の光彩に、錦花更に花を添ふる様に努力すべきであるのだ、人類を愛し、他の國家を尊重するのが、體ては、自國家を愛する事となるのだ、我

國民教養上、國際道徳に關する修養は、此の際最注意と研究とを要する事と思ふのだ。

#### □ 國內的デモクラシー

##### A 政治的デモクラシーと教育

國內的デモクラシーの中で、政治的デモクラシーは、過去人類進歩の進程中に於て、最早く發達し、デモクラシーと謂へば、此をのみ指した程發達もし、主張もせられたのであつて、此が説明は、前既に論述したから、此處には辯論を省くのが穩當であるのだ、リーンカーンの示した意義は、實は我國では最初から其大精神を有し、歷朝列聖は此が實現に努力せられたのであつたが、其形式に於ては、彼と事情を異にする所から來た差異に過ぎないのである、國體、政治運用法、政治の目的は、前項畷々敘述したので、最早何たる危險も作はなければ、懸念する用はないと思ふが、政治運用法に關しては、選舉法の改善と、國民の政治教育との兩面からして、眞正のデモクラシー政治の實績を挙げん事、決して困難に非ざる事を信するものである、普通選舉法の如きは、或一部の論者が杞憂するが如く、我國に階級思想の衝突を起し、社會組織の上に急激なる變化を促すもので、國家存立上危險思想視するが如きは、餘りに老婆心に過ぎたと思はるゝ、最早現代の社會は、眞に全民政治として、全民の幸福、進歩を目的とすべく、此が爲には國民の總て(年齢上の制限は止むを得ない)が、國政に參與する文化人として、政治的

の創造化育に参加せしむるのが、社會の安全辨であり、正當の處置と思ふのである。其實施の時期及び其選舉法の如きは、今後の研究考慮に待つべきであるが、要は國民の質の改造をして自治責任協同公共心の發達を旺盛ならしむるより外に論ずべき餘地はないと思ふ。經濟生活の急調なるが爲に、社會改造論が盛に論議されては居るが、此等の論者中、議會主義説を排して無政府的反抗的、直接行動説を力説するが如きは、此は眞の政治的デモクラシーの義に適ふものでないのみならず、國家社會を破壊し、人類の幸福を害する最忌むべき過激極端の思潮として、此が撲滅に努力すべきものと思ふのである。

#### B 社會的デモクラシーと教育

社會的デモクラシーは、現存せる社會上の特權を打破し、文化人として、人類を平等に見、此に機會の均等を與へて、其生存を保障し、發展、向上を謀らしむべきを原則とするのである。男女の社會上の位置、又身分門閥の因襲上の關係が、個人の本質を無視して、社會上の位地までを左右し、評價の客觀標準とするが如きは、公正主義の社會では最忌むべきもの、一とするのだ。我國の如きは、女子に關して幾多研究すべき事項多く、女子自からの自覺によるのもあるが、社會が女子に對する待遇の改良の如きは、今後大に革新を要するもの多きを思ふのである。吾人社會上の位地は、身分門閥の如何にもよるが、生活の經濟的基礎に依つて左右せらる

る事多く、從來とても上流の人士が其位地を保ち得たのは、其生活基礎の安定を唯一要件としたのであるが、今日の如き個人主義の經濟時代には、尙更、生活基礎の安否が、社會上の位地に大關係を有するもので、國民の大多數は、其生活に急迫せられて他を顧みるの暇なく、生活に關して無反省、無批判であるから、社會的デモクラシーから眺めて見れば、此等の人士に機會均等を獲得せらるゝやうに、諸種の改良施設を講ずるのが、總ては民衆文化の向上を期し得らるゝ點であつて、此は、姉妹篇地方文化向上論近刊中にて詳論したいのだ。女子の覺醒により、文化人として社會奉仕をなさしむるが爲には、教育の普及、向上の如きは、最急を要するのである。富を擁する少數の人士が、遊手徒食、苟且偷安の生活に其日を送るは、文化人として耻づべきであるが、進んで華奢淫靡の風を、世に誇稱するが如きは、此等人士の反省を促すべき目下の大問題とも思ふ。此等社會の公正主義は、急激に實行すれば、其處に無理を生じ、幾多の悲惨事を生ずるものであるから、識者は此等の公正主義が堅實に行はるゝ様に、深き注意を要すべきである。

#### C 文化的デモクラシーと教育

文化的デモクラシーは、藝術、教育等が民衆に解放せられて、一切の人民の享樂啓發に任せらるゝ様にすべきを主張するものである。今日藝術は、少數の階級の占有に歸し、文化は民衆

的になつて居ない、建築、繪畫、彫刻、哲學、科學、文藝演劇、音樂、庭園等の文化的なもの、中で、演劇が最民衆的になつて居る丈で繪畫、彫刻、庭園、建築の如きは、少數人の獨占到歸し、此に關する創作は愚か、鑑賞の力を缺き、爲に世は功利物質の一方に墮し、没趣味、無風流、人生生活の眞生命に觸れないのが、我國社會の現状である。人生に關する反省、自覺を缺き、宇宙人生に對する思索をする餘暇もなければ、修養もないが爲に、人生生活を極めて無意義に送り、所謂醉生夢死の一生たらしめ、此が官能の満足に陥り、利那享樂に偏し、低級の趣味に陥り、世を擧げて粗製濫造の質物で、生活を間に合せするに至るのが、目下の趨勢である。ウキリアム、モーリスの描ける新社會の如きは、到底此を我に實現するは不可能と思はるゝ程である。民衆が藝術を鑑賞するが爲には、民衆自からが、此を創造するに至らなくてはならないは勿論である。今日の藝術は、貴族藝術である。藝術の民衆化には、民衆の藝術が起るべきだ。民衆文化の向上は、茲に於てか教育のデモクラシーに進むべきである。

### 1 普通教育はデモクラシーの根本力

デモクラシーの社會を實現するが爲には、教育は其根本基調であるのだ。國際的公正主義も、個人の人格向上、博愛共同の思念が訓練せられなくては駄目である。政治的公正主義にしても、個人が國家の一員たる觀念旺盛、自治心、公共心が熱烈であり、萬人が國家の公僕となつ

て、始めて政治は全民政治の實を擧げ得らるゝのではないが、社會的デモクラシーにても然りである。産業的デモクラシーは、次項に述ぶるのだが、各員の能率増進は、致富の根本條件、此には職業好愛、職業堪能の諸要素に待つべきで、此は一に教育による陶冶鍛鍊の賜物である。とすれば、デモクラシーの具現には、文化的デモクラシー中、教育の民衆化を措いて、果して何物が其實現をなさしむべきかを思ふ時に、教育的デモクラシーは社會百般の文化的主調と謂ふても過言ではないのだ。

### 2 教育的デモクラシー

此が爲には、世界各國は、教育の普及改良、上進には全力を傾注して、維日も足りない状態である。然らば、教育的デモクラシーとは、教育機關の完備を策すると同時に、此が解放を斷行し、幼稚園から大學に至るまでを、民衆に提供して、機會の均等を講ずるを第一要件とすべし。之を我國目下の情勢を眺むれば、如何にも心細さを感じるのだ。機關を解放するとは謂ふが、此は有能者に向つての解放で、有能者の自由競争に一任すべきものである。富豪の子弟のみが、高等教育を獨占するのが我國の現状である。貧民の子弟は、學費少きが爲に、到底教育上には機會の均等に浴する事が出来ないのだ。獨逸の如きは、一九一九年に學校統一令を布き、學校を國民に廣く解放したのは、戦後經營中の根本政策であるからだ。戦敗國獨逸が學校統一

Einheits-Schule を断行した覺悟は、總ては獨逸勃興の原動力となる事を思ふて敬服の外ないのである。獨逸の學校統一令は、從來の二重學制を廢して、單一制となし、國民を同一學校に入學せしめ、中に於て、凡ての兒童は、國家が定むる一定の試験を経るを要するのだ、即ち其社會が有能者と認定した上は、従前は富者階級の子弟のみが高等教育を獨占し、總て此が社會上の各位地を獨占したのを、今回は、才能に依つて各種階級に教育を解放したのは、非常の断行と思はる、兒童及青年の才能發揮 *Aufstieg der Begabten* をして、苟くも才學あるものには、皆自家天稟の才能を、社會奉公の爲に極力發揮せしめん制度であるのだ、随つて學資公給を理想とすべきだ、此が財源を如何にすべきかは、國家經綸上最重要の事項である、改造を叫ばる、現代には、國家發展上から眺めて、何れが最重要であるかを考察し、此が輕重大小を定め、一旦其重大と認められた方面に、自信を以て國家百年の大計を立する大政治家の輩出は、教育上から見ても、痛切なる吾人の要望であるのだ、不具者、廢疾者、低能兒、白痴者に對して、此が教育機關の完備を圖り、職業、普通兩陶冶をなして、文化人としての職能を發揮せしむべきである、此等教育のデモクラシー中でも、國民に強要すべきは、義務教育の機關であるのだ、義務教育年限の延長と同時に、更に滿十七歳迄補習教育を義務制にして居るのが、世界文明國の現状である、八年の國民教育は、普遍的基礎的の教化としてであるが、其上に建設すべき補習教育は、職

業陶冶を通じて、文化人としての教養をなすべき、より更に重要な機關である、デモクラシーの叫聲喧しき時に、文化的デモクラシーの叫の聲が、餘りに微小であるのは、此は如何なる理由であらうか、吾人の怪訝に堪へないのは、此である。

### 3 教育的デモクラシーと創造本位の教育

要之、教育的デモクラシーは、國民の質の改造を根本義とするものである、富、身分、家柄等を打破して、本質的價値の保護發展を謀つて、能力増進、功績本位の教育をするのにあるのだ、反言すれば、個性、本質の向上、發達を謀り、道德的にも、智能的にも、自發活動をなさしむるのだ、此が爲に、有能者に機會の均等を與へ、教育機關の解放を断行して、公費支給制とするにあるのだ、教育の方法の如きは、此の根本原則に依つて、本具の個性を極度に伸長せしむる事を考慮し、知識の人、記憶の人たるよりは、問題を發見する人たらしむるのだ、之を批判し、解決する人たらしむるを要するのだ、兒童興味本位にして、兒童個性の完成を助長する様にすべきである、創造本位の教育は、斯くして主張せらるゝのである、服従よりは、獨立を尊重する訓練となるのだ、感情の淨化、決行、果斷の人たらしむるを要するのだ、尙詳しきは文化主義の項下に論ずるから略しよう。

### D 經濟的デモクラシー

経済的デモクラシーは、最近に非常に横暴を極めて、世界各国を風靡せんとする思潮で、デモクラシー中、是が最注意を要すべき思潮である。此に對して、余は相當の頁を割いて、其由來と主張とを述べ、此が批判を試みたいと思ふ。吾人生活中、経済生活は最根本的で、萬人に及ぼす影響は、此程大なるものはないからである。現時無資産者 *Proletariat* の語がよく使用せらるゝのである。無資産者即労働者である。中に筋肉労働者の語が使用せられ、デモクラシーを民衆主義とすれば、即労働問題が其中心問題たるが如き感をも生ずるのである。如何にして斯る階級が生じ、斯る思潮が起り、斯る問題が然かく重要視さるゝに至つたであらうか。

### 1 プロレタリアート級の發生

無資産者とは、貸銀労働者の一階級を指し、自己獨立の經濟を營む資力がなから、自由契約の下に資本者に労働を提供し、其對價を得て生活する階級の名稱であるのだ。此に對し資本家 *Capitalist* と謂へる階級がある。此は資本増加を最高の目的として如上労働者を指揮命令し、企業の計畫、經營をなす階級の人士を指して謂ふので、此が現代には最羽振よく活動し、社會上に一の特權階級をなして居るのである。で社會上の階級には、ブルジョア *Bourgeoisie* の階級に立つ者である。ブルジョア階級といへば、十字軍遠征の結果、西歐に自由都市が起つたが、其市民は、封建都市の住民に對して、自由市民と稱し、自由思想を鼓吹し、商工業に従事

し、自己の居住せる都市は、自治的國家として、司法、行政、立法の三權を統べて、他の封建都市に住する諸侯に對立するに至つたのであつた。此が近世的國家となるや、社會上には最下層の第三位にあつたものだから、個人的自由を絶叫して、政治的革命を企圖したのは、此の階級人土であつたが、此が現代に於ては、社會上の上位に立ちて、昔日の政治的革命をした事を忘却したかの如くに、財界の勢力を擁して、新興階級の第四階級は、プロレタリアート *Proletariat* 級に向つて無政府同様に、専制暴威を揮ふものだと、の反抗思想が起り、現時は不幸、此が對立闘争の巷に立つて居る様である。

### 2 プロレタリアート級の悲惨なる生活

然かも、第四階級のプロレタリアート級は、其生活を脅迫せられ、其生活は一に資本家の左右する儘に盲従すると謂はれて居るが、此が真相は果して如何なる状態にあるかは、次項に述ぶるが順序であらふ。今其階級の生活状態を描寫すれば、其惨況の一端は窺ひ知り得る事と思はるゝ。家に一文の貯蓄をも持たない労働者は、自家生活の資材を得るが爲に、都市に集まり、工場に働かされる、に至つたのだ。其工場には、煤煙天を掩ひ、金槌の音耳を劈き、一日十数時間の勞役に、疲れ切つた肉體を持つて、夕方歸つて來る住宅はといへば、歐米の工業國では、誠に悲惨な状態にあるのだ。年が年中、太陽の直射光線の入り得ない、晝尙小暗き地下室



で、冬の如きは暖爐の設けさへないので、然かも一室中に數家族の混在である。此が百軒長屋と来て居るのである。共同の竈に共同栓である。食ふや食はずの生活、疾病の源泉とも謂ひ得べき住宅だ。到底家族團樂の樂を享有する事は不可能である。其でも生活に餘裕があれば尙恕すべしだが、貧窮に迫られて泣く泣くも幾多の子女を驅つて、共に工場生活に走らするのだ。機械は四六時中不斷に運轉して居るが爲に、此等無資産者は、夜業に就て生活の資財を得るのである。長時間同一趣味の勞作に身を窶つす士女の數も相當に多きに止るのだ。健康、風紀、元氣の如何は更に顧みる所なきが如しである。一家團樂して家庭生活の慰藉、安樂、休息を求むる事は現代の工場組織では困難になつた。住宅、職業の二が既に家庭生活を妨害して居るのである。哀れむべきは、此等の勞働者である。殊に女子の勞働者が、夜間就業の如きは、今後も益盛に行はるゝに連れて、家庭生活、國民の健康問題等は、餘程の考慮を要する時代となつたのだ。幼兒預所、養育院への委託、育兒の如きも、歐米諸國には盛に行はれて居る。だからして兒女の營養不足やら、住所の狹隘不潔やら、監督者なき生活から来る放縱、無規律の生活は、不良少年少女の多數輩出を誘引する所となるも止むを得ないのだ。家財は無一物だから、其日暮しの生活である。定住の念は更にはない。厭になれば漂然として去るのだ。恰も雲の來去と同様である。只世界の景氣の示す所に漂泊する候鳥である。勞働者には故郷はない。母國はなく

なるのだ。國語、國粹の美を讚歎するには、餘りに生活が急迫であるのだ。行李一個が天崖地角唯一の伴侶に過ぎないのだ。随つて共同一致の訓練を缺き、只一個の動物として機械の番犬に過ぎないのだ。濱の眞砂、風に飛ぶ木の葉である。止むを得ず、此が不平と反抗と慰安とを他に求むる様になるのだ。が元を糺せば、自家獨立の農民であり、農民の士女であつたのだが、一旦生活難の颯風に襲はれて、故山を見棄て、住馴れぬ都市は、煤煙の中に入つたのだ。あらゆる浮世の風波に揉まれ、遂には自然の雄大、宏壯の美に憧憬する事を忘れ、又は家庭團樂の純美に飢餓して、其極自暴自棄の状態となり、心身共に荒怠して、官能、肉感の奴隸となり、刹那享樂の低級趣味に墮して行く過程を考察して見た時に、吾人は社會問題の内面には同情すべき反省すべき、又警戒すべき幾多の大問題が伏在して居るかと思はざるを得ないのである。

### 3 經濟生活の激變

如何にして斯る生活状態が起つたであらふか、順序として此が第一の研究題と思ふのである。人生が地球上に生活をなすに至つた年代は、相當に古くある。(二十五萬年説は最長、短百萬年説は最長)が、如何なる生活状態であつたかは、容易に窺ひ知る事が出来ない。其文獻に徴し得るのは、僅に約七千年前に遼溯源し得るのみだ。此等の時代に於ける人類の生活法は、極めて簡易素朴で、人

口も稀薄であつたから、只自然物を採集すれば、生活をなし得られるのであつた、此が人口増殖の原因に支配せられて、遂に自然生活を離れて、衣食住を必要とする人爲生活に入り、生産力の増加を必要とし、私有財産制を生み出し、自他利害の乖離となり、政治生活の必要をも生じ法的統制をなすに至り、警察的國家となり、此が更に産業的國家となり、遂に今日の社會組織を生むに至るのであつて、世界各國が今日の如き状態に迄進歩するには、幾多の變遷をなし居るのである、今經濟生活の變遷を表示すれば、概略左表の如き經過をなして居るのだ。

經濟生活の變遷

時代	組織有無	生産性質	交換性質	交通範圍	分業種類	貨幣有無	勞働關係	生産要素	共同生活基礎
第一期、自足經濟時代	一、無 二、孤立的	自己生産	一、生産者 二、消費者 無交換	無	家政治的分担	無	強制的土地	土地 血統	統
第二期、都市經濟時代	一、都市を單位とす 二、分立的	註文生産	一、區別を生ず 二、直接交換	1 一地方 2、狭小	1 職業上分岐 2 田舎：農業 3 都市：工業	1 物々交換 2 一種の貨幣 3 金屬貨幣	1 主從關係 2 強制的勞力	土地 勞力	一地域
第三期、國民經濟時代	一、國民を單位とす 二、統一的	市場生産 (商品生産)	一、第三者を生ず 二、間接交換	1 國內的 2 國際的	1 分業(協同) 2 國內分業 3 國際分業	1 貨幣制度 2 貨幣は價値標準 3 格利的	1 自由契約 2 約勞働	資本 全盛	國家

如上の表は、其概略を示すもので、各國の文化發達の程度に依り、其一時期には、各長短先後があるのである。

一 西洋に於ける自足的都市的時代概観

西洋では古代ギリシアのアテネ市の如きは、文化の高潮に達したと謂はる、ペリクルス時代以後、ヘレニズム時代には、經濟生活は、第二期から第三期に入つて、分業、協力、貨幣時代に入り、國際經濟時代に進んだと謂はれて居るのだ、此がギリシアの滅亡と共に破壊せられ、ローマ時代を過ぎて、中世に入るや、西歐諸國の文化は、再び原始生活に戻つた如き状態で、第一期の自足經濟時代を反復して居つた、未開野蠻の生活状態に過ぎなかつたのだ、此が十字軍を境として、第二期の都市經濟時代に入り、自由都市の勃興となつて、ギリシアの經過せる跡を再現する姿となつたのであつた、此の都市經濟時代は、實は十八世紀の後半期にまで及び、中にも工業の發達の如きは極めて幼稚、不完全なる状態に過ぎず、器械の如きは、よしあつたにしても、動力に依つて運轉し得べきものはなく、所謂手細工業に過ぎなかつたのであつた、農業の如きは、元來が人力を以つてなすので、今日北米で行はるゝが如き機械を使用する大農組織は、逆も行はれなかつたからして、國家が農業時代である間は、經濟生活は極めて單純で自給自足の時代を脱する事は極困難であるのだ、經濟生活の激變は、要するに工業の革命

に待つより外にはないのであつた。

## 二 我國に於ける自足的都市的時代の概観

これを我國に見ても、我祖先の經濟生活は、永く農業生活を繼續し、神代の昔、建國の當初からして、既に農耕時代に入つて居つたが、第二期の都市經濟時代を生んだのは、實は徳川時代に入つてからだと言はれて居る。經濟史研究の學者の所説を見るに、徳川時代は、既に第三期に入つて、國際經濟に入ると言ふ説もあるが、それは國家經濟の大局から見た議論で、一般國民は依然たる農業生活で、自給自足の状態を維持し、殊に工業の方面に於ては、手細工業時代であつて、此が維新を経て、明治は三十年、日清戰爭を経過した頃に、漸く器械工業の勃興を來たしたと言ふ、一方からは極めて幼稚な經濟生活を我祖先はなして來たのであつた、手細工業の發達する前の工業状態は、各國共に同一の徑路を辿つて居る様である、各種の生業に於て、自家生産に必要な品物は誰が製作したかと謂へば、多くは自給自足であつて、家庭生産の時代である、専門的技術家があつた譯ではないのだ、人口増加につれ、賃仕事の時代に入り、特殊の技能あるものが、他人から依頼せられて、出職として各需要者の家に泊り歩き、原料は先方持ちで、製作、修繕の勞を取り、其謝禮を受くるに過ぎなかつた事は、尙此等の風習が今日にも現存して居る事を目撃し得るではないか、一方には出歩いて他人の爲に製作、修繕を

するものがあるかと思へば、他方には居職として、自家に在つて他人の依頼に應じ、製作、修繕をなすのである、専門的技術者としてでなくして、自家生業の餘暇に、他人の依頼に應じたに過ぎない事は、交通機關の幼稚なる時代として想像し得るのである、此の出職、居職の賃仕事時代が、相當に長くあつて、我國の如きは、農業が自給自足の時代、都市の起らなかつた時代は、全國が殆んど此で、日常の需要を充足して來たのであつた、此が進歩すれば、所謂手細工業の時代に入るのである、我國で、此の時代に入つたのは、平安の中頃から、當時の都市としては、僅に平安のみであつたからして、京都が手細工業に入つたのみで、地方には到底此が勃興する状態ではないのだ、此が鎌倉時代に入り、鎌倉に幕府が開かれ、武家中心の封建都市の勃興となるや、武家の必需品であつた甲冑、刀劍、手細工業が起り、以上の刀劍、甲冑から、馬具等の一切は、専門技術家の手で製作せらるゝに至つたのだ、當時の中心都市は、僅に、京都、奈良、鎌倉のみで、此等武家、公卿の日用品の製作、修繕に應じたのであつた、三條小鍛冶宗近、五郎正宗等の輩出したのは、手工業の發達を實證するものである、手細工業の時代に入れば、賃仕事時代とは異なつて、一種の營利生産になつたのであつて、原料品を自家の計算で購入し、之に自家特有の技能を加へ、他人の注文に應じて製造する、所謂注文生産の時代となるのだ、直接依頼者の注文に應ずるのであるから、生産品に對する一切の責任は、自家が負ふべきであるから、之を

直接生産、道徳的責任生産と謂ふのだ。随つて生産品には精巧の美術品も多く出たのだ。當時武家が、甲冑、刀劍を自家の生命以上に尊重したからして、甲冑、馬具、刀劍の逸品も出来、我國に美術品たる資格を具備するに至り、今日海外に多数溢出せられたものは、殆んど此時代の逸品であるのだ。随つて同業者が、一種の組合(座)を組織し、西洋では、之をギルト(Guild)又はツンフト(Tunft)と稱し、徒弟、親方、株の三階級を有し、工業者は親分子分の關係で、終生生活の保證を得、温情主義で主従の關係を維持して居つたのだ。今日見るが如き労働者とは、全然趣を異にして居るのを見るのだ。徒弟は職業に依つて年限の長短はあるが、親方から特種の技能を熱心に教授せられ、此から親方に進み、最後には株となるのであるが、一方には保護せらるゝ、代りには、随意に他に職を開く事を嚴禁し、其特殊の技能は、一家の祕事として、容易に他に傳授する事を禁ずると同時に、同業者の數を制限して、座の保護維持に努めたものであつた。室町時代には、堺は自由都市、山口は封建都市として勃興し、戰國時代に入り、群雄割據と同時に、各地に中心の封建都市が勃興して、我國が都市經濟時代に入つたのは、實は徳川時代であつたのだ。西洋では、十字軍の半頃から、此の自由都市が勃興し、手細工業の發達となり、商業は河川貿易に依つて、歐洲各地に通商の途を開くに至つたのであつた。要之、經濟生活の變革を促す要因は、工業の發達が其主因をなすものである。

### 三 産業革命時代

所が十七十八世紀は、科學勃興の時代として、各種の學術研究が進歩するに連れ、器械類の發明品が工夫せらるゝに至つたが、其器械を動力で運轉する時代が、十八世紀は一七六四年にジェームス・ワットの蒸汽力の發見に始つたのである。此ぞ産業革命 Industrial revolution と稱して、經濟生活に革命を起し、爾來百六十年間に、人類生活中、未だ會つて經驗しなかつた大革命となり、遂に先きに述べたる如き労働者の状態を實現するに至つたのであつた。産業革命に依つて、最悲惨なる運命に遭遇した人は、ギルト制下に發達し來た手細工業者の階級であつたのだ。何が故に手細工業者が悲惨の運命に翻弄せられねばならないのであらふか、此は謂ふ迄もなく、機械が人間の特種技能に代辨して、所謂鐵人 Iron man として、一切の製作に従事するに至つたからである。器械は四六時中、不離運轉して、勞作し得るのに、人類は少くも八時間は睡眠を要するのである。萬事機械で仕事をし得るから、人間は器械運轉の敏活を圖るのみでよい、謂はゞ掃除番でよいのだ。特種の技能を有し、之を家傳の如く誇つて居つた階級人士は、今更の如く驚かされ、生活の急迫に出逢ひ、筋肉労働者の群に入るか、資本家、生産者の側に入るか、二つに一つを選ぶ苦境に至つたのだ。要するに器械工業時代は、特種の技能を要する事減少して、勞力は平凡化、單純化したから、只さへ營利を主とし、販路擴張に腐心せる事

業家は、勞賃の低廉を強要し、男よりは女、女子よりは子供へと、勞賃の低下を迫つて、茲に勞働者は泣く泣くも勞働に従事したのであつた。大量生産勞賃低廉は、價格の低廉を誘いて、消費者側に福音を齎らし、十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、歐洲では、人生生活に樂觀を歌ふに至り、精巧均一の品を低廉なる價格で購入し得る所の極樂世界が實現せらるゝ、ならんとの豫想と期待とを與へたのであつた。所が十九世紀は、半頃からし各國に産業革命が行はるゝに至り、各國は低廉精巧均一の品物を、世界の消費地に向つて輸出し、販路、爭覇戦に入るに至るや、一方には勞銀の低下を迫り、一方には利益の多きを貪るに至つて、勞働問題が經濟的デモクラシーの中心問題となるに至つたのであつた。

#### 甲 各國に於ける實況

今各國に産業革命の起つた順序を語れば、最初は英國に十八世紀後半期に起つたが、先づ繊維工業に利用せられ、マンチェスター市の勃興は此からだ。此から各種の工業の勃興となり、器械の發明、改良に依つて、生産能率の増進を促し、此を世界に輸出して、英國が今日富強の基礎を築いたのは、實は十九世紀は、ビクトリア女王の治下、六十年間であつたと謂ふてよいのだ。産業革命の結果であつたと謂つてよいのだ。十九世紀の半頃には、獨佛に産業革命の機運熟し、一八七〇年は、南北戦争後に、北米合衆國は産業革命期に入り、世界の移民を招徠して

交通機關の整備に全力を傾注し、此に依て國內産業の勃興を謀つた勢は物凄い程であつた。中西部以西の廣漠たる原野が開拓せられ、米國國富増進の急速であつたのは、矢張産業革命の結果であるのだ。露國は農業本位の國として、此が機運は容易に入り難かつたが、一八九〇年頃から、工業國とならんとし、資本企業の兩力を佛獨から入れて、茲に工業國のロシアとならんとし、露國內部の改造が急調を呈するに至つたのだ。我國の如きはロシアと殆んど相前後して工業國に入らんとし、産業革命の氣分に入つたのは、日清戦後、明治は三十年頃から前の事である。

#### 乙 其の特色

産業革命と謂ふもの、工業革命であつて、器械工業化を指すのである。大資本、大規模の大量生産である。市場豫想の間接生産である。大資本を要するから、資本合同を必要として、シンヂゲート(カルテル)を生み、更に事業合同のツラストを生むに至るのだ。共に利益獲得を主とし、營利生産の時代として當然の施設であるのだ。斯くなれば、勞働者は工場經營上の客位にあつて、最低賃銀に値切られて、勞作の器械と化せざるを得ないのだ。貧民階級となるは、自然の勢である。之に反して、資本家は、利益を獨占、壟斷して、兩者の懸隔は甚大となり、世界各國とも少數の富者が、生産界の全權を掌握して、政治上の專制時代の如き時代となるに至つたのだ。

ある、貧富の懸隔の甚大なる事蓋し今日の如きは空前と謂つてよいのだ。而して、工場の起る地方は、主に都市又は都市附近である。近時水力電氣の爲に送電の都合よき僻陬地に、大工業が起るに至つた。工場地へ人口は集中するから、都市勃興は、工業文明の一大特色である。政治的都市として、百萬の人口を有する事は珍らしかつたが、工業都市の爲に、大都市の勃興を促すに至つたのだ。都市勃興は、田園の荒廢である。只人類移動の結果に過ぎないからだ。農耕は過勞の割合に薄利である。田園生活は比較的單調無趣味である。現代人が都市生活を憧憬する氣分は大なるものであるが、農村の士女は都市を憧憬されて煙煤の都に迷ひ入るのだ。此が都市勃興の原因である。英國の如きは四五〇〇萬人中、七割が都市生活者である。ナポレオンをウオーターローに挫いた英國民は、相當に強かつたが、現在は食料の不足にさへ困んで居る。農村の荒廢を來たした原因は左る事ながら、都市時代民心の頹廢を眺めたならば更に警戒を要するものがあるのだ。資本家は富を擁して、之を奢侈贅澤に費し、労働者は生活難に逐はれて、共に唯物功利に墮し、打算利己に偏し、射倖心の旺盛を來たしたのだ。労働者が過勞困憊の極は、官能享樂に流れ、冒險變異を好み、雷同附和、人心の惡化は免かれ難いのが現代人の情調である。社會救濟問題の起るは必然である。之を一刻も捨置いてはならぬ。一日放置すれば、一年の損であるのだ。斯る社會生活を起したワットは、果して大罪人ではなからふ

かと迄思はしむる程であるのだ。産業革命の影響を受けたものは、必ずしもギルト、マンのみでない。最初こそは其犠牲者であつたが、此が社會各種の階級に波及して、農業労働者は勿論、今は中産階級中の自由職業に従事する、知識技能を以つて生活する人士の生活をさへ脅迫するに至つて、社會救濟問題は全人類の救濟問題となつた。政治の力で改造を企てんとするあり、或は政治の無力に失望して、直接行動に依らんとするさへある。斯うなれば、經濟的デモクラシーは、現代思潮中に於て最綿密に研究を要するものであり、嚴正なる批判の下に穩健中正の方途を策する事が焦眉の急と思はるゝのだ。

#### 四 交通革命

所が社會生活の激變を助長する原因は、産業革命の外に尙二つの要素を加味する必要がある。其單にワットの動力發見のみで、然かく焔を高大ならしめたのではないのだ。此の二つは、一は經濟政策の變化、と他は交通系の革命とである。交通系統の進歩は器械、動力の發見前には徐々たるものであつた。河川貿易、大陸徒歩旅行より外はないのだ。張鸞の西域入りは、支那史上の大遠征であつた。法顯の天竺入りも壯舉であつた。イバン、パツタにしても、又マルコポーロの燕京入りにしても、共に世界文化史に齎らした効果は大なるものがあるが、此は何れも特種の探險家旅行家に過ぎないのだ。帆船時代、貿易風を利用しての航海は、決して安

全確實の航海ではない、ワットの動力発見により、海には蒸汽船陸には汽車、更に電力使用の時代に入つて電信、電話の利用となり、世界の距離は短縮し、世界は比隣並軒の状態、此の間に大資本、大規模、大量生産をなし得た英國が世界の農業國に向つて販路擴張利益獲得に成功した事は奇蹟でも何でもないのだ。

### 五 經濟政策の變化

此の交通革命の外に、經濟政策の大變革があつた、從來は國家主義の下に、商業のみを尊重し、農工は顧みない、メルカントル系の政策で、各國家は致當の根本義としたのであつた、自國生産業の保護と謂ふよりは、外國から金銀の輸入が唯一の目的であつた、金銀の輸出入差額による金の多寡が、國家の富であると考へたのだ、富即金でありと誤認したのだ、此の間に商業の尊重は當然で、重商、重金の政策となつた、國內の農工業は勃興せずとも顧みる所ではないのだ、一向に他國否殖民地から、金銀は勿論、原料を自國に輸入するにあつた、殖民地獲得戰と同時に、殖民地から苛斂誅求して本國を肥やすにあつた、此が爲に、英、佛、蘭、西、葡の各國は富むは富んだ、航海條例を設けて、自國からの輸出入品を獨占する政略に出たのだ、反言すれば保護、干涉、制限、禁止等、凡百の手段を講じて、只金を多く貯ふるの政策が、十八世紀はアダム、スミスが出る頃まで、歐洲政治家及び學者の金科玉條視した政策であつたのだ、政治宗教學術

に於ては個人的自由、平等に覺醒した時代に、經濟政策のみは、極端なる保護干涉であつた、自然法主義の個人主義的法の極端に主張せられたる時代に、經濟生活だけは、依然として保護干涉が公認せられて居つたのだ、北米合衆國が、一七七六年に本國に叛旗を翻したのも、經濟上の不利益が其一原因をなして居るのだ、若し此の際、時代人心の歸趣を豫感し得る天才があつて、此を豫防したならば、北米は永久に英本國から離叛しなかつたであらふとさへ謂はれて居るのだ、此の際にアダム、スミスが出て、一七七六年に富國論 *The Wealth of the Nations* を著し、經濟上に個人主義を主唱するに至つたのだ、人類は生れながらにして自由平等であるとの主張の盛な時代に、個人が營業、契約、居住の自由を享有するものであるといつたと、決して驚く事はないが、當時の經濟行爲に於ては、嚴格なる習慣があつて、營業、契約、居住の自由は認められて居なかつたのであつた、誰人も企業の自由があるのである、何處で營業し、誰人を雇備しても自由であると謂ふ議論は、當時の社會には躉谷に於ける天來の聲であつた、然かも富國の要は、自利心に基いて企業し、經營せしむるにあるのだとの議論であつた、何となれば如何に自家が利益を護得せんとしたとて、他人の便益實用をなすに非らざれば、何人もこれを棄て、顧みないからだ、自家が利益を博せんとならば、他利を謀らなくては、ないのだ、自利心に出でたる他利心が、應ては國家を富ますに至るのである、富國の要は、分業

協力を利用するにあるのだ。農業は由來分業は行はれ難いものだ。分業協力の最行はれ易きは工業である。今やワットに依つて發明せられたる動力は、器械に据ゑられた最初であつたからして、此の分業利用の高潮に乗じ、忽ちスミスの經濟的個人主義が、英國の經濟政策を一變して、企業經營の自由は解放せられ、生存競争の修羅場を出現して、マンチエスター學派が、當代の呼物となり、貿易上にも自由主義を採用し、極端なる保護干渉を排して、産業革命をいやが上にも激烈ならしめたのである。經濟上は私有財産制上に、更に個人の自由競争に一任られた社會は、資本の多少大小に依つて、優勝劣敗を激烈ならしめ、大は小を呑み、強は弱を併はする時代となり、貧富懸隔の激甚を齎したのであつた。分業は工業界の得意の壇場である。勞力は益分化し平凡化し、勞賃の低減を助長し、資本主が利益を壟斷し、大資本家が小資本家を壓倒して市場獨占の社會たらしめたのだ。

#### 4 社會救濟問題

如上の三要素が因果の關係になつて、現在の經濟生活を生み出したが、偕十九世紀初頭の樂觀は半頃から資本家を除いたる多數民衆に、生活難の叫聲を唸せしむるに至つて、社會救濟問題が擡頭するに至つたのだ。所が人類が生れてから以來、絶えず生活問題に苦しむものだが、近時に於けるが如き急激痛烈なる窮迫は、前古未曾有と謂はなくてはならないのだ。

で古來から東西の論者は、政治に論壇に、何れも此が救濟に力を盡したのであつた。

#### 一 東洋史一瞥

東洋でも、其實例を示せば幾らでもあるのだ。社會政策は、經世家、爲政家の常に着眼する所であつた。儒教、諸子百家の議論に於て實證すべき材は少からぬのだ。孟子の社會政策論の如きは傾聴に値するもの多くあるのである。井田法の如きは、三代の古から、既に支那では實行せられて、富の分配の公平を期圖したのであつた。唐代の均田法は、我には入つて、口分田となり、大化の改新は、今日の所謂社會の改造であつた。此が近畿地方一部分に實施せられた丈で、形式煩瑣な方法であつた爲に、莊園制の壓制する所となつたのは、如何にも残念であつたが、農業時代に、土地國有制が斷行せられた事は、天智聖帝の英斷に非ざれば、斯る大業は成し得られないのである。爾來莊園の増加につれ、遂に封建制となり、武家時代を造つたのは、實に千秋の恨事と思ふのである。西洋ではギリシアの昔に、哲人政治を叫び、社會救濟を論じたプラトンがあるが、此は略する事として、十六世紀は、英國にトーマス・ムーアが、出でて、社會改造の夢物語をなした事は、史上顯著の事である。

#### 二 西洋史概観

#### 甲 人生の目的考察



以下社會救済に關する學說を擧げて、此が正體を討檢し、此が健否を審判しようと思ふが、此等に先だつて、批判の標準を定めて置く必要があるのだ。元來人生の目的は、何處にありやと謂ふに、此は古來幾多の學者の論述した所で、到底此處に其詳細を述ぶる餘裕は有して居ないのだ。が要之人生は幸福平和自我實現、生命開展の語を以て表現し得ると思ふ、反言すれば普遍的善の具體的實現——具現であると思ふ、随つて社會存立の目的は、此の個性に適したる普通の善の具現を善導するにあつて、之を自由と謂ふ語で表現するのである。個性具現を障礙する際に、之を排除するのが正義と謂ふ語で表現せられて居る。然らば自由は積極的で、正義は消極的であり、自由が主にして正義は飽まで客であつて、寧ろ自由から分派したるものであるのだ。

### 乙 デモクラシーと人生目的との關係

だから社會改良を論ずるに當つては、常に此の正義と自由との關係をよく調節する事を要するのだ。自由のみを主張して正義を侵犯するのも惡であれば、正義のみを主張して自由を防禦するのも惡であるのだ。今デモクラシーは、少數優越者が多數民衆の自由を壓迫する爲に起つた反抗的叫聲ではあるが、不幸量の平等に隨つて平凡化俗惡化するから、茲にニイチェ、カーライルの貴族主義が起り得るのだ。質的公平を主張するに至るのである。質的自由

の儘に放任すれば、遂に又多數民衆の壓迫となる事は超人説英雄論の所説を見れば瞭然たるものがあるのだ。要は自由を制限せずに正義が維持せらるゝものでなくしては駄目であるのだ。今經濟的デモクラシーは、目下の緊急問題であり、吾人生活を脅迫しつゝ、ある重大問題であるが、此等救済に關して主張せられたる社會改造論が、果して兩者の關係を顧慮して巧に調節を謀りつゝ、あるかは、眞に疑なき能はずであるのだ。成程現代は生活難を訴ふる事急ではあるが、然かも其を救済する爲に自由が侵略さるゝ事がないのであらふか、自由を主張するに急にして、正義を侵害する事がないのであらふかが研究を要すべき重要問題であるのだ。現代生活の急調を呈するに至つたのは、ジェームス、ワットの動力發見を端緒とし、此から種々に社會に革變を起し、此が十九世紀の後半期に入つて漸く高源に達したので、謂はゞ一七六四年のワットの蒸氣力發見を境として、カール、マルクスが資本論の第一卷を出した一八六七年の百年間、謂はゞ經濟生活は徐々の變化に過ぎなかつたのだ。所が一八六七年前後からして、西歐に於ては社會狀態は工業化し、勞働者の輩出多く、貧富の懸隔も甚大となつて、社會に一大溝渠を築き、互に相對抗する姿となつた。少數者である有資産階級と、民衆の大多數を包擁せる無資産階級との間に、對抗的狀態になり、爾後今日迄約六十年間には社會を擧げて其渦中に投ぜらるゝに至つたのだ。現在其頂點 *Stimulus* に達した様な感が

あるのだ。随て所論往々矯激に走つて穩健を缺くのも少からずあると思ふのだ。トーマスマーアが、一五一六年に「ユートピア」を著はしてから、カペーサン、シーモン、フリーエー、ルイ、ブランは佛國にラッアールは、獨逸に、ロバート、オーウエンは英國に起つて、其當時の世態救済の聲を放つに至つたのだ。社會主義 Socialism なる語は、十九世紀は前半期の一八三五年に、ロバート、オーウエンが使用した語であると謂はれて居る。此の社會主義は、經濟政策の個人主義に對して起つたもので、富の分配を公平にせん事を目的とした社會救済、社會改造論であるのだ。所が社會主義が要求する物的正義は、果して個人の自由を侵犯する事なしに行はる、ものであらふか。時としては人間の自利心、怠慢心が自由の假面を被つて、正義を壓する事も往々にしてあるではないか。經濟上の個人主義に依る私有財の自由營業、契約の自由の如きは、謂はゞ自由の假面の下にて自利心を逞くするものではないか。又勞動問題の如きは、勞動者の自利心の下に正義を壓しつゝ、あるではないか。斯く冷靜に自由と正義との關係を考察すれば、其兩者の調和は微妙な關係にあるもので、極端に自由を尊重すれば、生きる事は從屬的になつて、學習發見が眞生活となる事となるのだが、此は餘りに純理的で空想的であるのだ。現實の社會生活は、精神と物質、自由と正義との併存を必要とし、正義を無視する自由もなければ、自由を無視する正義もないのだ。コールの言にもある如く、現代社會の根本的缺陷は

貧乏と謂へる事ではなくして、賃銀制が労働者を奴隷として、其自由を拘束する制度にありと謂つた言は、味ふべしであるのだ。此から社會主義の諸説の梗概を述べて、此が批判をして見たいのだ。

丙 カール、マークス以前：：夢物語派の諸説及批判

カール、マークス以前の社會改良説は、ゾムバルトの所説の如く、理想派であり、夢物語に墮する厭ひがあるのだ。トーマス、ムーアの「ユートピア」(無何有郷) Utopia の如きは、其模型のものである。一五一六年にラ丁語で書かれ、一五五一年頃英譯せられて、世に出でたが、當時讀者の感興を惹いた事は、大なるものがあつた。上下二冊で、上卷は當時の社會狀態の批判、下卷はユートピア島の描寫である。ヒスロチーの出現に擬し、ムーアが彼を借りて描いた理想郷であつた。當時の社會狀態を見るに、貧困は一部富豪の掠奪の結果であるのだ。貧であるから犯罪をなすのである。其犯罪の原因を調査せずして、徒に處罰するのが不都合であるのだ。宜しく家々給し、人々足る社會に改造をなすべしである。此には私有財産制を廢し、共產制となすのにある。賃銀制の廢止は當然である。社會は效用第一となり、今日過重して居る貨幣價値の如きは認められなくなるのだ。六時間労働で當時民衆は優に生活し得質素なる生活を立て得

るのだ。斯くして犯罪行為は絶滅し得べし。ユトピアの島は、正に此の理想が實現せられて居るのだと謂ふにあつた。十六世紀の英國社會は、農業時代、手細工業時代、隨て今日見るが如き生活難を一般民衆は感じて居なかつたのだが、兎に角に社會に歡迎せられた好著であつた。以後此の書に倣つて新理想郷を描いた書は、多數に上るが、此は略しよう。十八世紀から十九世紀にかけて、社會改良を企てた人は、前述した様に、佛には、サン・シモンを筆頭に、カペー、フーリエ、ルイ・ブランあり、英には、ロバート・オーウェンあり、獨には、フェルディナンド・ラッパールがあるが、何れもユートピスに屬し、理想を憧憬したのであつた。思想の根柢は、十八世紀の啓蒙思潮の亞流で、神は善であるから、神の創造した社會も善なるべきだ。神は社會の調和、人類の幸福を念とするものである。然るに現代社會が悲惨であるのは、神意に背いて、私有財産制を認むるからだ。社會制度が自然的であるならば、正當に進むのだが、人爲的の私有財産制から、不正當になるのだ。之を改造するには、眞理の發見を必要とするのだ。眞理發見の任は理性である。啓蒙が第一次的だ。各個人の啓蒙、民心の改善を急務とすべし。共同聯帶の社會を築くべし。然かも此が實行には強制的な手段、暴力を使用すべからずとあつた。所説如何にも高遠純潔の様であるが、餘りに空漠で、眞摯の研究を缺き、人類理性を偏重した厭ひがあるのだ。此でどうして社會改造の實行が期し得らるるであらふか。理想派に屬する人士は、凡て共產

制を主張し、私有財を禁ずるものである。ロバート・オーウェン、フーリエ等は、此の大理想を抱懐して、北米は自由の天地で、新社會の實現に努力したのだが、不幸破綻百出、失敗に終はつたのは何故であらふか。生産財の共有は、消費、享樂財の公平分配を理想とするのだから、世界を舉げて一大家族とするのであると同時に、萬人に勞働を強制するを理想とするのである。茲に至れば、よし其が短時間、六時間勞働制であつても、萬人は其勞働に對して苦痛を感じる事はないのであらふか。否、文化人としての自由は、全然制限せらるるのである。極貧の救濟は出來よう。最低消費の安全は保障せらるるが、此は人生生活をして、消極的、受動的たらしむるものだ。公債の利子で喰つて行く、退嬰的の社會に退化せしむるのだ。要之分配の公正、享樂財の公正分配までも理想とはするが、萬人に勞働を強制するから、自由の拘束となるばかりでなく、世を舉げて消極退嬰老成の社會に墮せしむる醜惡の社會改造論であるのだ。

#### 丁 カール・マルクス

此の理想派に對して起つたのが、カール・マルクスであつた。彼の父は歐米人の最排斥する猶太系の出身であつた。法律家として相當の資格を維持したから、彼には相當の教育を施し得たのだ。天資聰明であつた彼は、父の意に背いて、經濟學の研究に至り、民族的反抗心もあり、人生社會に對する憎惡もあつて、茲に彼が立論したものは、社會主義に科學的系統を與へて

今日世界に瀰蔓せる社會改良家に、偉大の教訓と刺戟とを與へたのであつた。

### い 彼の學說

個人主義の經濟政策は、最早行詰つて居る。是非此が轉機を與ふるを要する際、彼の直截明快なる論鋒は、一世を驚愕せしめ、恐怖せしむる議論となつたのである。一八四八年に發したる共産黨宣言書、一八五九年に出したる經濟學批判序文と、一八六七年に出したる資本論(四冊中の第一卷、他の三冊は後年に出づ)とは、科學的社會主義の立脚地を明示するものである。彼の學統はヘーゲル學派の左黨に屬し、唯物論機械論の立場にあるものである。世は實證哲學萬能時代、ローマンチツクの理想主義が凋落したる際として、其論鋒は傍りを拂つた感があるのだ。共産黨宣言書及經濟學批判の序文は、共に唯物主義の宣言である。歴史の要因には、人的要素、自然的要素の兩因がある。彼は歴史を左右するものは、物的要素中の經濟力でありとし、之に主要の位地を與へたのだ。然かも過去の文明史が、經濟力を要因と認めなかつたのは、謬見でありとし、經濟力こそ社會進化の原動力である。ギリシア時代には、市民と奴隸、ローマ時代には、貴族と平民、中世には諸侯武士たる地主と農奴、近世にはブルジョアと專制政府、現代は富者と貧者、資本家と労働者との争闘は絶えざるものだ。歴史は此等争闘の連続であるではないか。今は資本時代の事として、大資本家は小資本家を呑み、プロレタリアートの級の貧窮、墮落を誘引

し、市場生産は、生産の過剩を促して恐慌を招き、茲に資本主義は當然倒壊の機運が迫まつて來たのだ。隨て次代に來るべきは、集産主義 Collectivism であるべしと斷言するに至つたのだ。彼の哲學は機械論的宿命説であつて、此等必然の推移に對して吾人の意志は無力である。何物も抵抗し難き自然の趨勢であるのだといつて、個人主義經濟政策に伴生した資本主義の倒滅せん事を咒咀したのであつた。資本論は弟子エンゲルスの努力によつて完成せられたものだが、マークスは、特得の價值論を發表して、價值は労働である。労働の所生が即價值である以上は、此は労働者の所有に歸すべきである。然かも有産階級は、労働者を虐待し、其支拂ふべき賃銀は、労働者生活の最低限にまで値切つて、其の剩餘價值をば掠奪し、之を貯蓄したものが、資本家致富の基をなすものだ。斯る不合理暴戾が何處にある。資本家を征服するは、最焦眉の急務であるのだといつて、盛に階級争闘を奨揚するのである。労働者としても、人類ではないか。其生存權を脅かすと謂へる道理が何處にあるかと論詰し、此れ畢竟私有財産制の存在する爲であるから、集産主義に依つて財産を公有し、社會自からが生産權を占有し、以つて分配を公平にすべきである。労働者は國民の多衆を占めて居るのだ。彼等労働者を是非保護すべきである。彼等も人類である以上は、自然の大饗宴の一食卓に就き得る權があるのだ。生存權を確保するのは、正當の要求である。生存權がある以上は、労働權があるではないか。然か

も往々にして解職、失職の非運に遭遇するのは、不法も甚しいと云ふべしだ。彼等資本家は、労働をせずして、價値を掠奪し、苟且安逸に耽り、加ふるに人の生活を脅かすではないかと毒づいたのだ。如何にも階級争闘を使喚挑發する句調であるのだ。彼は唯物史觀を述べて、資本主義の崩壊は、宿命であつて人類意志の如何ともし難きを謂ひながら、價値論には階級争闘を煽動して、大に奮闘努力を奨揚して居る。如何にも矛盾の感に堪へないのだ。かゝる矛盾撞着を包藏する集産主義は、人類を驅て總て労働者の世界に化せしめんとして居るのだ。一旦此の議論が高揚せらるゝや、世は産業革命の急潮に驚かされつゝ、ある時代として、労働者階級は、此に其議論の立脚地を與へられ、社會主義は急轉直下、西歐に其勢力を逞しふするに至つたのである。此等社會主義の宣傳せらるゝ模様を叙述すべきであるが、カール・マルクスの所論に對して嚴正なる批判をなすが順序であらう。

## ろ、批判

## a 其標準

抑社會主義を批判するに當つて、吾人の常に考察すべき點が存在するので、第一今日の社會状態で個人の自由を犯す事なしに社會主義の要求するが如き物的正義を各人は獲得し得べきか、第二縱令其要求が充足せられたりとして、吾人は物的正義の外に、眞の自由を要求す

るものではないか、第三、物的正義の分配を如何なる組織にて行へば、最公正に行ひ得べきか、如上の三疑問を解釋したる後に於て、俵・マークスの所説は、一々穩健、妥當、中正であるかを決定し得るものと思ふのだ。で第一の疑問である個人の自由を拘束する事なしに、物的正義を各人が獲得せらるゝかに就いて考察をして見たい。今日は個人經濟主義時代である。營利を主としたる生産である。此には日用品の如き、薄利の生産を顧みるもの少く、天下を舉げて贅澤品生産に走るのだ。不必要の事業の生産に向つたのだ。要は投資に對する利益を打算しての生産であるからだ。然らば奢侈品、軍需品の如き、不用生産を中絶して、必需品生産に凡百の生産機關を向け得た際に、果して防貧救貧が可能であるか、此に對しては生産機關を萬人共通の必需品生産に向け得た際には、今日の進歩せる科學を利用すれば、倏に物的正義が得らるる事と實證し得るのであるから、防貧救貧の可能はあるが、然かも其根本には、賃銀労働制の下に於ての議論であつて、若し此の賃銀労働制を全廢した時に、果して人類は労働喜悅の下に、今日の如き能率を舉げ得るか、反言すれば自由を拘束する事なしには、物的正義は得らるべきかと言へる事が未解決であるのだ。マークスは、労働を喜悅の狀態に置く社會の如きは、考慮の中に入れて居ないではないかと疑はるゝのだ。然らば第二の疑問である物的正義が公正に行はれたとした處が、物的以外に、人類は人類創造の喜悅を憧憬するものであるか

らして、只單に物的正義の公正丈で以つて、社會改造をなさんとするが如きは、極めて低級なものであるのだ。第三の物的正義の分配を如何なる組織の下で行ふべきかに就いては、後に論すべきだが、集産主義は必ずしも良法ではないのである。

#### b 其批判

以上の三見地から、マークスの議論を見るに、彼は今日の社會を以つて、少數資本家が、多數労働者を虐待し、掠奪する奴隸制度と見たのだ。彼は一心に此の不正暴虐に對する憤怒の爲に燃え切つたのだ。其憤怒が彼の卓越せる科學的才能を驅つて、資本主義の倒壊、剩餘價值論を唸出したのである。彼の學説は、此の憎惡する資本主義に對する、激しい復讐となつたのであるから、其議論、其方法上に幾多の撞着、矛盾、缺陷を有するは、寧ろ當然と思ふのである。彼の第一の缺陷は、眼前に對する憤怒の劇烈なる丈、未來を省みず、唯物史觀の上に立つて、未來考察の無用、人類意志の無力を絶叫したのである。第二の缺陷は、正義の主張にのみ急にして、自由と正義との正常なる關係を忘れた事であるのだ。要之建設的方面を疎略にし、破壊的方面にのみ走つたのであつた。萬人は物的分配の公正を要求すべしであるとは、個人主義の立脚地にあるものだ。此の物的正義の公正を得るが爲に、集産主義とする點は、方法を社會的にするものである。個人主義の目的を達成せんが爲に、社會主義の假面を被りたるもので、純乎た

る個人主義ではないか。労働者の跋扈を煽動する點は、此にあるのだ。斯んな矛盾が何處にあるか。集産主義とは、労働者が其社會の全權を握り、生産、運輸、金融の一切を掌握せんとする主義である。眞に現代社會の破壊である。打ち毀ちであるのだ。私有財産を社會(國家)が没收して、此を社會の公有公産とするので、之を集産主義 Collectivism (公産)と謂ふのだが、斯る強大なる社會を生じた時に、果して個人の自由は確實に保證せらるゝであらうか。誠に心細き感があるのだ。よし個人は、最低限度物資の供給が公正になつたとて、労働者は雇主たる資本主の代りに、國家たる資本主の下に、賃銀奴隸たる事は同一ではないか。國家權力の強大は、或種官僚の勢威を増大する事となつて、野心政治家の跳梁跋扈になるは火を嗜るよりも明かでないか。現代人の困苦は、物的貧困もあるが、より更に精神的自由を要求するものである。實にマークスは、社會の力を強めて、個人の自由を抑壓せんとしたものである。斯る見易き缺陷を存する集産主義が、若し實現せられたらば、世界は再び自然的社會の野蠻狀態に復歸するものである。斯る馬鹿氣た事が何處にある。價值論の如きは、價值を生み出すには、資本、企業、労働、需給の關係等の諸要因を要するのである。成程現在の資本家は、利益分配上には、不正があるかも知れないが、價值即労働なりとは、此は誤謬であるのだ。資本主義になつた爲に、中産階級は絶滅して、少數の資本家以外は、凡てが労働階級に下ると謂ひ、又市場生産であるから、思惑生

産の結果は、生産過剰となつて、恐慌の頻出を豫言し、労働者の生活は、奈落の淵に沈んで、其惨況は二た目と見苦くなるならんと謂つたが、此等の豫言は殆んど的を外づれて、反對に労働者の生活は向上して、家庭にピヤノをも所持し得るに至つたと謂はれて居る。要之カール・マルクスは唯物論であつた、Karlの一元論者であつた、人生は精神生活即ちMoralと、唯物主義との二元生活である事を忘れて居る。所有衝動の満足のみを偏して、宗教、道德、藝術等の創造生活ある争を知らないのだ。物さへ十分に與れば、社會は平和であると考へたに過ぎないのだ。現代の社會に於ける國家制度、私有財産制の長所を見ずして、徒に其短所のみを痛言したのだ。人性は凡て善明の側面のみを有するものではないのだ。怠惰猜忌の側面をも表はし得るものであるから、制裁を以つて社會を統制する事、現在の國家制に優るものはないのである。吾人が勤勞するは、私有財産制の爲ではないか。若しか此が公産制度となつた曉に、果して勤勞が各人に公正に行はるゝであらふか。今日文明の進歩は、實に個人勤勞の賜物でないか。此の勤勞の美德を缺いた時に、果して現代文明の進歩は望み得べきか。覺束ない次第である。社會が生産管理權を掌握したとて、需給の調節は不可能であるのだ。市場は世界的ではないか。少數の官吏では、到底調節は不十分であるのだ。生産界が無政府状態で居る事は、以前と少しも代はる所ないのである。如上の批判にして正當であつたならば、カール・マルクスの議論は、

實に現代文明を蠱毒するものと謂はなくてはならないのだ。此か爲に、現代の社會を攪亂し、労働者を煽動し、日に社會状態の險惡化を促す大罪人でなくてはならないのだと思ふのである。

所が現代人の頭にも、現代の社會組織にも、幾多の短所のある事は容認するを要するので、價值論の凡ては眞理でないにしても、工場に於ける生産所得から得らるべき利益分配の如きは、決して之を平公なる分配と謂ふ事は出来ないのだ。地主と小作人間との利益分配の如きも、現制度が必ずしも正當とは認め難いのだ。第四階級者の生活の窮狀も、確に眞相である。だから又一方には、マルクスの議論に傾聴して、社會の改造を期圖する事は、實にマルクスの炯眼達識に負ふ所多大なる事を感謝すべきである。教育家、經世家、宗教家の如きは、徐ろに社會の眞相を達觀し、社會改造の先鋒となつて活動する際には、一方カール・マルクス主義の長短につき熱察靜慮し、長短黑白を甄別して、社會改善の道程に上るべきを深く感ずるものであるのだ。

#### 戊 カール・マルクスの影響

##### い ドイツに於ける社會救済問題

##### a 社會民主黨の勃興

マルクスが一度獅子吼するや、天下は翕然として之に響應し、労働問題が擡頭して、社會改

造の機運は、刻々に急迫を告ぐるに至つたが、御膝元の獨逸では、此が如何なる形勢に進んだ  
であらふか、集産主義を首唱して、労働者の肩を持つたと言ふ本尊、マルクスに對して、獨逸政  
府は、斷乎として、此が壓迫に着手し、此を國外に驅逐したのであつた、彼は本國を逐はれて西  
歐を經巡りつゝ、遂に倫敦の客舎で、十九世紀の晩年は、一八八四年に憤死したのであつた、同  
時に獨逸政治家は、社會政策を以つて、直に敵の本陣を衝く策を執り、國家が進んで社會問題  
の解決に着手したのであつた、此と同時に、マルクス直傳の集産主義者があれば、又此の主義  
を實際に運用するには、政治に依るの捷徑なるを知て、議會主義を取り、同志を議會に送つて、  
自家の所見を國政上に實現せしめんとした社會民主黨(Social Democracy)を生み出し、或は學者  
は奮起して社會改良主義を主張する等、十九世紀の後半期に於ける獨逸の社會改造論は、非  
常に多忙を極はめたのであつた、マルクスは、議會主義ではなかつた、弟子エンゲルス、カウツ  
キー等は、議會主義者であり、労働者の代表者を議會に送らんとし、一八六三年に、ライプチツ  
ヒに労働者大會を開き、直に社會民主黨を組織したので、設立當初は極めて微力であつたが、  
漸次黨員を増加するに至つたのだ、一八六八年には、マルクス直統のリープクネヒト、アウグ  
スト、ベーベル等は、社會民主労働黨を組織したので、當時ビスマルクは、政權を掌握して居つ  
たが、炯眼達識の士として、直に兩黨に向つて一大鐵槌を降したから、一八七五年には、兩派の合

同となつた、爾來ドイツには、労働問題が長足の勢を以つて國內を風靡し、着々事績を挙げた  
のであつた、社會民主黨の宣言書を見るに、普通選舉、信仰自由、教育は強迫制、無月謝主義、非宗  
教主義とし、常備兵を廢して、國民に兵事、教育の強制、訴訟辯護、醫療葬式は國營とし、税法改良  
労働者の保險保護に對する要求等で、之を堂々と社會に發表して、民衆運動を猛烈にしたの  
だ、此が爲に労働組合も成立し、産業上政治上にも偉大の功績を挙げたのである、工場法、養老  
年金制、失業者救濟法、労働保險法、母性保護法等を制定して、世界に其模範を垂るゝに至つた  
のであつた、だが社會民主黨は、漸く溫和化し、議會に位地を占むるに至るや、労働者の側面か  
ら遠ざかる傾向ありとして、之に對する不平の聲も高くなつたのだ、歐洲大騷亂勃發と同時に、  
社會民主黨は内部より破裂し、リープクネヒトは、労働者には護るべき國境なしと絶叫し  
て、軍事費議決の際には、斷然分離(一九一五年)し、獨立社會黨を起したのだ、過激派スバルタカ  
ス團は、此に屬して居る、穩和派には、パーゼ、カウツキー、ベルン、シュタイン等がある、獨逸帝國  
崩壞の事は、既に述べたが、現在には、此の穩和派の時代で、共和制下に、着々社會政策を實行して  
居るのである、此はロシアのボリシエツキーとは、其趣を異にし、労働階級の專制を否定  
し、全民の民主主義に則つて選舉權の公平分配に依り、全民を目的としたる政治、産業、教育、軍  
事をなすを理想として居るのであるが、大戰後暴力に均しき講和條件を強ひられたる獨逸



帝國は、此の穩和派に依て、果してよく其難局を切り抜け得らるゝであらふか、吾人は内堅實なる社會改造に依て、民風の振興、人心の緊張が企圖せられ、一日も早く國勢挽回の幸運に向はん事を切望するものである。

B 反マルクス派

イ 修正マルクス派

前述の如く、マルクス主義は獨逸全國を風靡したが、餘りに労働者萬能主義に偏し、過激極端に至つたから、此に反對する學說の起るは當然である。一は修正派、他は社會改良派である。前者は新カント派の學者に依り、倫理的社會主義に修正せんとするので、所謂社會主義のカント化運動である。カント時代には、まだ資本時代には入らなかつたのであつたが、カントの宣言的命令は、人格の絶對自由、人格至上主義を高唱するもので、之を社會主義に應用し、労働者の労働が商品として賣買せらるゝは、人格を無視するものだとの根據を與ふると同時に、一方には、マルクス主義の唯物宿命は、唯心主義理想主義の努力説と交代する必要に迫られ、マルクス派の缺陷を、新カント派の哲學にて修正せんとしたのは、時宜に適したものだ。哲學者が、社會主義隆昌時代に、餘りに時勢に超然たるの非を悟つて、社會主義を自家の藥籠中に攝取したと同巧異曲の論法で、以つて、社會主義のカント化が行はれたので、此の修正派が勃

興したのであつた。一八九〇年頃に至つては、新カント派の全盛時代に入らんとする時であつたから、社會主義者はマルクスの唯物史觀價值論の不合理なるに着眼し、尙政治と經濟とは、因果的關係に非らずして、平行的關係にある事に着眼し、此の三點の破綻は止むを得ず、カント派に接近せざるを得ざるに至り、哲學者には、マールブルヒ派のナトルプ、コーエン、社會主義者には、ゾムバルト、カウツキー、エドワード、ベルンシュユ、殊にベルンシュユは、ケーニヒスブルグ大哲學者の精神に訴ふる必要ある事を絶叫するあり、遂にマルクスの根城に破綻を生じ、此が修正を見るに至つたのだ。斯くなれば、社會主義は、労働者の人格向上を必要とすべく、只單に唯物を以て満足すべきに非らずして、人心の改造を必要とし、吾人の意志の努力に依つて、人類の理想的共同生活に入るべきものなるを高調するに至つたので、極めて穩當と思はるゝのだ。隨つてカントを社會主義の眞の創設者とし、唯物的の自欺的牢獄から救出して、唯心的の普遍最高の理想に入つたのであつた。此の修正的社會主義は、英國の労働黨員マクドナルドの採川する所となつたのである。世の社會主義を研究する人士は、深く顧みる所あるべしである。マルクスの科學的社會主義に對し、吾人の態度を決定するは最大切なる事と思ふのである。

ロ 社會改良主義

社會改良派は、最穩健なる論者であつて、一方資本主義の病弊に懲り切つて居るのは勿論、又他方には社會主義の暴戾には恐怖を懐いて居るのである。だから社會改造の急務なる事には、異論はないが、さりとて共產制集産制は、共に現代制度の破壊を目的としたるもの、到底此には同意し難いものである。其が主義としては、現制度の基礎の上に立つ事を根本條件として、即ち私有財産制を維持しつゝ、只此から生ずる自由競争の弊を除去し、利己心の絶滅を期せずして、公共心の發達を謀らん事を期して居るのだ。此が方法としては、個人の團結に依り、或は國家法制の力に依り、或は宗教道德の力に依りて、社會救済をなさんとする最着實穩健の方策を探らんとするものである。

#### 甲 自由的社會改良主義

此の社會改良派も、自から三派に分るるのだ。(甲)は自由改良主義を主張するものである。個人任意の團結例へば産業組合、労働組合、同業組合に依つて、社會の改良を企圖するもので、尙迄現制維持を主張するものだ。現代文化は、個人に自由を公認するが故に、其處に進歩發達を見るのであると論ずるのだが、絕對に自由を主張するものでなく、こは却つて強者が弱者を壓倒するものだとして居る。所論極めて穩健である。法上に於ては完全に自由を認め、人格の向上發達を謀り、以つて文明の餘澤に浴せしめんとするのだ。だからと謂つて物質上の平

等を認めず、人々々賢愚強弱勤怠の差がある以上は、物的分配の平等は、却つて不自然なる方法とするものである。要之個人の任意團結に依つて、弱者の相互扶助を強要し、其でも尙足りない所があれば、國家の保護は辭する所ではないのだ。國營も、民業の保護も、之を容認して居るのである。主唱者には、獨逸ではブレンタノ、ナウマン、英國にはマンチエスター學派を中心として居るのである。此を今日の實際生活に見るに、物價騰貴の折柄とて、最生活困難に陥て居るのは、消費者たる中流以下の自由職業者であるが、此等を生活の窮迫から救出さんには、是非公設市場を設け、廉賣、便益等を與ふるは勿論だが、消費購買組合の設立に依つて、仲買人の暴利から脱出するのが最安全確實なる方法であるのだ。此に依つて餘程生活改善を斷行し得るのだが、之を都市生活に見るに、まだ産業組合法が理想的に運用せられて、其機能を發揮せないから、随つて生活改善に大なる效果を示さないのが我國の現況であるのだ。財界大變動によつて、各階級人士が生活難に襲はれて居るが、特に下流の消費者階級の如きは、如上の方法を巧に運用して生活改善を實行すべきである。社會主義の如きは、未だ誰人も經驗をしない空想である。其結果の豫想は、寧ろ惡果と斷言し得る資料の多いものを、何を歡んで、之を實現する必要があるか、我國の如きは、將來産業組合法の普及に依つて、社會の改善をなすべき餘地は多大にあるものである。販賣、生産、信用購買の各組合の運用に適する訓練を施す

のは、目下の急務と思ふ。随つて此派の主張に耳を傾くる價值は十分にある事と思ふのだ。

### 乙 保守的社會改良主義

(乙)としては保守的社會改年がある。此は主として國家の權力に依つて、現代社會の改良を圖らんとするもので、随つて立法行政の力を借りて、資本主義を壓抑し、労働者階級の保護をなさんとするものである。其の論者は、現代社會生活の弊は、個人の自由に放任したるから起つたものである。だから其利害の調節には、個人の自由に放任して置いては到底救済し難いものである。國家が其折衝の任に當り、調和役を爲すべきである。富の増大を謀るよりは、各個人に對して救済を目的とすべき筈である。随つて共和制は不可で、君主制たるべし。政治家は往々にして個人主義の立場に墮し易いからだと謂つて居る。此の派の人士は、ヘーゲルの歴史哲學の上に立脚地を有して、個人の利害は、國家の利害に服従すべきである。君主のみが國家の利害を公平に代表し得るのだ。君主政治のみが、社會改良の實を擧げ得るのだと結論するのである。随つて個人の自助を輕視して、往々に國家の權力を重視する傾向となり易いのである。此が更に分れて二派となり、穩和派は、シユモラーが代表し、國家は立法行政の力を以つて資本家を抑制し、中流社會民、労働者の保護に任すべきだと論じ、過激派には、此穩和派より更に進んで、國家は生産分配に積極的に干渉すべし、社會有要の事業にして、個人の獨占到

陥り易い事業の如きは、國營主義を主張するものだ。此に至れば、彼の集産主義と相距る事遠からざる境地に迄進行し得べきもので、獨逸では、ワグネル、マイヤー等が之を主張し、之を國家社會主義と命名するに至つたのだ。ビスマルクは、ガール、マルクスの集産主義の勃興を恐れて、此派の主張を採用し、上述した如き社會政策を實行して、遂に模範的の社會政策を完成したのであつた。英國には、フエビアン派は此に屬し、シドニー、ウエツプ等が盛に之を唱導して居る。ニュージランドは、全然此の國家社會主義を實現して、模範的地方である。労働立法、稅法改革、社會政策が着々如上の理由から産み出されて居るのである。公産主義の思想が擡頭するに連れて、各國の爲政家が、此の派の主張を採用し、現制度の基礎の上に、着々穩健中正の社會改良を實行して居るのである。英國の如きは、ロイド、ジョージが首相となるや、盛に社會政策を實行して、社會救済の先手を打ち、過激なる集産主義を豫防して、雜れ日も足りない姿である。世界の中で模範的に社會的政策を實行して居る國は、丁抹であつて、彼の國が、此に依つて過激思想の變化より免かれ、國運隆々、民人其生に安んじて居るが如き、最賢明なる方法である事を知るのである。然り而して、英國人は元來が民族性として、個性尊重の國である。フエビアン派の主張は、到底満足を買ふ事が出来ないから、早晩他の主張を生ずべきである。ギルト、ソシアリズムの發生の條下にて之を論述するから、其理由は茲では略せよう。因に講

壇社會主義につき一言を添へたい。講壇社會主義とは、マークス學派から惡罵の意にて附けられたる名稱である。大學教授の主張する社會主義に名付けたものである。腐儒者が、どうして生々しき現實生活の改善に對する活きた問題を挿へ得るものであらう？ 謂はゞ教會内の一説教位のものだとの義であるが、何れに致せ、此の派に屬する學者には、前述した甲乙兩派の何れかに屬し、乙派の中にも二派があつて、各其立場に於て主張を貫徹せんとして居るのであるから、講壇社會主義を、只單に國家社會主義と謂ふならば、其は謬見である事を述べて置きたいのだ。

### 丙 キリスト教的社會改良主義

(丙)には基督教的社會改良主義である。即ちキリスト教の教義に依つて、社會の改良を企圖せんとする學派である。博愛慈善の精神に依つて貧者は尊敬し、富者謙抑して、相互依存の幸福を享有せしめんとするものである。要は精神の改善、道徳心の向上を以つて、社會の改善に資せんとするものである。マークス學派とは、全然反對の徑路を採用するものだ。首唱者には舊教主義はケツテルが個人の自由意志に重きを置いて、自助共濟を唱へ、新教主義はステツケルが國家の公權力に重きを置いて、國家の保護干渉を認むるのがある。

### 丁 批判

以上三派の區別あるが、要するに社會改良主義は、現代社會生活には、幾多の缺陷がある事を公認するが、其改善方案としては、革命的に非らずして、漸進的建設的たるに於て共通の立脚地に立つものである。而して其各には長短あつて、物的改良を主とするものには、自由改良主義、保守改良主義があり、前者は自助共濟を主張するが、往々にして個人主義に偏する恨はある。後者は國家の公權による保護干渉を主張するから、國家萬能主義に墮する缺陷はあるのだ。心的改善を主張するものは、キリスト教的社會改良主義である。自由的基督教的の社會改良主義は、堅實なる方策ではあるが、成功の迅速と普及とは容易に期し難いのだ。保守的改良主義は、成功の迅速と普及とはあるが、堅實は期し難いのだ。國營主義に偏すれば、集産主義に走り易く、隨つて個人の自由を抑制して、却つて文明の進歩を停滯する事がないのでなからうかと思はるのだ。吾等は平凡であるが、堅實穩健、中正で、積極的建設的なる社會改良策を採用しなくてはならない事を思ふのである。漸進的であつて革命的であつてはならないからだ。其には現制度の基礎の上に立脚する事を前提とすべきである。如上三派の長を採つて教育の普及、改良、上進の結果、個人の自覺心を喚起し、獨立自助の精神を鼓吹し、民衆の力で、下の方から徐々に改良の實を擧ぐると同時に、宗教道徳の普及に依つて、心の養成を謀り、公共協同、自制、謙讓の徳を涵養し、和衷協同中から社會の改良を圖るのも良策である。更に國家

の公權力に依つて、社會各階級の調和を謀り、利害調節の上の方から、社會改善の機運を促成するの妙策である、三者其一に偏するは不可である、此の意義に於て、社會改良主義は、共產黨の二主義に比して、最時勢に適應したる穩健中正の意見だと思ふ。

#### ハ 社會政策

經濟的デモクラシーに對して、現代人の思想は、非常に敏感である、隨つて往々過激極端に走り易くもあるが、此の際社會改良主義の如きは、吾等の最意を用ゐて研究し、以つて地方民人の思想善導上標的とすべき思想たり得るものと思ふ、現今社會政策 Social Policy が盛に喧傳せらるゝから、次には其主張、方案に就きて論述したい。

#### 甲 方策

抑社會政策とは、如何なる意義であるかと謂ふに、社會が社會の爲に、社會の力に依つて行ふ自然運行の調節法、此である、今世界各国は此の社會政策に依つて、經濟的デモクラシーの實現を企圖して居るので、丁抹の如きは、最模範的に施設せられて居ると謂ふ事だ、例へば、主要なる産業の如きは、之を國營に移し、生産を管理し、分配の公正を調節して居るのだ、品質一定、最高價格を決定し、國民必需品たる食料衣服靴等には、此の制度を適用して居るのだ、企業家の利潤が、或程度以上の利得がある場合の如きは、之に課税して徴收し、之を社會公共の目

的に善用するのである、戦時利得税は、戦時中に法外の利益を獲得したる人士に課税したのだが、之を平時に適用したものである、労働者に對しては、最低賃金を決定して、其生活の保證をなし、進んでは、凡ての階級の人士に對しては、一定の生活程度を保證して居る、一千圓以下の収入者の爲には、救助基金制を設け、且子供の數に應じて救與をなすが如き此である、富者に對しては、相當の課税をなして、多數貧民の救済に力を致して居るのである、社會政策の内容としては、第一に労働問題が其中心主題となるのだ、此には労働者の人格向上を主要件として、第一に労働を單に商品と見做さず、雇傭契約の改正、組合結社の自由を與ふる事が必要である、第二には労働者の衛生問題に關して、労働時間、夜業及休日の規定、工場設備、住宅問題の如きは大切なるものだ、第三には労働者の生活改善問題であつて、最低賃金制、労働保險、利益分配制の如きは、此だ、第四には労働者の教育問題で、職業教育、兒童の保育、家庭の慰安の如きは、此の中に入るものである、要するに労働問題は労働者の生活改善であり、防貧設備は當然起り來るのだ、此には狭義の防貧設備と、救貧の設備とを要するものだ、前者には、小賣市場、小資本金融機關、家庭職業簡易食堂を包含し、更に救濟機關の普及、結核豫防等がある、言はば衛生事業である、後者には、無料宿泊所、職業紹介所、罹災救助法等がある、此他、産業管理には、大企業に對する取締、小企業の保護、生活必需品の國營輸送機關の管理を要する、如上の施設

をなすことは國家税制の公正賦課により、國帑の充實が根本となるべく、税制改革は經濟的デモクラシーの根本義であると思ふ。關稅の調節、奢侈品の課稅、所得稅法の改正、各種に累進稅法の適用、更に偶然所得、不勞所得に對して、公正の課稅を社會政策の見地からは、其斷行を要求して居るのである。戰時利得稅、不勞所得たる相續稅、超過利得稅、土地增價稅の如き此である。其外空地稅(市街地にある)、超過宅地稅の如きは將來適當なる稅目となると思ふ。如上の如き稅制の改正を斷行するのみならず、更に消費監督を要し、食料品、原料品、其他必需品に對しては其價格に最高を限定し、以つて生活の保障をなすが如き此である。

### 乙 我國に於ける救濟事業

我國こそは、大正七年六月二十五日に、救濟事業調査會の官制を發有したが、要する所、政治を以つて社會救濟の大事業に當らん意を發表したもので、社會政策を加味した實行案が、今後續々實施せらるゝのであつて、誠に時宜に適したものとと思ふのだ。此の官制の下で調査せらるゝものが、八事項に分れて居る。左に其項目を舉げて、社會救濟事業内容の一般を知る資材に供せようと思ふ。

1. 生活狀態改良事業：小賣市場、住宅改良、小資金融、家庭職業、廉價宿泊及簡易食堂、其他
2. 窮民救濟事業：救濟制度、罹災救助制、其他

3. 兒童保護事業：嬰兒保育、貧兒教育、兒童虛弱防止、少年勞働制度、浮浪兒、不良兒の處置、少年犯罪防止、其他
4. 救濟的衛生事業：救濟機關の普及、災害救濟、精神病、白痴、低能の救濟、肺結核の救濟、其他

5. 教化事業：興行物改良、盲啞及低能教育、出獄人保護、矯風事業、細民部落の改善、其他
6. 勞働保護事業：勞働保護、工場勞働の改善、補習教育及徒弟制度、婦人勞働、勞働組合及仲裁制度、純益分配制度、失業救濟及職業紹介、移住民及出稼人の保護、其他

7. 小農保護事業：自作農の獎勵、小作農の保護、農民家產制度、產業組合の普及、改善、其他
8. 救濟事業の助成監督：救濟事業の指導監督並調査の機關、救濟事業の獎勵助成方法、救濟事業の連絡及取締、公共團體、公益團體及宗教團體等の活動、其他

此等は要するに現代制度を維持し、其基礎の上に、經濟的デモクラシーの要求する點を、巧に案配、調節せんとするものであるのだ。公產主義、共產主義は、世界の人類のまだ一度も經驗しない一種の空想である。吾輩は此等危險なる思想に依らずして、然かも經濟的公正の立場に入る方法を講ずるのが、識者の正に努力すべき點であると思ふのだ。此には社會改良主義

を措いて、他に之に優るものを發見するに困むのである。社會政策こそ今日及將來の社會改良論として、吾曹の大に研究を要すべきものであるのだ。此には稅制改正の如きは、其先決問題であつて、此を決行するには、今後幾多の困難を伴生すべきであらうが、剛毅果斷の政治家と、社會改造の先覺者との努力に依つて、希くは現代社會が確實に歩一歩と、向上改善の途程に上らん事を祈るものである。

カール・マルクス一度獨逸に出でて、社會改造の論議をなすや、世界は産業革命の急激に乗じて、貧富懸隔の甚大なる折柄とて、社會改造の叫聲は、各國に續出し、爲に國礎の動搖を促すあり、漸進、急進の論は、交互錯綜して、思潮の混亂期に入つた勢は、物凄くものである。要は貧に困む第四階級者のプロレタリアート級は、此に依て大波激浪中に、一管の葦を得た心地して、所謂勞働問題は、俄然擡頭するに至つたのである。獨逸國內に起つたマルクス主義の反動及其學説は、既に述べたのであるから、此からは各國に於ける其餘響を一瞥して見よふと思ふ。

#### ろ 學説上社會組織民族性との關係

茲に思想の發生と、民族性、社會組織との關係を瞥見する事は、決して徒爾ではないのである。獨逸民族は、十九世紀初頃から、民族主義の勃興に連れて、國家統一の必要に促され、國家制の鞏固に發達した邦國である。歴代の爲政家は、此が有機的統制に意を用ゐ、思想家、教育家も

内外相呼應して、國家主義を謳歌して、中央權制の樹立に努力した國であるから、自然官僚氣分が横溢し、軍隊的組織の遂行となつたのである。カール・マルクスの集産主義の起るは、斯る状態に於てである。社會改良主義の中に於ても、マルクス主義に酷似したる國家社會主義の唱導せらるるのも、當然の勢と見るべきであるのだ。所がマルクスに依つて鼓吹せられたる社會改造論は、此が社會組織、民族性を異にする他國に入るに當つては、自然變形せらるるものである。以下此が状況を述べべきであるが、今世界を驚かしたる思想も、其背後には常に民族性と合致すべきものなる事を思ふ時に、吾等は之を批判し、之を採用するに就いて幾多の教訓を得せらるるのである。

マルクスが一四四八年に共產黨宣言書を公布した十九世紀の真中頃から、西歐は漸く勞働問題に着目するに至つたのである。随つて、マルクス系社會改造運動は、非常に激烈になり、各地に大會を開催して、此が主張を宣言し、堂々所信の斷行を當局に迫るに至つたと同時に、思想家も、甲論乙駁、各其所信に忠實に活動するに至り、斯くして十九世紀後半には、勞働問題が社會改造の中心問題となり、各國に於て千態萬様の思想を生ずるに至つたのであつた。此から佛、英、米、露の其當時の状態を述べて見たいと思ふのである。

#### は 佛國サンヂカリズムの發生

先づ佛國から説明しよう、佛國民は獨逸民族とは異なり、野性的自由の愛せらるる民族で、且直觀哲學の繁榮する國であるから、社會主義……集産主義が入つて來ても、此が其儘に受け入れらるべきものではないのだ、必ず或變形をなすは勢の自然であるのだ、集産主義は物的分配の公正を要求するに急にして、個人自由を考察する事を忘れたのである、個人自由に放任したが爲に、資本主義を現出し、貧富の懸隔を誘引して、富豪の専横、貧民の壓迫となつて、勞働を商品として切賣りするに至るのであるから、之を改造して公産制度とし、以つて物的分配の公正を得しめんとしたのであるが、爲んぞ知らん、斯る集産主義制度になれば、再び社會其者に強犬の力を附與する事となつて、吾人は日常の食物を得るにさへ、自由を得難くなるのである、集産主義は政治的デモクラシーには、議會主義を採用して、立法行爲に訴へて、富の分配の公正を期したのである、(マークスは)所が縱令普通選舉が實施せられて、四年目毎に改造せられて、民衆政治が實現せられたからと謂つて、此で如何にして吾人の生活の改造がせらるるであらうか、此は恰も自然法學者の鼓吹に依つて、人權宣言が聲明せられ、人類は法の前では平等であると主張せられた、彼の十八世紀の政治的デモクラシーの効果と同等であるのだ、成程有産階級の人士に取つては、身體、生命の保護、自由、平等、名譽、權利能力、既得權の保護等は確認せられたであらうが、無産階級者の實際生活では、何たる影響はないのであ

る、依然として資本家階級の保護に過ぎなかつたと同様である、無産者階級には、保護さるべき何等の私有財産を有して居ないのである、法上の平等はあつても、實生活の充實、向上には殆んど風馬牛であつたと同様である、之に反して有産階級者は、營業契約の自由を保障せられ、斯くして所有權と不勞所得との確立となつて、其位地の安定を鞏固にし得た姿となつたのである、此に於て社會改造には、經濟的改造と同時に、政治的改造を伴生するの要ありとして、遂に共産的自治の建設を絶對し、無政府主義とサンヂカリズムとを生ずるに至つたのだ、前者は露國に起つて、バクレーニン、クロボトキンの主唱する所となり、後者は佛國にて宣揚せらるるに至つたのである、露國の事は、後に譲り、サンヂカリズムに就いて説明をせよ、集産主義は佛國に入つたが、元來が獨逸風の色彩濃厚であるから、到底自由を愛好する佛國民には調和すべくもないのだ、佛人の自由は、野に咲ける花である、飽迄自然的で人工を厭ひ、干渉を避けんとするものである、社會に強大なる力を與ふる事は、佛人の堪へ得ない點であるのだ、佛人の傳說的氣分に依つて、集産主義は改造を迫られたのだ、議會主義を採用しても、多くの人士は政界に入れば、其位地を悪用して、却つて勞働者を壓迫するに至るは火を睹るよりも明かである、之に反抗して、反理智的傾向を採用し、生命主義、直觀主義、行爲主義に出づるに至つたのだ、民族性と思想との關係に於て、此に機微の消息ある事を知らば、外來思潮を採



る際には、餘程之に對する緻密なる研究を要し、自國の國狀と國民性とを考察するの必要を知り得るのである。徒に外來思想たりとて之を其儘に受納するならば、百年噬臍の悔を貼すや明白なる事實と思ふのだ。偕サンヂカリズムは、何時頃から起つたかと謂ふに、一九〇七年三月八日午後六時、巴里全市の電燈が俄然消滅して、流石の華の都も、暗黒世界と化し、折柄國務を見て居つた首相クレマンソーは、且驚き且怪しみ急に閣員を召集して、机上に蠟燭を點じて、協議を凝らしたが、翌日は市中に何の異狀もなく、電燈は平常の如く煌々と全市を照し、市民は皆狐狸に魅せられた様に、啞然として謂ふ所を知らなかつたが、此がサンヂカリズムの所業であつたのだ。一九一〇年の十一月十一日にも、佛國の鐵道大罷業が起つた事があつた。此等は皆サンヂカリズムの仕業である。此の派は、社會主義から生れた一種の革命主義で、階級争闘を目的とするものである。マークス派から、バクレーンが分離し、無政府主義を唱導した後に、評論すべし。其バクレーンの亞派であつて、其目的は同盟組合全體の力を以つて、専ら同盟罷業に訴へて、現社會の産業制度を根柢から破壊せんとするものである。サンヂカリズム、Syndicalismは、労働組合の義であるが、此の意味を十分に表現するには、寧ろ無政府的、新労働主義と譯するのが適當であるのだ。今其主張を見るに、狂暴狼藉を極はめて居る。即ちマークス主義と同じく、資本主義の絶滅を期し、議會主義に依らないのみならず、尙進んで自

身の直接行動に出づるを原則として居るのだ。國家制を打破し、労働組合の外、何物をも認めず、非愛國主義で、無産者には母國はないのである。労働者の母國は、労働と報酬とのみである。愛國主義は、資本主義の擁護となるのみだ。國家制は過去のものだとする。際つて非軍隊主義である。軍隊は國家制に伴ふものだ。資本家擁護の具である。何を好んで資本家擁護の軍隊に入るの必要があるか。知識主義にも反對し、隨つて知識階級を撲滅すべし。此は不生産的の人士で社會の寄生蟲である。ゴシックの藝術には、大家はないのだ。社會改造は特權階級の手に依るに非らずして、無名労働者の力に依るべきである。理性は吾人の生活には何の力を與ふるものではない。直接行動を重んずべきだ。近代政治の墮落、社會主義の無氣力は、知識の過重から來て居るのである。マークス主義は、徒に進化の理法に一任して、無爲に未來の理想社會の實現を持つて居るのだ。少く働いて多く利益を獲んとするものである。汝の下賤なる樂天を止よと罵つて居る。要は直接行動に訴ふべきだ。ユートピアの知的表現でなく、ミースの意的表現が、唯一の綱領であるのだ。斯くして生産管理權を自己に收め、生産者兼消費者の外に、純消費者を認めない社會に改造せんとするのだ。集産主義に比して、更により、野狐兇惡の性質のものである。其の手段は例の直接行動で、總同盟罷業に依るのだ。労働者の元氣を鼓舞するに説明を以つてせずして、ミースを以つてし、労働者の心火に點じて、實行の爆發を促さん

とするものである。サボタージユ Sabotage (怠業、荒業) は即ち此である。此はスコットランドの方言 Caanny から出で、徐々に歩め Go Slow のらくら遣れ be careful not to do much の義である。要するに怠業である。多数人の運命を暗するに非らずして、少数者が徐々に秘密に實行するのである。故意に怠業するのである。サボット Sabot は木の靴である。或は楔である。之を動詞のサボタージユ Sabotage にして、徐々に歩むと謂ふ義にしたのだ。元來は巴里の陋屋に住んだ、赤貧の肺患者、バルチエーの創始にかかり、第四階級の者を救済する武器は、世界の總同盟罷工である。と宣言したのに其起源を有するといはれて居る。親友ソーレルの繼承する所となり、ベルトの此に加入するに至り、理論的基礎の必要を知り、當代世界の哲人で、佛國民である、アンリー、ベルグソンの哲學は創造的進化説を採用して、之を潤色するに至つたのである。ベルグソンが創造的進化論中に於て「意識は本質上自由である。實は自由其自身である」と説き、現在に於ける意識的存在は、或程度迄は過去に依つて制限せられないのだ。勿論同一條件さへ與ふれば、同一の結果を生ずると謂ふ因果律は、眞理には相違はないが、意識の場合に於ては、同一の條件は、決して再び與へる事は不可能である。時間は本質上からは、創造的のものだ。此の點から考察すれば、今將さに一の動作を取らんとする人は、常に前例なり境遇なりと相對しては居るが、然かも過去の知識に依頼する事は出来ない。随つて其處に何等か大膽な

る創造的活動が試みられなくてはならぬ」と論じて居るが、今サンヂカリズムは、如上の所説を自家に應用して、吾人は舊制度の乞食的原素に依つて、將來の社會を構成せんと努めてはならない。社會生活は出來合品ではないのだ。創造的過程であるのだ。此の過程の心核たるものは、之を統率するものは經濟上の生産組織である。して見れば、此組織及社會生活、道徳的生活は、根本から一新せられねばならないのだ。其一新さるゝ方法は、唯理に非らず、説明にもあらず、意的表示である。Myth より外に策はないのだ。直接行動であるべきだ。同盟罷工である。怠業たるべきだ。斯くして生産管理を、サンヂカールの手に掌握すべきだ。社會改造は破壊、革命に非ざれば不可であると論ずるのである。如何にも過激、狂暴に流れ到底現代社會生活を利する。と謂ふ事は出來ないのだ。實に彼等の目的は、利己自利にあるのである。彼等が労働者に説く所を見るに、社會の安寧秩序は汝等とは没交渉である。汝等は唯汝等一身の安寧幸福を求むべきである。汝等の力能く之を求むる事が出來るならば、如何なる手段に訴へても之を捕へよ。人生は享樂である。成るべく少し勞して、成るべく多くを得、以つて一生を最安樂に送るべしと謂つて居るのだ。彼等の眼中には國家はないのだ。無政府主義であるのだ。社會の破壊であり、個人の放縱なる生活が目的であるのだ。殊に惡むべきは、労働者が陰密の間に器械を破壊し、怠業して、事業能率の向上を減殺し、生産機關の停滯を謀らんとするものである。社會

の共同公存生活を迫害し、切角今日まで進歩したる人類文化の破壊をなさんとする最卑劣、卑怯、醜惡の思想であるのだ。産業機關に絶対自治を許したとて、果して多數の産業がよく統制せらるるであらうか、一は他を壓倒し、生産者は消費者を壓抑するに定まつて居るではないか。社會公共の利益を害して、労働者のみの利益を謀らんとするものである。惡辣暴戾の行爲を厭はず、資本家を征服し、社會全般の産業の萎縮を熱望して居るものである。若し此の種の思想が侵入せんか、忽ちにして労働者の徳性を破壊し、社會をして頹廢的の零圍氣中に陥没せしむべき思想界の大魔物であると思ふ。此の思想は、佛人を始め、ラテン民族の如き小工業の多き地方に蔓延し、殊に事をなすに瞬間的の衝動に左右せられて、之を直に熱情に訴へ、全力を以つて行動し、且溢れんばかりの情緒を吐露して憚からず、然かも何等の考慮をも費さない革命的暴民的特性のあるイタリア、イスパニア等の民族には、此の種の思潮が歡迎され易く、現に此の弊が南歐人、拉丁民族中に瀰蔓し、邦家の基礎に大動搖を來たして居るのである。デモクラシーは、公正の原理に依つて社會を律する事を標榜するものであるが、サンヂカリズムの如きは、人格を下劣にし、社會公正の原理を破壊するものとして、吾輩は鼓を鳴らし、大聲疾呼、此が浸入を豫防する必要があると思ふのである。

## に 露國に於ける狀況

露國の内情に就いては既に述べたのであるが、今マルクス思潮の勃興に伴ふ此の國の影響は、最峻烈を極はめたものと謂つてよいのである。一八二〇年頃からして、インテリゲンチアが、西歐殊に佛國に遊んで、將來した思想は、人權宣言の政治的革命思想であつたが、如何にせん建國以來の專制的氣分は、國內に横溢して、容易に自由思潮の侵入を許さず、知識階級の人士は止むを得ず、文藝に其隠棲の地を求めて、其鬱勃たる不平を洩らした。生々しき呪咀の文學を生み出したのであつた。露國に革命の起るべき因子は、既に具備して飽和點に達して居たものだが、只其機會のなかつたが爲に爆發を見なかつたに過ぎなかつたのだ。上流階級の下層階級に對する壓制、反言すれば上流者の利己心が即ち此であるのだ。財産殊に土地分配の不公平、有産階級の遊惰にして無益有害の生活を營める事、無産階級の立身出世の途なき事、有産無産兩階級の教育機關を異にせる事等は、露國に其事例眞に乏しからざるのである。君民其憂を異にし、君の臣を視る事、士芥の如く、臣の君を視る事、寇讐の如しとは、露國の眞相を叙述した名句と思はるる程によく的中して居るのである。

## A バクレーニン、クロボトキン

身貴族の出でありながら、バクレーニン、クロボトキンが無政府主義を唸出するには、蓋し止み難かつた事と思ふのだ。バクレーニンは、マルクス學統の人であつたが、一八七二年ヘーゲ大

會の際に、マックス學派から除外せられ、此から民衆の間に入つて、無政府主義を宣傳したのである。不幸一八七六年、伯林で死んだが、此と同時にクロボトキンがあつて、本國で無政府主義を宣傳し、共産主義を鼓吹したのである。彼は人生は相互扶助の側面に立つて議論を進むるものである。チャールス、ダウギンは、生物學中に生物界の二大原則として、生存競争、相互扶助を擧げて居るが、クロボトキンは、此の相互扶助の説を採用したものである。生物が宇宙間の存在物として、相互依存するは勿論ではあるが、人類の社會生活は、實に此の相互依存の生活であるのだ。荒野の開拓思想の開展、機械の發明、産業の發展等、一として相互依存に依らざるはないのだ。随つて宇宙間の一微小物であつても、人類共同努力の所産に歸しないものはないのであるとして、萬人共有論を生み出したのである。物價騰貴の結果、富を獲得した人があるが、此は人口増加等の結果ではないか、深山の奥に埋没せられたる鑛山に、價値を有するに至るのは、産業發達の結果であるのだ。鐵道の發展も、産業振興の賜物である。して見れば、凡有の生産は、要する所少數者の所有に歸すべきでなく、種族間の共有財であるべきだ。凡有の物は、萬人の共有すべきものであると決論するに至つたのである。而して生産を得る其勞働は、現在の如き賃銀勞働の強迫制を廢して、其代りに任意勞働たる勞働の喜悅を以つて從事せしめんとしたのだ。所説如何にも痛快ではあるが、斯る理想の社會が、現實の世界に實現せ

らるるであらうかは、深き考察を要すべきである。社會改良論者は、狂暴に非らざれば、空想に立つて、所説常に中正穩健を缺くの恨みがあるが、クロボトキンの所論の如きは、人類を驅つて、凡て純粹無垢の聖人化したる後に非らざれば、到底實現し難き説であるのだ。人性の發動するや、公明正大の側面もあるが、卑陋醜惡の側面もあつて、必ずしも純良の側のみとは斷言し難いものであるのだ。随つて何等の統制、制裁なき自由任意の社會はあり得ないのである。現在の如き國家制の發現するには、深き理由の儼存するものである。然かも人生は、此によつて善良高尚の生活に向上し得べきもので、決して國家制を呪咀すべきものでないのだ。國家制度は、人類が創造した最善美の一組織である。此に依つて人類文化の進化發展を企圖し得るものである。勿論國家が成立するには、絶對の權力を持つ事を唯一の條件とするから、社會成員の意志は、自然之に依て拘束統制されるは當然であるが、其拘束統制の必要は、何處にあるかを研究したならば、國家に絶對無限の權力を必要とする事を了解し得べく、決してバックニン、クロボトキンの如き、破壊暴戻の無政府主義は、主唱し得ないのであるのだ。國家に絶對無限の權力があると謂つたとて、決して少數の爲政者の、私利の爲に此を利用してよいと謂ふ義ではないのだ。社會の成員をして、道德的、目的に奉仕せしむるが爲に、此に背戻する者に對しての絶對強制的道を許すからである。露國の如きは、不幸にして少數者の私利に、其權

力が悪用せられたるが爲に、完美なる國家制をも呪咀せんとしたので、坊主が憎いから袈裟  
迄憎むと謂ふ仕打である。江戸の仇を長崎で打つとは、此の事を謂ふのである。不合理の主張  
に非らずして何ぞやであるのだ。人類が強制せられず、義務を遂行し得る境地に進むまで  
は、吾人は國家の強制を必要とし、國家制の儼存を要求するものである。何れの時に斯る妙境  
に到達し得るであらうか。餘りに現實味を飛び離れたる空想である。星の世界に憧がれて、現  
實世界から脚を離さむとする説であるのだ。國家存立の目的は、實に社會成員をして道德的  
目的の奉仕をなさしむるにあつて、決して國民の富を増加し、享樂と便益との機會を多く與  
へん事を理想とするものではないのだ。國民利福も人格價值の創造に役立ちて、始めて有價  
値の者である。富國強兵の外面のみに走つて、其道德的價值を滅殺したる例は、史上其類に乏  
しからざるのだ。ローマの滅亡は謂はすもがなである。獨逸の富強は、却て今回の慘禍を招い  
たではないか。況んや自國の偉大を欲する餘りに、帝國主義に變じて、軍事的、經濟的に他國を  
侵略するが如きは、決して國家當面の目的ではないのである。文化的、帝國主義の如きも、決し  
て國家の目的ではないのだ。文化は凡ての國民が創造すべき物である。一國の國民的特殊文  
化を、全然他國に通用せしめんとするは、此は一種の侵略主義である。勿論我國民の創造した  
る文化が、世界的意味を有するは、其内容の普遍性に依るのであつて、國民的特殊性に依るの

ではないのだ。一國民に依つて創造せられたる文化が、他國民に採用せらるるが爲には、其の  
自發的選擇に依るべきもので、強制すべきものではないのである。其を何ぞや、自國文化の高  
潮に達したるに誇負して、世界に文化を宣傳する等の驕慢なる暴舉に出づるが如きは、斷じ  
て許し難き所業と謂はなくてはならないのである。要するに國家生活は、人類生活の向上、進  
歩の爲には、缺くべからざるものであつて、人類が不完全なる間は、國家の強制力に依つて、此  
が救済改善をなす事に依つて、始めて人類の幸福を増進し得べきものであるのだ。自利排他  
の醜骸を幾多保藏しながら、之を解放して、自由任意の社會に放置するが如きは、再び原人時  
代の掠奪、争鬪の社會に復歸せしむるものである。愚も亦茲に至つて極まれりと謂ふべしで  
ある。畢竟、自國國狀救済の爲に發したる一の呪咀に過ぎないものである。人に働かせて自分  
は樂を貪らむとする人士の多き時代に、共產制度の下で、果して勞働喜悅の極樂郷を實現し  
得らるるであらうか。何等の制限なき自由消費、何等の制裁なき賃銀制度に非らざる勞働が  
あり得るであらうか。人性問題の研究を、今少しく緻密にして、此の種の議論を進むべきもの  
である。露國に於ては、他人を虐げ、自家一人のみを幸福にせむとしたるが爲に、極端なる專制  
政治が實現せられたのである。だからといつて、之を破壊して直に天上界にのみあり得べき  
空想を、下界に實現せんとするは、餘りにユートピア的の小説と謂はなくてはならないのだ。

B ボルシェヴィキ

如上の空想の起つた露國に、其にも優したるものが起つたとは、世は餘りに惡戯であり、皮肉と思ふのである。ボルシェヴィキ此であるのだ。此はマークス主義の直系に屬し、ヘルツ、エン、バクーニン等に依つて、十九世紀の後半期に、早く輸入せられたが、何れも農民のみで無理解であつたからして、何の反應もなかつたのだ。一八九〇年ニコラス二世の治下に、ウキツテの工業政策に依つて、資本主義の時代を現出し、田舎の農民は、大舉して都市に菌集をした。此の時にマークス主義は宣傳せられたのだ。當時露國は、國營の大工業勃興した時とて、マークス主義は、殆んど官許の姿であつた。國營主義のみを採用して、政治上の社會民主主義を抑壓する事は不可能であつた。遂に一八九〇年、ミンスクで労働黨が組織せられ、勞兵會と命名し、例のレーニンは其會長となつたのだ。マークス主義を信奉し、中央集權制幹部組織を以つて労働者の煽動をし、革命の準備をして居つたのだ。一九〇三年ストックホルムで、第二回の勞兵會を開いたが、此時二派に分れ、多數派ボルシェヴィキは、中央集權制過激主義を採用し、勞働郷を造るを理想としたのだ。レーニンは其頭領であつた。少數派メンシェヴィキは、地方分權的、穩和主義を採出し、ブレカノフを頭目とした。一億七千萬の民衆を包容する大露は、僅近二十年前迄は、農業國であつたが、土地は少數者の兼併に歸し、其三分の一のみ、僅にミ

レー制として、農村の共有地であるのだ。耕地少い上に、收穫が少く、常に飢餓の状態にあるの現状である。爲に粗食の結果、死亡率は非常に高いのだ。一九〇九年には、男女農民の職を失たもの數百萬を以つて數へられ、養ふべき家族を算へたならば、二千萬人に上つたと謂はれて居る。此の窮餘の民のあるのに、有産階級の放蕩生活は、筆紙の盡し難い程だ。とある。畢竟社會組織の不健全なる事は、覆ふべからざるのである。マークス主義は、資本主義を打破り、財産分配の不公平打破を目的として居るのだ。農民の窮狀打破、よい意味の社會救済の名は、爛眼なるレーニンの着目する所となり、農民の歡迎する所となつたのだ。一九一七年、第一回の革命は、此の所有權分配の打破であつた。戰爭中他國に放浪して居つたレーニンは、前既に述べた通りに、獨逸參謀本部の反間苦肉策に依て、露國に輸送せられ、第一回革命失敗の後を受けて、例の果斷剛毅の性を以て、萬事を解決し、其前途に横はる障礙を排除し、抵抗するものは少しも容赦する所なく、遣り逢けらるる殘忍酷薄の人とて、茲に露國積年の大弊を破壊するに着手したのであつた。

C ソビエツト政治と其批判

ソビエツト政治は、純マークス主義を斷行して土地を國有にし、農民には其使用權を分與したのだ。有産階級者の絶滅を期し、無産階級者の專制政治を實現したのだ。從來は二十萬

人の官僚で統治し来たが、今回は六十万人の労働黨で支配する事になつたのだ。立憲議會を解散し労働組合を禁じ、有産階級の資本を掠奪し、不平の徒には赤衛軍を差向けて壓伏したので、上下殆んど今は恐怖時代に入つて居ると謂はれて居る。ソビエツト(代表會議は、村郡市、縣州と漸次階級的に組織せられたる代表議會であるが、此と殆んど過激派の強制選挙である。要するに、官僚的露國は崩壊して、無産階級の専制時代に入つたのである。所有權廢止、商業の廢止、銀行の國有等を斷行したのだ。實に空前の大破壊である。此等を決行するに當つて、眞に國家の興隆とか、民人の幸福とかを考慮したであらうか、思ふても、棟然たらざるを得ないのだ。マークス主義の理論は、既に獨逸でも其非合理的なるに飽き足らずして幾多修正せられたものである。社會改良主義の擡頭をも必要とするに至つたのだ。露國は積弊の久しきもの病膏肓に入つて、改革は容易の業ではないのであるが、現在の露國は如何に進行して居るのであらうか、此は露國國民の實際に解決すべき問題で、他國人の顧慮すべき問題でないのであるが、其日用品を得るのにさへ、一々切符制度の煩に堪へないと謂はれて居る。商業廢止、時間外の強制労働、赤衛軍の徵發、食物制限等は、専制時代にも見難き専制主義だと謂ふ事である。殊に農民が其收穫物を國家に引渡さぬと謂ふ事である。止むを得ず商品と引換へに農作物を政府が取上げるのだ。如上の現状にして眞であるならば、何處に民人の幸福がある。架

を以つて紂に代へたより、更に甚しいではないか。社會主義は不幸物質主義に偏したが、其でも物的分配の公正を絶叫し、貧民救済、労働者の向上を目的としたのである。今レーニンの施設に見るに、其物的公正をさへ容易に得難いのではないか。況んや精神的自由の如きは、到底享有し得らるるものではないのだ。クロボトキンの所説中、労働の喜悅を述べて居るが、斯る理想に對しては、レーニン政府の施設は、全然反對でないか。自由の要求は、到底獲得せられぬのだ。要するに、官僚政治を破壊して、労働者が政府を乗取つたに過ぎないのである。今や中央集權策、労働規律の振肅、専門家の重用に依て、共產主義の過激派政治も、徐々に改良の途に向ふとも謂はるるが、自由と正義との關係を無視した思想からは、決して善良なる効果を期待し得るものではないのだ。依然として少數ながらも粗惡、狂暴性に富んだる労働者専制の政治を、露國民は受けなくてはならないのだ。氣の毒であるのは、無智の露國民であると思ふのである。殊に労働者の賃銀率が平等になつた結果は、熟練の職工は大不平で、此が引いて生産能率の減少を來たし、食料の不足、輸送機關の緩慢、工業能率の減少は、露國をして物資の窮乏に困らしむると謂ふ事である。労働は神聖なもので、文化向上の根本力ではあるが、然かも其の根柢には、労働の苦痛を伴ふものである。よし労働喜悅の情で働くとしても、人性には始動の礙滯、憶劫は必然に作生するものである。此をも忍んで人類が勤勞すると謂ふには、現在

の人類生活に、私有制度の保障があるからである。集産・共産の主義では、到底労働喜悅の法悦は生れ難いものであるのだ。此等を考慮せずして、只現状破壊に暴進したロシアが、食物物の窮乏に泣くは、必然の徑路であるのだ。國民生活の向上は愚か、文化の退歩は當然の事と思ふのである。過激派の名は何れ世界歴史の中に残るのであらうが、決して絶美の讃詞を受くる事はなからうと思ふ。此は唯時が其を試験をする事と思ふから、吾人は其推移に深き注意を拂ふ事を要するのである。之を要するに無政府共産主義の宣傳と謂ひ、マークス主義の實行と謂ひ、理論上不合理の點の少からざるのであるが、之を實行に表はさなくては、國家の改造が出来ない迄に、國勢凌夷し、秩序の紊亂した露國民の内部的な生活は、誠に同情に値するものである。吾人は此等思潮の其國に起るに至るべき原因につき、深き注意を拂ひ、國民思想の善導に十二分の警戒を要すべき事と思ふのである。

### は 英國に於ける狀況

#### A 労働問題の一瞥

英國は、世界に於て産業革命を最早く完了した國民であると同時に、労働問題にしても最早く解決した國であるのだ。一八〇二年から、一九〇一年の百年間には、労働問題は解決せられて、労働者の位地は向上し、生活の充實をなし來たのであつた。だが、此國も、十八世紀末から

十九世紀初頭にかけては、労働者の状態は、極めて悲惨な状態であつたのであつた。五六才の幼兒を、炭坑内に使用し、其勞苦に堪へずして、逃出するものがあるから、鐵鎖を以つて之を緊縛して、強制的に労働に使用した事もあつたが、次第に労働政策の改善に力を致し、遂に労働組合の成立を見るに至つたのであつた。

#### B 社會政策の實行

労働問題は、如上の百年間に、四期を以つて改善せられた様である。第一期には、職工の保護範圍を擴張して、遂に十八才以下の者は、一切工場で使用する事を禁じ、之を女子に迄適用するに至つたのであつた。第二期には、就業時間の短縮をし、十七時間労働は、遂に八時間労働に減ぜられ、徹宵就業の嚴禁にまで進んだのだ。以上は主に織維工業等に就いて、あつたが、第三期には、之を各種工業に適用するに至り、第四期には、工場監督官を設置して、工場法の實施を確實にするに至つて、労働者保護労働者救済には苦心をしたのであつた。此が爲に、獨佛露に於て見るが如き過激兇暴の思想、又は實行運動の如きは、擡頭しないのであつた。此は一に、アングロサクソン民族性の然らしむる所で、一方には個性の尊重を、八ヶ間敷く主張する民族性であるから、個人の自由權利の伸張に反對する思想行動は、到底此の國民の承知しない所である。此が英國の偉大なる所であり、長所であるのだ。佛露で見ると、如き狂暴性は、重厚な



る英國民には勃發せないので國家も社會改良主義に依り、社會政策の實施に汲々とし、一九〇六年からして此が着々事實に表はれたのであつた。一九〇六年には、小學兒童に對する食物供給法、産業爭議法の制定、一九〇七年には、最低賃銀制、失業者救済法の制定、一九〇八年には、八時間労働法、養老年金制の制定、一九一〇年には、税制改正を斷行して居るのだ。一九一三年には、労働組合に政治活動をし得る權を與へ、一九一七年には、労働組合の合同を獎勵し、一九一九年には、産業上の民主主義に依つて、労働者に産業經營に參與する權を與へたなど、殆んど社會主義の所説を、英國は率先して實行したのであつた。尙此でも社會的不安は絶えず起つて、一九一九年十月一日から九日迄の三角同盟、一九二〇年十月に起つた炭坑鐵道運輸の同盟運動、更に本年四月に入つて此の三角同盟が再發した……實に産業管理權を、労働者が獲得せんとした運動であつたが、常に其結果は平和の間に解決せられて行く點に、大英國の民族性の長所を發揮する様である。

C ロバート、オーウエン

思想方面に於ては、ロバート、オーウエンが十九世紀の初頭に起り、社會主義の宣傳をなしたのである。此は前述した様に、産業革命により、労働者の生活状態が不良となつたから、救済の必要に迫られたからである。オーウエンは、此の救済には、教育と環境改善との二法あり

とし、毫も階級争闘の如きは鼓吹せないのだ。改良の計畫も熟し、發表した理想村の如き、中々に緻密の案であつたが、當時の人は、議會の權能を以つて改造の萬能力ありと信じたから、殆んど此に反對したのだ。止むを得ず、一八二五年に、北米に渡航して、新理想村を建設せんとし、ニュー・ハアモニーに三萬噐の土地を買収して、彼の主張たる協同村を實施し、労働者即生産者として、其生産品は共產主義で、分配の公正を期せんとしたのだが、共產主義の理想は、餘りに空想であつて、成效せず、歸國後、ロンドンに居を構へて、晩年には、共產主義宣傳と、計畫とに力を用ゐたのであつた。社會主義 Socialism なる語は、一八三五年に彼の使用したのに始まつたのである。西歐に於ては、此の國は率先此種の問題に力を用ゐた事を知り得るのである。

B フエビアン派

次に起つたのが、フエビアン派であつた。英國で社會運動は、チャーチストの力に依つた事が多かつたが、此は政治に依り、議會を通じて、労働状態の改善を企圖したので、これも一旦鎮靜に歸すると、同運動に一大轉機を來たし、労働者は主力を労働組合、消費組合の組織に注ぎ、社會主義思想及運動は、冬蟄の狀に入つて、三十年間を經過するに至つたのだ。マークスが起つて、科學的社會主義を宣傳したる一八六七年頃には、當時世界の獨占的工業國であつた英國の經濟繁榮に、労働者も資本家と共に均霑して居つたから、今日主張せらるるが如き社

會制度の改善は期して得らるべきを豫想して居つたからして、熟練職工の如きは、少しも之に耳を假さなかつたのであつた。所が一八八〇年代に入ると、英國も此等に然かく風馬牛であるを許さなくなり、偶米國からはヘンリー・ジョージが來り、大陸からはマルクスが逃込んで來た時として、茲に社會主義運動が復活するに至つたのだ。一八八三年に社會民主聯合會(Social Democratic Federation (S. D. F.))が起つた。此は、マルクスの階級争闘説の上に立つたのであるから、英國の民族性には合致しなく、間もなく衰微した。其後に例のフェビアン派が起つたのだ。最も會合の最初は、一八八三年であつた。フェビアンの名は、ローマの名將、フェビウス・マキヌスから來た名である。フェビウスは、ハンニバルと戦ふ時に、世人が其緩慢を責めた際に、時機の到來する迄隠忍すべしと言つた人だ。然し時來らば、フェビウスの如くに、敵に大打撃を與へよとの義である。隨て機會主義漸進主義妥協主義を表現して居るのだ。此の派は革命を排して改良を理想に耽らずして、實務を心酔せずして批判せんとする、穩健の主義に出たのであつた。社會主義的行政事務の綿密周到なる調査の如きは、實に此の派の努力した點であつた。此にシドニー・ウエップ、パナード、ショウ等が加入したのだ。此の派は社會改良派に屬し、土地資本の社會公有をば主張するが、マルクス派の價值論をば採用して居るのではないのだ。然らば、何を論據に求めたかと謂ふに、ヘンリー・ジョージ、リカルドの地代法則に基いて

土地國有(地代公收)を主張したのを、更に擴張して産業公有に應用したのである。隨つて形式上は、土地の所有權は依然として存続はして居るが、實質上は地主の特殊利益は消滅して、從來特種階級に獨占せられた利益は、社會全般に歸屬せしむると謂ふに在るのだ。此の地代公收を更に擴張して、資本能力の賦課に迄及ぼさんとしたのである。然かも飽迄激變的崩壊を避け、漸進的に社會の改造を企圖したのである。だが近來に至り餘りに行政的實務に没頭して、人類日常生活の必要以上のものに對する要求を理解する事が出来ない。低級の社會主義思想であるとして、此を攻撃するに至つたのだ。之を要するにフェビアン派は、思想上からは國家社會主義に屬し、資本の公有と同時に、其管理權をも國家の手に收めんとするものである。だが英國の民族性は、國家に強大なる力を與ふる事には賛成する者ではないのだ。だから國家主義的色彩の濃厚である獨逸に起つたマルクス派は、此の國に入つて變形するは自然の徑路である。其變形物たるフェビアン派の國家公有主義すら、個性尊重、自由愛好の英國民には歓迎せられずして、更に其活路を見出さんとするに至つたのだ。

### E 組合社會主義

#### イ 發生

甲 ウキリヤム、モーリス

組合社会主義 Guild Socialism の英國に起るは、決して偶然ではないのだ。此から此の思想の起源について述べて見たい。先づウキリヤム、モーリスに就いて述べよう。彼は建築家として世に出でた人であつた。家屋の建築と同時に、室内装飾品の工匠であつたが、晩年社会改良に力を入れて、個人の自由を力説し、殊に強制的労働に依るに非らずして、労働喜悅の世界を導くにありとし、斯くして創造と生命との社会を建設せんとしたのである。政治的社會主義でなくして、藝術的の社會主義である。著書 *News from No Where* には、此が其理想を描寫して居るのだ。十九世紀から労働組合が強大となり、資本家を脅かすに至つたから、政府は兵力を以つて之を鎮壓せんとし、革命が一九五二年に起り、内亂二年にして平定し、新社会は實現せられた。其新社会はトーマス、ムーアのユートピアに擬して描寫せられ、テムス河畔を、初夏舟遊したる際、弗と夢想郷に入る態に脚色せられたもので、新社会出現後百五十年目頃の世態は、次の如しだと述べて居るのである。即ち十四世紀のギルト時代の如く、製作品は何れも精巧を極めて美化せられて居るが、幾らするかと謂ふ言葉は、此の社会にはないのである。随つて努力に對する報酬の觀念はないのだ。男女は美人のみであるし、貧乏人は一人もない。大都市はなくなつて、凡てが田園的都市である。全國が一大庭園で住宅、仕事場、産業の小舎は、皆此等庭園中に散在して居るのである。地方自治は發達して、凡て住民の會議で進行し、社会は私有

産制でないから、財産保護の政府軍隊の必要はなく、労働は喜悅で、各人が愛好の念を以つて活動して居る。随つて無報酬であると謂ふのだ。要之資本主義時代の市場生産、營利生産でなく、必需品生産、精巧品生産で、消費の安全よりは、創造喜悅の生産、労働愛好の時代を要望して居るのだ。モーリスに依つて唱導せられたる労働喜悅の主張は、總てベルトランド、ラッセルカーペンターを生むに至つたのだ。

#### 乙 パートランド、ラッセル

ラッセルは英國に於ける有名な數學家であつた。後半生には社会改良家として出陣し、其論鋒も中々に鋭くあり、世界大騷亂中にも、自家の所説を赤裸々に披瀝して、國法の爲に監禁に逢つた志士の面影を有する人である。彼は過去の文明は、理性に偏重し、人間の衝動中、所有衝動のみの満足を目的とする社会でありと罵倒し、社会主義も此の所有衝動の調節を目的とするものなりと嘲つて居る。此が爲に世界的戦争は不幸にして、此の所有衝動の爲に起つたものであるからして、是非將來は創造衝動の發揮し得る社会に改造を企圖すべきである。世人は所有衝動の爲に休息なき労働に惱殺せられ、消極的快樂に耽り、環境に甘んずるのである。將來の社会は衝動の重用、善導に全力を傾倒すべきである。所有衝動は死に向ふものであるが、創造的衝動は愛、建設、生の喜に向ふものである。労働の喜悅は、此より生ずるものであ

る。賃銀奴隷から解放せられて、労働喜悅の社會こそ、將來社會の目的であるのだ。今日迄の教育は、人に服従を強要し、個人の成功を第一としたが、今後の社會は創造的生活を目的とし、尊敬心を養成し、博愛、同情、自由、攻學の念を涵養して、精神生活尊重の社會とし、本能を善導して、社會生活には各人が相互尊敬の社會たらしむべしと鼓吹するに至つたのだ。

### 丙 カーペンター

次いでカーペンターは、現代文明の疾患を論じ、文明的疾患は、私有財制度の公認より起り、其が貧富の階級を生じ、遂に人類を利己的にし、生活を不安に驅つたのだから、此が救済には、自然生活に復歸して、生活を簡易にし、心身の調和統一を謀り、各人相互扶助の社會にし、内心の自發要求に依り、社會奉仕をなす様に導くべきでありとし、經濟的疾患としては、過去の文明は、有無を通ずる、通商の社會であつたが、今日の社會は、營利主義の社會に墮して、詐欺的行為發生し、不正手段を弄し、或は廣告を濫用し、爲に生産費の昂上は、物價騰貴を促し、需給の調節を不安定とするに至つたのであるから、今後の社會には、民心の改造、社會組織の改造を斷行して、營利生産は必要生産とし、生活を優化し、労働を美化し、要は労働喜悅の社會に改造すべしと論ずるに至つたのであつた。労働の喜悅は、自由創造の境地に入つて、個性の發揮をなすによつて、始めて達成せらるるものである。天性の所好に依る労働は、恰も藝術家の作品に

於けるか如きもので、萬人此の藝術家の態度に入つて、始めて社會生活は愉快に調和的になり得るものであるとするのである。勿論制裁なき労働は、安逸に流るゝ、恐はないのではないが、人は生活を生命とするものである。共同團體として生存するものであるから、各自は其團體の爲に働く事、手足の身體全部に對するが如きものであると謂ふのだ。約言すれば、自由なる社會に入らんとするものである。此には營利生産では不可である。美用を兼備せる自給自足の時代に入らんとするものである。さすれば徒らなる勞力を省いて、時間の短縮を來たし、各自所好の労働に従事するが故に、能率の向上となり、社會全般の實用を達し得べしと論ずるのである。所説如何にも時弊には的中しては居るが、餘りに人性美を過重視して、寧ろユートピア的に走つた恨なき能はずである。

### □ 學說

次いでベンチー出でて、一九〇六年にギルト制度の復活を叫び、カーペンターの所論を繼承して、労働の美化、美術と手工との一致、中世ギルト制の復興を圖り、以つて現時の極端なる自由競争、營利生産を打破せんとしたのである。ギルト社會主義の名稱は、此から起るので、中世社會は、現代の社會に見るが如き、自由競争、營利生産、貨幣價值尊重の弊はなく、賃銀奴隷、機械的私利的の害は見るを得ないのだ。實に中世ギルト制の時代にあつては、政治、宗教、産業

の生活は統一せられ各員は相互扶助の精神に充溢して、貧民救済、組合員の保護、共同團體の面目の維持に任じ、生産品は一定の標準あつて、不正競争の防止をなし、品質は精美、労働は統一せられて、時間に制限があり、作品は原料、製品、數量に制限があつて、一に労働者の道徳心に訴へて製作せられたるものである。此のギルト制を復興するには、大工場を小工業とするのにあるのだ。此には電力の供給を便利、低廉にして、小規模の工業を各地方に勃興せしめ、要は手工業と趣味との調和を謀り、美術家と工業家とを接近せしむれば、自然に人生を美化し、美術を通じて共同生活の相互扶助に入らしめ得るのであるのだ。此が地方ギルト主義の主張である。所が一九〇六年頃には如上の諸説に共鳴する人士は、僅に少數の知識階級者に限られて、普遍化するに至らなかつたが、一九一〇年頃から世態一變して、遂にギルト社會主義の成立を見るに至つたのである。當時労働者は、生活改善の達成には、政治的運動に依つて其功を奏せんとしたが、物價は日に高騰するばかりであつて、到底自家運動の目的を達し能はざるに氣付き、運動方針に缺陷あるを自覺するに至つて、茲にギルト社會主義が擡頭するに至つたのだ。即ち労働者は、一方に於て労働政策が労働者解放の手段として、信頼すべからざるを會得すると同時に、他方にては、労働運動の使命は資本主義的經濟組織の現状では、到底貫徹し難きを理解し始めたからだ。折柄佛國のサンヂカリズム宣傳が、英國に猛烈に行はれて

遂に労働者が、生産管理權の掌握を得て、集産主義の弊から脱せんとするに至り、斯くしてギルト社會主義が、此の國に起つたのだ。反言すれば、集産主義が、感激の力を失ひ、サンヂカリズムの波浪が、一時的の狂熱として過ぎ去つた時に、英國の労働運動は、自然に新しき原理を要求するに至つたのだ。集産主義の賃銀奴隷からの解放とサンヂカリズムの生産者の專制を捨て、茲に生産者の自由と、全社會の幸福とを調和すべき、遠大なる理想を得んが爲に生れ出でたのであつた。然らば組合社會主義の本領は如何、前度々反復した様に、集産主義は生産手段を國家管理の下に置くが、賃銀制度を改めない内は、労働掠奪は依然として行はるゝものだ。唯從來は個人の資本家が、労働者の價値掠奪を行つたに對して、今回は國家が労働力を掠奪するのだから、組合社會主義は之に飽足らずして、生産手段は國家に委託はするが、其統制管理は、凡て之を労働者の自治的運用に一任せんとするものである。更に詳言すれば、生産手段の國有は必要だが、國家が其管理統制までをなすは、餘りに消費者の側面ばかりを顧慮して、生産者即労働者の自由獨立を等閑に附するものだ。とするのだ。此の點は餘程サンヂカリズムに類似して居るが、然かもサンヂカリズムは、革命的暴力的であつて、政治的民主主義の生活に慣れたる英國には、到底此を採用するものではないのだ。然かも餘りに生産者側を過重して、消費者側を輕視する點を好まないのだ。即ち集産主義、サンヂカリズムの兩主義の

折衷協調を組合社会主義に依つて試みんとしたのであつた。組合社会主義の社会組織には、兩様あつて、一方に生産者の代表機關として、ギルトの組織をなし、之に生産經營の任務を附し、他方には消費者の代表機關として國家を樹立し、以つて生産者の專制を剋制し、消費者の利益を擁護せんとする仕組であるのだ。然して各種の組合間に於ける諸問題は、生産者議會に於て、此が解決を講じ、他方にては消費者代表の議會を開いて、消費に關する諸事項の解決を謀り、兩者間に起つた事項は、兩者よりは均等の代表者から成れる共同委員で協議せんとするものである。此のギルト主義内にも、二派あり、一方はナショナルギルトと、他方にはロイカルギルトとの分離此である。前者はホブソン、コールに依て主唱せられ、後者はベンチーに依つて提唱せられて居る。兩者共通の點は、資本主義の精髓は、商業主義にあるから、資本主義の打破には、商業主義の破壊を要すと謂へる事である。しかも此の商業主義の見方に、兩者の差異點があるのである。即ち前者にあつては、資本主義の精髓は、賃銀制度に依存するものである。賃銀制度こそ労働を商品とするものである。此の制度の下に、賃銀奴隷が存在するのだとするのだ。だからして資本主義中の賃銀奴隷を排斥はするが、大規模生産をば排斥はしない。更に機械生産を主張するのだ。機械の奴隷たる代りに、機械の主人たる事を奨むるのだ。之に反して彼等は賃銀制度よりは産業の國民化に反對し、商業主義は大規模生産に必然的

に伴生するものである。随つて器械を支配するが爲には、此と絶縁すべき事を主張し、中世のギルト的工業に復歸する事を叫ぶのだ。斯く兩者は資本主義の本質としての商業主義の原因に對して、相反せる意見を有し、此が其分離をなして、前者は商業主義の原因が、賃銀制度にあるから、此が撤廢を提唱するに對して、後者は商業主義の原因が、産業主義にあるから、此が撤廢を要求して中世手工業の復興を絶叫するのである。要之兩者區別の重要點を列舉すれば、國民的ギルトは此大規模生産を支持するのに、地方的ギルトは、此の大規模生産の中に害惡の潜在を叫ぶものである。前者は機械其者に害惡を認めないから、機械の排斥に非らずして、機械の統制を主張するに對し、後者は大規模生産に於ける機械こそ、營利生産を包藏するものだ。と論ずるのだ。前者の賃銀制度を、資本主義の精髓とするのに對して、後者は賃銀制度は寧ろ害惡に非らずとするのだ。斯く兩者の主張上には差別はあるが、ベンチーは、一九一七年大騒亂の影響によつて、國家的ギルトに賛意を表はすに至つたから、ギルト主義は、目下はナショナルギルト主義の時代であると謂つてよいのだ。茲に附記すべきは、國家に對するギルトマンの意見である。此の國家觀は、無政府主義、若くはサンヂカリズムの夫とは大差あるのである。サンヂカリズムの國家觀は、プロレタリアートの社會には、國家は無用であるとする事は、無政府主義者と同一であるが、之に反してギルトマンは、現在の國家は特種階級たる

資本家に悪用せらるゝ事はあるが、此は國家の本質ではないのだ、如何なる時代が到来しても、國家は其本來の任務を遂行するが爲に、其存在を必要とするものである、即ち國家は個人の社會的生存をなすに當つて、共通する事項を取扱ふ機關として、必在すべきものだと言ふにあるのだ、其所説傾聴すべき點があるのである、尙此のギルド社會主義は、目下英國にて盛に研究論議をせられ、其成立も僅かによりならないのであつて、將來此が更に發展を見るべきであるが、此に對する批判をなすは決して早計ではない事と思ふ、流石に英國民である、穩健中正を愛する民族性であるから、過激、狂暴の主義は到底採用するものでないから、國家制を維持しながら、個人の自由を抑損しない範圍内に於て、生産の管理權を得、賃銀奴隷の解放を斷行して、労働者の自由獨立と、全社會の幸福とを將來せんとするものであるが、更に進んで考察した時に於て、吾等は幾多の缺陷を發見せざるを得ないのである。

## 其批判

要之、吾人は一個の人間として、生産者と消費者とを兼るゝのであるのに、之を強いて分離する事は不可能ではないか、生産者、消費者は、兩々相分れて、權力分離の位置に立つものである、ば、利害相反の兩代表者の二重組織を造り、國民ギルドは生産者を代表し、國家議會は消費者を代表するものであるから、果してよく調和すべきか、生産代表者は、労働せざる者は食ふな

と要求し、消費代表者は、公正の分配を要求するものであるから、此の間、多数者の横暴を現出し、少数者、天才は抑壓を蒙り、真正の自由は蹂躪せらるゝに至るや、火を睹るよりも明ではないか、民主政治の不成績は、政治に偏して、經濟を疎んずるより起つた弊であるから、茲に社會民主主義の勃興となつたが、サンチガリズムは、此の民主政治を厭つて、少數自覺者の政治を要望したではないか、今ギルド社會主義は、生産本位の社會政策に、此の民主主義の方法を採用せんとするものであるが、眞に多数決に依る代議政治の實績を擧げ得べきや、懸念に堪へないではないか、大規模の産業組織であるからして、一地方のギルト議會にしても、組合員は多数に上るであらふからして、少数者の自由正義は到底蹂躪を免かれ難い事と思ふのだ、社會組織改造の至難なる眞に思ふべしである、吾曹は、眞に社會組織の改造が行はれたからとて、人性の具有する野心、嫉妬、猜忌、威壓、權謀、誘惑、排斥、争鬭等が、排去改善さるゝに非らざれば、百年河清を待つよりも至難に非らずやと思はるゝのである、今組合社會主義の所説を検するに、比較的穩健だと謂ふに過ぎないものである、之を直ちに是認して、世界各國に之が實施を推奨すべきものに非らざるは、勿論であるのだ、只現下労働運動社會改造説の行き詰つた時代に於て、妥協的、自由愛好の民族性を有する英國に於ける社會改造論として、一瞥を與ふれば、足れりである、獨、佛、露、英に起つた社會改造運動を研究するに當り、民族性との關係に

想到して、吾人は將來此等學說の發展に深甚の注意を拂ふべきを思ふのだ。

#### ハ 米國に於ける狀況

北米合衆國は、十九世紀後半期に入つて、産業革命に入つたのだが、何分にも土地廣漠で、開拓事業を第一着手として、交通機關を充實し、鐵道の布設に連れて、耕境を開拓し、道路を通じ、地方の啓發に従事したのである。歐羅巴の移民を招徠して、活動を開き、農業に着手したが、到底人力の補充は十分に行かないから、東洋から支那人、續いて我國から續々移民を送るに至つたのであつた。東部・中西部地方に、近世的工業が勃興したが、生産物は國內の需要を供給するに忙殺せられて他を顧みるの暇もなく、事業を計畫すれば原料物資は豊富であるから、何をなしても成功せざるなき調子であり、歐洲から入込む移住民は十數年後には相當の富を得られ又獲らるゝべき希望を有して、汝々として生業に勵精するが故に、富の分配は、近世的産業の特色である大量生産、大資本主義經濟の時代に入つて居るが、國內労働者の氣分も、中歐諸國で見るが如き惡化することは少いのである。労働問題は、米國にても起るは起つたが、其が今日までは常軌を逸する風にも見えないのだ。米國の労働問題の起つたは、十九世紀の後半期の中期である。一八八一年に其萌芽を發し、一八八六年にアメリカン・プロエデレーション・オブ・レーバー American Federation of Labour が正式に成立したが、所謂勞資

協調を保ち、労働者の生活改善、向上に進む丈で、マックス主義を直に實現せんとする如き形勢にはなつて居なかつたのだ。サミュエル・ゴンバースは、労働組合を統率し、彼國労働者の節制統一の爲に、本年は既に頽齡七十歳になるまで、約三十六年間、労働者の地位向上の爲に奮闘して、八時間制を實行し、賃銀の最低率をも定めたのであつた。自動車會社長フォードの如きは、労働者に對する態度も立派で、よく熟練職工を多數に使用し、賃銀の如きは最高率を支給して居る者もある。世界中にて労働者の地位は、最上級にあるのだから、東西兩洋から、米國に入込む移民労働者の數も、年々多數に上つたのであつた。スバルゴーク、米國には社會主義は近き未來に於ては起るまいと樂觀するものも、世界隨一の富有國で、事業も多く、労働者の状態が改善せられて居る等の諸點からの立論と思はるゝのだ。然るに歐洲大騷亂と共に、コムパースの率ゐる労働組合が、保守的貴族的なるに飽き足らず、社會改造氣分の横溢なるに、乗じて、茲に過激なる社會主義思想が、擡頭し、労働者中でも急進派は、遂に I. w. w. Independent World Worker を組織し、マックス主義を遵奉して、陰密の間に北米合衆國の労働問題が赤化せんとするに至つた事は、注目に値する事である。I. w. w. は一九〇五年の創立にかゝり、多くは過激、急進の人々を以て組織せられ、幾多の暴行、殺人等の罪をば遣り兼ねまじき勢であるから、政府資本家からは、迫害嘲弄を蒙り、且コムパースの率ゐる労働組合員からも迫害せられ



ては居るが、迫害せらるればせらるゝほど、悪戦苦闘に堪へて、今日では相當の勢力ある團體となりつゝ、あると謂ふ事である。不平、不熟練職工のみの團體であつて、其主義が妥協を廢し、資本主義を否定せんとする極左黨であるから、此が今後米國にどれ程頭を擡ぐべきかは、豫測し難い事と思ふ。要は北米合衆國は、國土廣闊、物資豊富で、事業が夥多なるのに、勞力が乏しいのであるから、勞働者に對する待遇、及其生活法も向上し易いのであるから、歐洲に於けるが如き、社會救済問題の過激なる運動が、左程急を告げて居ないと謂ひ得ると思ふ。然し此が將來如何に發展すべきかは、吾人の須臾も注意を怠るべからざる事と思ふのだ。

#### と 我國民の態度

マールクス主義の長所短所は、既に詳述した通りであるし、此が佛露英米に入つては、夫々國情に基いて取捨改廢せられた事も叙述したのであるが、我國の如きは、産業革命に入つたのは、明治卅年頃からで、日清戰役までは純農業時代であつて、國家は國權宣揚の方面に明治維新後、全力を傾注し、國民も此の大旗の下に、一意其に導かれて、只外國文明の模倣に、維日も足りなかつた状態であるから、國民生活に直接する經濟問題に、朝野人心の集注する事は少かつた。と謂てよい。中歐に於て社會問題が擡頭し、社會主義思想の漸く激甚となつた頃には、二三思想家に依て此等の思想が、我國にも輸入せられたのみで、國民は此と殆んど没交渉であ

つたのだ。日清役後三國干涉の結果、半島の還附となるや、例の臥薪嘗膽に、國民の耳目は集注せられて、國權宣揚の爲に、十年間の睡伏期に入つたが、三十七八年の日露役によつて、宿志を達して、國權宣揚は、略其目的を達したが、經濟生活は此頃からして、漸く資本主義經濟の時代に入り、工業の勃興、都市の人口集中となり、貧富の懸隔も漸く顯著となつて、直接に國民生活を政治の中樞とするに至り、社會政策を加味する救済問題が、國民の視聽に敏感となるに至つたのであつた。明治も終はつて大正に入るや、大正五年世界大戦争の勃發に連れ、我國は交戦國ながらも、戰場を相距る事、一萬哩、世界に物資、原料、交通機關の供給を掌る事となり、始めて世界並の資本主義時代に入つたので、此頃からして、世界共通の經濟的デモクラシーが、我國民の間に泌々と繰込むに至つたのである。社會救済問題の由來は、既に西洋史の概觀中に述べたのであるが、我國では知識階級が、講堂又は著書に依つて講演紹介をしたのみで、此が國民の凡てに普遍的に宣傳せられたのでなかつたのだ。所が所謂時局の影響に依り、生活問題が、凡百の問題の中心となり、大正七年八月に、例の米騒動が、全國の各都市に突發してからは、頓に我國一般社會の着目する所となり、夢物語の紹介やら、カール・マルクスの資本論の翻譯物が續出するに至り、社會主義の批判とか論難とかで、出版界は持切りの姿となつたのであつた。此等が、只單に知識階級人士の、西洋物紹介に止まらないで、實際に社會救済の急務な

るに着目して、其が施設に着手すると同時に、労働問題も起り、歐米に於けると同一の徑路を踏むに非ずやと、一時は識者をして邦家の前路に對して深憂を懐かしめたばかりでなく、實業家資本家の心膽をさへ寒からしめんとしたが、世界經濟の不景氣風の襲來に逢ふや、俄然此等の問題は、其勢を潛めた感なき能はずである、事業繰延、打切縮小等の爲に、労働者の解雇、失業となつて、一時は潮の如く都市に打寄せた農業労働者が、再び不景氣に依つて、元の田園に歸耕するに至つたのである、歐米の如き資本主義經濟の爛熟期に入つて、病膏盲に罹つたのと異なつて、多少安堵すべき状態の様ではあるが、此と謂ふのも、我國の工業が、主として纖維工業を宗とし、紡織事業の如きは、戦時中は世界産額の約七割を、我國で供給し得た如き盛況に達した最古き歴史を有するのだが、此等の労働者は、重に女子殊に少女が、大多数を占め、其他養蠶製絲織物業の如き、殆んど婦女子が労働者の多數を占めて居るが故に、労働問題は、深刻に大袈裟には擡頭しなかつたのであつた、製鐵事業、機械工業、造船事業の勃興に連れて、男子殊に正式の義務教育を受けたる熟練職工が多數に上る曉には、我國と雖ども、早晩此の種の問題が喧しくなるは火を睹るよりも明かなる事と思ふ、現に石炭鑛業に従事する労働者、又は比較的教育を受け居る者の多き印刷業の労働者には、多少歐米式の労働運動が侵入し來て居ると謂ふ事である、で決して樂觀すべきものではないのだ、吾人は我國の産業が、今

後益其組織を大にし、規模を擴張し、其能率の増進をなして、世界的に工業の發展をなすは、年々人口増加に伴ふ對策策として、其過剩人口をよく消化し、有用化すると言へる、所謂人口處分問題からも、大切なる事と思ふのであるが、其と同時に、當然伴生すべき社會問題には、朝野の人士が、最堅實穩健なる思想に依つて、我國の社會救済に當らむ事を切望するものである、我國は一方、大資本經濟組織の工業國とならむとすると、同時に他方には、農業を生業とする國家である、五六〇〇萬の人口中、世帯數一一二二萬戸あるが、其中で農業従事者の世帯數は約七割を占めて居るのだ、此中で五町歩以上が一分二厘、一町歩以上五町歩以下が二割九分、一町歩以下が六割九分を占めて、其中には自作兼小作農あり、純小作農もあるのである、だから國民生活から謂へば、七割を占め居る農民中の約七割が、一町歩以下の小農を以つて組成せられたる社會である、小作農は、小企業家であるか、半労働半企業家であるかは、立論の方法で如何様にもなるのだが、農業社會問題は、今後我國の大問題であるのだ、一方工場労働問題と同時に、他方に農業労働問題が併發して、社會の世相は複雑紛糾に進むべきであらふからして、此等社會救済に關して、歐米諸國に於ける何れの學說を採るべきか、或は其國の組織、風習の異なるにつれて、特異の發達をなすべきものとするならば、我國では此を如何に改造して行くべきものであるかは、國民の双肩に課せられたる共通の試験問題であると思ふ、マ

クスは、科學的態度を持して、社會的正義の爲に咆哮し、寧ろ資本家に對する怨恨、憤怒の上に立論した厭ひがあつて、未來の考察を缺き、消費者本位に走つて、物的の公正分配のみに偏したものであるから、自由と正義の關係の如きは、忘られた恨みがあるのだ、建設的方面少く、破壊的方面多く、私有財産制を破壊して、公産主義に走り、社會の權力を強大にして、個人を無視し、階級争闘を煽動したのである、人性を樂觀して、組織科學の力を偏重して、合理的に社會は救済し得べしとしたのである、此等の幾多の缺陷を包藏する學說を、直ちに移して、之を我國に適用するが如きは、狂暴である、到底之を採用すべきではない、獨逸に修正社會主義が起り、社會改良主義の勃興に深き注意を拂ふべきである、自由の愛惜に偏すれば、クロボトキンの學說に陥るし、生産者側の主張に聞けば、サルチカルズムの議論となつて、各一長一短を包藏するものである、組合社會主義は、國家の存立を要望し、生産消費兩側面の要求を、民主主義で解決せんとする主張であるが、其處には豫想し得べき幾多の缺陷を包藏するものである、事は、前回迄に詳述した所である、此に於てか、現代社會組織を維持しつゝ、此が短所を矯正すべき漸進主義こそ、我國民の採るべき態度であるべきであると思ふ、現代社會組織は、私有財産制を認容し、此の基礎の上に生活法を建設したものである、所が此の私有財産制を認容するが爲に、社會的分配の不正を來たすから、此の私有産に對する改革を施さんとするの

が、今日社會救済に關する諸説の共通點である、所が私有財産制は、果して根本に於て罪惡たるべき因子を包含すべきか、此が第一の研究題たるべきである、若し公平に私有財が分配され得るならば、共產主義と同様に、正義の要求を充足し得るものと思ふのである、只問題は過去現在に於て陥つた如き弊害を除去する事に留意すると同時に、進んで私有財制の美點を發揚する様にすべきであるのだ、ブルードンは、此の點に於て一種の異なりたる見地に立つた社會改良家である、彼は自由の愛惜家であつた、自由唯一の要件は、實に財産であり、としたのは卓見と思ふ、實に財産は權力に對して屈服しないものである、權力は集中的で、個性無視に偏するが、財産は遠心的で、非一元的、分散的である、若し私有財産制が、佛國から消滅すれば、此の國民の貴き自由の情操と、崇高なる權利の觀念とは、地を拂ふに至らんと謂つて居る、如上の説の通りに、私有財は個人の獨立を保護するものである、孤立しても尙飢渴しない丈の可能を有する生活をして、始めて藝術科學に没頭し得るものである、健全なる社會の中堅民は、此の如き階級の人士に於て見得らるゝものだ、分産主義と謂へる一派が、近時唱導せらるゝに至つたのも、論據は茲にあるのだ、私有財産を萬人に分配し、一人でも無産者を出さざる様にし、一人でも暴富者を出さざる社會とせむとするのだ、反言すれば、何人にも所有を許し、此の所有の上に自由を享有せしめんとするのだ、アイルランドの如き農業本位の國で

は、此の分産主義が盛に行はれて居るのだ、我國の如きは深く鑑みる所あるべしだ、一體今日までの社會改良家は、人間の性善と組織の効果を過信して、理想社會を建設せんとしたのであつて、人類間に嫉妬猜忌鬭争殘忍の所行が、不斷に行はれ居る事を忘れて居る、随つて労働の苦痛の如きは消滅せらるゝものと考察して居るが、此が根本の誤謬であるのだ、労働の苦痛は、到底現代の經濟組織からは除去し得るものではない、人類の根本性に深き根帯を有するから、人類の労働には、強制誘導を必要とするもので、其干涉の程度を極最少限度に止むる様にすべきは大切であるが、其最有效なるは、私有財産制の認容より外にないのである、ラッセルの唱導するが如くに、創造衝動を暢達せしむる様な社會に改造するのは最妙であるが、さりとて所有衝動は、人類中から消し難き強烈なるものであるのだ、只此に一定適度の制限を與へて、惡しき方面に行く事を防止すると同時に、人類に普遍したる競争本能を利用して、國家向上の光明路に進ましむる様に、人生生活に活氣あらしめ、充實ある生活を築かしむるものである、況んや自由の享有は、私有財産制にして始めて得らるゝものとするれば、此私有財産を尊重すると同時に、嚴正なる社會的責任感。を以つて財産を獲得する様に奨むべきである、斯くして獲得したる富こそは、社會生活の調和劑として、自然的にして幸福の源泉たるべきものと思ふ、善良なる地主が、自家の土地を愛着して、其土の上にて死せん事を希

ふ愛郷心は、道德上の恒心。を造り上げ、精神的定住者たらしめ得るものである。

要之、經濟的デモクラシーに關しては、民族性と社會組織に依り、各國特異の思潮が生れ出づる事を知るのであるが、我國民は此の點に關し、慎重熟慮する事が肝要である、社會組織の改造は、人心の改造の上に築かるべきものと思ふ、一步一步と長き間に階段を逐ふべきである、現制の改むべきものも多数にある事ではあるが、飽迄も堅忍持久すべきである、現代制現代經濟組織の上に立ちて、社會政策の實現を期すると同時に、萬人をして共々に富ましむるを目的とすべきであると思ふ、徒に過激急進の諸説を、無批判に採用するが如きは、我國家を危くし、亦民族を死滅に導くものと思ふべしと思ふ。

## 6 要説

回を重ねる事數十項を分つ事數百と述べ來たが、要はデモクラシーは、現代思潮の基調たるべきものたる事、此が発生するには、個人が相當年齢に達せざれば、自覺期に到達しないと、同様に、社會も相當の年月を重ね、文化の發達を見なくては、社會的自覺の域に進まないものであると謂へる事を、歴史的に證明する爲に、東西兩洋の史實文獻に激して、史的考察を試みたのであつた、我國は世界無比の建國の體裁を具備したる國家である、君民同心一體として今日謂ふが如きデモクラシーの眞髓を有して居つたのであるが、西洋文明は其國體を異に

し、侵略的國家の性質上、君民間は常に争鬭觀念の上に立ち、不斷に葛藤は絶えないものが、人民の自覺が相當に進むに連れて、デモクラシーの擡頭となつたものである事、デモクラシーの語は、ギリシア時代に起つたが、此は政治の惡方面の意義を代表するもので、今日謂ふが如き思想と没交渉なる事、西洋では中世史に自由都市の勃興に連れて、市民の自覺が政治的デモクラシーの端緒となつた事、中世末期と近世史との津梁たるべき文藝復興期に入つて、個人的自覺に到達し、此が外部的には、文藝の復興となり、内部的自覺に入つて、宗教改革となり、近世史となつて、宗教、政治、學術の自覺期に入り、歐洲文化の基礎を確立した事等を述べたのである。政治、學術の如き、共に根柢に個人的主義が根柢をなし、殊に學術の如きは、主知的、唯理的に走つて、社會萬般の革新を企圖し、議論往々一方に偏して、過激、狂暴の舉に出で、政治の革命となり、歐洲大陸には、謂ひ難き悲惨事を出現した事を述べたのである。佛國革命の如きは、個人主義の根柢に築かれたる謬見が、其革命の基調をなしたのであつた。デモクラシーは、斯る純個人的のものでは、到底人類の救済をなし得るものではないから、十九世紀に入り、社會尊重の議論を生じ、此が調和を見るに至つた事、此と同時に十九世紀に於ける思潮變遷の一瞥を與へて、此が變轉すべき思潮との關係にまで立至つたのであつた。一方に政治的革命の勃興と同時に、經濟生活の激變を促成すべき事情が勃興し、産業革命、交通革命と相俟つ

て、經濟政策の變化を促し、社會救済問題が十九世紀に入つて頓に騒がしく、且重要問題となり、カール・マルクスの出現に依て、社會救済問題が、科學的考察を経るに至つて、世は一入デモクラシー全盛の時代に入り、社會、經濟、政治、文化のデモクラシーと其意義を擴張するに至つたのであつた。殊に廿世紀に入り、世界大戦争を機會に、デモクラシーは、世界の視聽を聳動し、世はデモクラシー萬能の時代に入つたのである。就中人類生活は、經濟を基調とするものであるから、經濟的デモクラシーが、其大部分を占むるに至り、社會問題、労働問題等は、目下世界の誰人も考慮を逸する事が出来ない重要事項となつたのである。隨つて此に對する學說も百出し、各國は其國風と社會組織とに順應する説を立て、居る其狀況に一瞥を與へ、我國民の執るべき態度にまで論及したのである。

要之デモクラシーを深く論究するが爲には、社會と個人との關係を明晰にする必要がある。此個人と社會との關係は、時代に依つて種々異なつて居つて、時には個人的見解に偏し、時としては社會的見解に偏する事がある、共に正當なる見解と謂ふ事は出来ないものである。個人主義的見解を採用する人は、社會を以つて單に個人の一集合體に過ぎずとし、個人は主として社會は客であり、個人の利害又は權利は最後のものにして、社會は此に對しては無力なりとするのである。此に對して社會的見解を有する人は、個人は、單なる抽象に過ぎず、世には

人類以外に何物も存在せずと謂へる見解を持し、若し個人の利害と、社會の利害と相衝突する時には、寧ろ個人の方を捨て、社會の方を尊重すべしであると説くのである。此の兩種の見解は共に謬つて居つて、如上の意義の個人も存在しなければ、又社會も存在しないものである。實に兩者の關係は、相即不離のもので、一方のみの勝利は、他方の衰亡を來たすものである。社會共同の安寧、秩序、幸福の増進の中には、各個人の安寧、幸福をも包括したるものであり、實に個人と社會とは生活過程の二側面に過ぎないものである。何れを先にし、何れを後にすべきものではないのだ。其主客輕重を論ずべきものではないのだ。一方の利害や、成功や、缺點は他方の利害成功缺點となつて其間離るべからざる動すべからざる關係がある事實なのであるのだ。此を時代によつて、主客輕重を論ずる所に、缺陷を生じ、弊害を醸したものである。個人の見解を主張した自然法論者のロック、ヒュームが亞流であるルツソーにしても、其當時の社會の弊害に憤激したる呪咀の聲とより見えないのである。若し個人のみが實在であつて、社會は其影に過ぎないとするならば、其個人は誰に依つて生れたるかを反問せざるを得ないではないか。個人の出生には、兩親を要し、兩親は更に四人の親の存する事を要するから、其個人は民族團體が先在して、茲に個人が出生した事を實證するものではないか。肉體的個人が、如上の徑路を有する如くに、精神的存在に於ても、同様に説明し得るのであ

る。個人の有する意識内容は、其個人の私有獨創に非ずして、社會團體の意識の反映であるべきでないか。實に社會は一の生命を有する事、個人と毫も異なる事はないのだ。然かも、其は只單に個人の機械的集合に非ずして、個人の生活が互に相交渉し、運命が互に相接合したる協動的、有機的の大なる生命の流で、之を社會精神、社會生命、又は時代の精神 *Zeit Geist* と謂ふのである。此生命こそは各個人を誘導して共同の社會生活に入らしめ、共同の社會的目的に向つて進行せしむる、大なる統一的結束力であるのだ。而して其は外部から附與せられたるものでなくして、内部的、創造的、自發的のものである。實に人類天賦の社交性に基いて、各個人の心裡に躍活する一個の組織的、合目的、主觀的の原理が、社會生命となるのである。只此の意義が、今日吾人人類の上には十分に發現せられて居ないまでである。此の社會的統一力は、或は權力、或は富力の語にて表現しようとするものもあり、或は人々の協働作用に歸せんとするものもあり、或は宗教を以つてし、或は思想を以つてせんとするものもある。更に進んでは、同類意識、同類感、或は普遍的等の名を以つてせんとするものもあつて、其表現法は區々ではあるが、要は此等の諸要素が、社會結束の根本力となつて、複雑多端なる個人的生活を統制して行くものであるのだ。果して然らば、個人的見解を有する人士の所論は、決して妥當なりと許す譯には行かない。隨つて社會を無視する議論は、狂に非らずんば暴であるべきだ。此と同様に、社會が

主で、個人は單なる抽象なりと謂ふ議論も誤りである。個人の存在は事實で、毫も疑ふべき點を認めないのである。何人が干渉し、壓制しても、干犯し難き自由意志を有するではないか、カントの人格説は、茲に於て一種崇高の感に打たれざるを得ないのだ。随つて社會尊重に偏して個人を無視する國家至上主義は、營に個人を退化せしむるのみならず、其國家社會をも退歩せしむるものである。ヘーゲル學説を引ける獨逸官僚派の國家至上主義は、遂に今回の獨逸の崩壊を導いたと謂ふが、此處に其誤れるを實證するものと思ふのである。斯くの如く個人は自主、自省、自判、自制する自由の境地を有する一人格の實在と認むべきと同時に、社會も、一の人格を有する實在と見るべきである。併かも兩者は相互對立的の關係にあるべきものでなくして、生活過程中に於ける兩面を指して、一方は社會と謂ひ、他方を個人と謂ふまでである。此の意義に於て、社會聯帶説は最よく這般の事實を説明するものである。實に個人は孤立的個人でなくして、社會的個人である。空間的に社會的聯帶の生活をなすのみでなく、時間的にも社會聯帶の生活をなすのである。此の社會的個人である以上は、社會に對して負へる債務を辨償するのが、實に個人の本務である。法律上の行爲に依れる債務ではないが、法律に準すべき債務を負担するものだ。と解釋したのは、殊に面白き説明であるのだ。個人は自我を修養して、遂に社會我に活き、社會我の現實に努力すべきと同時に、社會は個人を保護獎勵

して、常に社會我の實現に努力すべき様に、施設經營すべきであるのだ。之を政治的に謂へば、少數階級の人士の専制ではなくして、權力の平等化を要求するのである。經濟的に謂へば、少數資本家の専制でなくして、富の社會化を要求するのだ。私有財産制下に於て、可成社會政策を實行して、其目的に近づくと謂ふのだ。社會上の身分、門閥等によつて待遇を區別せずして、出立點に於ては、人類を平等に見、其後には人格の實質的差別によつて、社會的事業に參與せしめ、其功績相當の待遇を要求するに至つたのだ。

個人的見解を主張するが爲に社會を輕視した十七、八世紀の歐洲に、幾多の誤謬、此から生じたる悲惨事があつた様に、社會を重視して、個人を機械視した古代スパルタ、東西兩洋に於ける專制政治の弊毒は、舉げ盡し難い位である。個人、社會の關係を、生物學的に解釋して、有機的に説明した學説があるが、此も思はざるの甚しきものである。成程兩見解の對立から生じたる弊害を除去するが爲の調和説としては、巧妙に出來て居るが、要は細胞は、有機的の一分子として、盲目的に其機能を發揮する丈で、自家の裁量獨創を認めない點に於て、個人を機械視する缺點を有するものである。カントの論じた如くに、個人は人格者であるべきだ。心理的には知情意の統一者であり、倫理的には自覺を以つて自己が責任の主體として、統一行動して居るものである。反言すれば、目的、理想の觀念を有し、是非善惡の批判力を備へ、自己の行動

に責任を感じて、獨立自主の存在物たる點に於て、個人は一人の人格者である。だから社會が此の個人を無視し機械視するは不可である。生物學の見地に立つ社會有機體説は、往々個人の人格を輕視する恨みがあるのである。社會は個人に對し、個人發展の機會を與へ、個人を刺戟して活動せしめ、個人をして組織的活動をなさしめ、個人行爲の標準を與へて、歸趨を知らしむるものである。所が此の社會は、往々靜的停滯の保守的狀態に陥り易いものであるから、個人は絶えず、此の社會に對して、努力貢獻を要するのである。個人の社會に對して盡すべきは、社會は個人の無数の活動の相關的協働の一大組織であるから、其社會性を十分に發揮すべき様に個人の努力を要するのである。幾千年間個人努力の蓄積が、今日社會の文化であるから、此の共同財を個人は受納改造して、次代へ遺産として繼紹すべきである。個人の創造進歩は、此の點に於て非常なる職能を有するものである。此が天才的の獨創、創意のみに限らない、自己天職の自覺に基いて、如何なる卑賤の事功に對しても改善をするならば、此が社會に對する貢獻であり、民族に對する恩人であるのだ。

之を要約すれば、社會は統制的原理 *Regulative principle* を以て、個人に臨み、個人は創造的原理 *Creative principle* を以て、社會に對すべきであるのだ。然かも統制的原理は、創造的原理を有意義に活動せしむる様にすべきと同時に、創造的原理は、個別の行動に偏せずして、常に全體

と調和統一を保つ態度を探るべきである。斯くして社會と個人とは、生活過程に於て各其職能を十分に發揮し得るのである。實にデモクラシーは如上の説明の如くに調和統一の發達を希望せんとするものであるが、不幸にして十八世紀迄のデモクラシーは、個人的側面に偏じ、個人主義の主張に過ぎたのであつた。此が十九世紀に入り、社會聯帶説を生じ、漸く調和せらるゝに至り、穩健公正の立脚地に立つに至つたのである。個人尊重主義、社會尊重主義との調和せられたのが、現今の所謂デモクラシーであるのだ。個人主義的デモクラシーの自由平等は、個人的自由量的平等であつたが、調和せられたるデモクラシーでは、此が社會的自由であり、質的平等でなくてはならないのだ。社會公共の爲には私利私益を主張すべきではなく、社會的、公共的善の爲に奉仕、貢獻すべきである。自利、小我を棄て、大我、社會我に生くべきである。此が爲に、各個人をして人類生活の過程に入らしむる際には、誰人にも其人格的平等を與ふる所謂機會の均等を與へよと謂ふのだ。人類の永き生活過程中に於ては、各員は自家天賦の全能力を發揮して、自家を表現するのであるから、茲に其事項に對する功績の差を生ずるのであるから、社會は其功績相當の待遇を與ふるを要し、斯くして始めて萬人をして、各其志を遂げしめ得べく、茲に平和光明の生活を實現し得るのである。社會改造の眞義は、此に至つて其究竟地に到着し得るのである。此が人類生活にあつては、國際的デモクラシーとなり、



國家相互の間に平等平和友愛の情誼が維持せられ、國內的デモクラシーには政治經濟社會文化のデモクラシーとなるのだ。國際的デモクラシーは、既に詳述した様に各國家の獨立自重を妨碍しないと同時に、自國特有の文化を創造して、世界人類の文化福祉の増進に相互協同扶掖するのが、世界人類の通義であるべきである。國內的デモクラシー中、政治的デモクラシーは、國家個人の相關的、共同的の立場にあつて、然かも國家は國民各自の十分なる發展の機會を促進し、道徳的生活に入らしむる様に施設すべきである。國家存立の價值、使命は此にあるのだ。其には國民をして、社會的に自覺せしむるを要し、社會進歩向上の爲に自我の實現を期せしむるを要するのだ。自治政治は此の國民によつて始めて實現せらるべきものである。普通選舉も此の境地に至つて可能であるのだ。國民の政治的訓練は、歸する所は人格價値の創造に忠實なる民人の改造問題に統括せらるゝのである。責任を自覺せず、共同、公共の社會的、道徳心の缺乏せる民族には、自活政治、デモクラシーの政治は到底實施しても有效なる效果を得らるべきではないのだ。文化的デモクラシーの實現は、社會民人の文化的修練を要する事は、謂はずもがなではないか。民衆文化の普及、向上が出来て、始めて社會は文化的に進み得るのである。社會的デモクラシーは、機會均等、效績本位、公正待遇を切望するのだが、此とて社會民人の天稟境遇に、幾多の銑煉を加へ得る改造の斧鉞を以てするに非らずんば、到底

達成し得るものではない。社會に階級戰の續生せんとする時代、過去の習慣、傳統に囚はれ、苦められたるものに適當の解放を斷行して、變質改境の改善に努力すると同時に、各員をして自覺的に改造するの機運を促成するに非らずんば、決して公正なる社會生活を得る事は出來ないのだ。更に經濟的デモクラシーに至つては、餘りに現代の弊害除去の急に走つて、精神改造を粗忽にし、民心の改造指導を忘れ、唯物、功利に偏するが如き社會解放、改造論は、徒に社會の安寧秩序進歩を害するばかりで、決して識者の探らざる所であるべきだ。

如上の敘述にして、眞正であるならば、個人尊重、社會尊重の妥協調和の基調の上に立てるデモクラシーは、勢茲に民人の自覺に基く質の改造を標榜する文化主義に發展しなくてはならないのだ。然らば文化主義の意義、價値と、此に對する世論の歸趣は如何と謂へる事が本論の進路であり、歸結であらねばならない。次に筆端を改めて、此が解決に進まうと思ふ。

#### 四 文化主義

社會改造論者が、色々の議論を述べては居るが、要する所、外面的制度、組織の解放、改造を力説するに留つて、其内の改造に入らないが爲に、根本的の改革策を見る事が出來ないのである。社會を改良するには、是非文化主義に入らなくては、眞の解放、改造は不可能である。然ら

ば文化主義とは何ぞやと謂へる事を第一に解決する事が先決問題であるのだ。

#### ハ 文化の意義

文化と謂ふ語は、獨逸語のクルツール Kultur の譯語である。此と同列に置かれて居るのは英語のシビリゼーション Civilization があるが、後者は現實的物質的を代表し、前者は理想的精神的を表現して居る語である。然かも英語のカルチュア Culture に相當し、耕作 Cultivate する語源を有するものであつて、即ち自然の素朴なる状態に、人間の努力を加へて、或價値を創造する義に使用するものである。謂はゞ自然を純化し、優化し、合理化し、聖化して、價値創造作用を施す義である。だから現實的、自然的の事實よりは、より以上に出でんとするものであるから、此の意義に於て文化には、其標的に價値觀念を高唱するものである。現代の素朴、自然の状態を、純化高上せしめて、より高き程度に迄高揚せしむる努力を必要とするのである。此の文化價値の實現が、終に人生觀上新なる意義を有するに至つて、社會改造論と交渉するに至つたのである。

#### 2. 文化主義の意義

文化の語義が、上述の通りでありとすれば、文化主義は之を如何に解釋すべきであらふか。現在世上に高調せられたる社會問題、労働問題にして、でもが、實は十九世紀の初頃からし

て、徐々に擡頭したる經濟的色彩が濃厚になつて、其結果は唯物觀、功利主義に依つて、社會問題の解決に趁つたものである。マルサスにしても、スミス、マックスにしてもが、皆其亞流であるのだが、此は餘りに人生をパンの問題にのみ局限した恨があるのである。人生を沒理想視したものである。決して穩當なる見解と謂ふ事は出来ないのである。社會改良案が、如上の唯物功利にのみ偏したる間は、人生生活は何時までも、修羅の巷を脱する事は出来ないのである。自由平等も博愛もあつたものではないのだ。階級争闘を挑撥し、社會を破壊し、人生を墮落に瀕せしむるものであるのだ。産業の民主的主張にしても、剩餘價値の共同所有論にしても、でもが、何れも皆人類の量的平等、惡平等觀に即して、一步も進む能はざるものである。人類生活は、決して斯る惡平等のものではないのだ。量的平等は、人生生活を硬化せしめ、墮落に導くものである。社會問題が、此の缺陷からして脱出せんとすれば、必ずや労働の社會的奉仕の精神を鼓吹しなくてはならないのだ。労働をして直に、神聖なる公共的生産の社會奉仕たらしめて、始めて社會生活の價値改造に貢獻し得るものである。社會運動の他の一特色の、最少限度論にして、でもである。成程社會に介在する各個人は、必ず生存權を有して居るのに、相違はないから、國家社會は、此等各個人に對して、最少限度の生存條件を充足せしむる事は必要ではあるが、此の各個人は、一方に社會聯帶責任の上から見るに非らざれば、正當なる解決は至

難であるのだ。即ち各個人は、社會構成の一因子として、聯帶責任の一因子たる所からして、其生存權を確信して遣ふ必要があるのだ。然かも之を量的に見ずして質的に取扱ふ事を要するのだ。之を量的に見れば社會の進化は到底企及し得ざるものである。質的に見るが爲には機會均等主義を高揚しなくてはならない。此は只單に消極的に國民の保健だけを目途とすべきでなくして寧ろ積極的に國民個々の能率向上、個人の才能發揮を目標としなくてはならないのだ。此が人類文化の向上に貢獻する所以で、自我實現……社會的自我的道德原理に適ふ所以であるのだ。獨逸が大戦争の最中に於て、學制の大改革を斷行し、統一制 *Einheits-Aus* を施行して、其統一學校の主眼が、結局兒童並に青年の才能發揮 *Aufstieg Der Begabten* を標榜したのは、如何に獨逸民族が優秀なる頭腦の所有者であるかを實證するのである。此大改革を斷行し得る點に於て、彼は戰敗國で、無慘にも鉅額の賠償金を賦課せられて國歩艱難なる立場にありながらも、此の困しき中から、獨逸民族勃興の曙光を認め得ると思ふのである。才能を十二分に發揮して、其の才能を以つて、社會奉仕の爲に極力發揮せしめんとする機會均等主義でなくしてはならないのだ。此に至れば、文化主義は、要する所人格主義とならざるを得ない。人類本然の自主自由に基いて活動し、何等の束縛を受けず、自發的に自然を純化して理想化せんとする努力に、猛進すべきである。斯くして文化價値の創造に參與する人格者と

して生きんとすべきである。ラッセルが現代の社會は、人類の所有衝動のみに依て活動する社會であるが故に、其弊害百出するから、創造衝動の鼓舞作興を本旨とすべきであると力説したのは、寔に時機に的の中して居るのである。人格の自主自由、創造性をよく尊重した社會になれば、茲に社會の改造も出來るのである。人類の自發的創造性を十分發揮せしめて、人性の眞義を發揮せしむるが、目下の急務であるのだ。然かも其創造性の發現とは、社會的たるもの個人的のものもあつて、前者に屬するものには産業、政治、教育の如きあり、後者に屬するものには、文學、藝術、宗教、工藝等があるのである。産業の如きは、特に創造的享樂の要求が切なるものがあるのだ。社會運動が只單に唯物功利に偏して、眞に労働は神聖なる公共的生活であるとの社會奉仕の精神、生産創造の享樂性に基かないが爲に、益人心を險惡にし、社會を墮落に導くものである。此に出でざる内は、百の妙案が案出せられたとて、醜惡なる結果に終はるべきは、火を睹るよりも明であるのだ。文化主義が人格主義である以上は、前途に輝く光明を認めざる、現状維持の保守、退嬰、凡俗主義は到底採用せざる所である。さりとして過去の「デモクラシー」が主張した如き個人偏重、患平等の主旨は、認容すべきではない。此等民衆に質の向上、改造を促して、文化價値の實現に努力せしめんとするものであつて、決して凡俗低調の民衆主義に墮する事を許すべきでないのだ。此を社會的に見れば、身分、地位、階級、富、男女等を以つ

て、人類價値の批判を許すべきでない、文化の負擔者を局限して、多數の人々に對して威壓せんとする官僚主義、軍閥主義は、文化主義當面の敵であるのだ。國際的には、各國が夫々自主自存の權能を有し、特有の文化を發揮して、世界人類相互の福祉をこそ増進すれ決して強國が弱國を吞噬するが如き軍國主義、帝國主義は、文化主義の到底許すべきではないのだ。随つて自國の國防は、最少限度に止め、其立國の基礎を維持する程度に局限して、寧ろ民衆全體の才能發揮に全力を傾注し、之に機會の均等を與へて、よく文化價値の實現に邁進せしむるを標榜せんとするものである。文化主義は、人格主義であるから、個人の自主自由を高調するが、さりとて偏狹なる個人主義でなくして、自我の洗練されたる社會的自我的實現を標榜するが故に、社會公同聯帶主義を主張するものである。徒に十八世紀末に起つたが如き、自己の權利又は生存のみの確保を主張するものでなくして、本務遂行を強要して、後に、權利の獲得を主張するものである。

之を要するに、文化主義は現代思潮を最良く表現した者であつて、此を時代思潮と謂ふても過言ではないのだ。自由主義、平和主義、人道主義、民本主義、進歩主義、積極主義、精神主義、共存聯帶責任主義を包含して、文化主義たる統一原理中に包攝したものである。此の原理を以て人類文化の價値を批判せんとするものであると思ふ。我國では左右田博士は、黎明會講演集

第一輯に於て、文化價値を力説し、桑本博士は、丁酉倫理講演集第二百一輯に於て、人格價値を力説して居るから、見様によつては、前者は文化主義の客觀主義者であり、後者は文化主義の主觀主義者であつて、兩々相對立して居る様には見えないが、要する所、此は同一物に對する見方の相違で、實は文化價値の實現に努力せんとする人格者として生きんとするものであるから、人格主義の立脚地にあるものである。桑本博士も、左右田博士と同意義である事を肯定して居らるゝのである。だから文化主義は、人本主義、人格主義で、各個人の自我を擴充し、純化して、自發創造の境地に入らしめ、人格價値の實現に努力せしむるは、總て文化價値の生産創造をなし得て、文化價値の向上發展を隨伴せしむるものとなるのだ。畢竟個人の質の改造に入るべく社會は始めて改造の第一歩に上り得るのである。

### 3 文化人と文化生活

文化主義が、果して上述のものとするならば、此の主義を徹底したる個人、即ち醇化せられたる個人は、如何なる生活をなす人であらふか、文化人の内容は、何であらふか、近時文化生活の言議は、盛に盡され、新しき町、理想郷の實現等に努力する人も少なくないが、此等内容の凡てを述べ盡す事は、中々に至難であると思ふ。文化人と斯う謂ふたとて、特別の人ではない、否、寧ろ父たり母たる前に人たれと謂ふ義であるのだ。教師たる以前に、先づ人たれ、政治家、藝術

家、宗教家、實業家たる前に、先づ人となれと謂ふ義である。然かも其人たるや、人としての純化、深化、美化、聖化を要求するものである。で無智、蒙昧なるが爲に、人生生活に無自覺、無批判であつてはならない。其日暮しの生活に逐はれ、パンの奴隷たるが如きは、決して賞めた事ではないのだ。生活に逐はれて人生の眞義を考察する餘裕なきが如きは、文化生活から見れば誠に哀れむべきものである。人生生活に、無自覺、無批判なるは勿論困るが、零殘敗餘の殘骸の中に苦悶して、無氣力となるのも、文化人として望ましい事ではない。其結果自暴自棄に流るゝが如きは、寧ろ唾棄すべきものである。此に至るには、社會組織の缺陷、經濟組織の害から必然的に來る罪もあるであらふが、要は自家天賦の修養の不足もあるし、境遇の悪しき原因もあつたであらふが、顧みれば無自覺、無氣力の爲に、運命を開拓しなかつた罪もあるのであると思ふ。ざりとて徒に飽食暖衣に馴れ、放恣安逸に流れて、不勞遊惰の民も、文化人なるの資格はないのだ。我國の都會生活者には、現代の思潮に順應して自覺生活に入つて居るもの多數を占めて居る様であるが、足一步田舎に入れば、素朴醇厚の美風は何時しか消磨せられて、世智辛き浮世の荒波に揉まれ、利己、利慾、猜智の民となり、寧ろ慘酷なる人情と化しつゝ、ある様である。加ふるに生活程度は、極めて低級で、不自由、不規律、不統一、無秩序の生活に沈淪して居るものが多數を占めて居る様である。此際我帝國の地方民に、此の文化主義を宣傳し、文化生活に

導く事は、目下の急務と思ふのである。余は地方文化向上論を草して、此が救済●私見を不日發表する積であるが、先進の歐米國民が、生活に餘裕を有し、少くとも以下述ぶるが如き文化人として、文化生活の途に進み居るを目撃したる余としては、切に感慨無量なるものが少くないのである。で文化人としては、生き甲斐ある生活をなす事を第一の條件とすべきである。徒に模倣妥協、迎合、附和、妄動するが如きは採らざる所である。其には未來永劫に生々發展する生命を有する人類としては、自發、自律、自展の性格を有し、創造能力の發揮を宗とし、自己修養に専らなる事を要とすべきだ。獨立、自制、自主、自張、自治の性格は、文化人の中心資格であるのだ。因襲に捕へられ、迷信にかゝわるが如きは許すべきではないのだ。寄生生活、依頼心、隱忍、退嬰の心は、文化生活を害ふものである。此には聰明なる理智を要し、合理的生活をなし、物事の眞に徹明する理性の修養を要するのである。此と同時に、溫雅なる同情を有し、正義の念強く犧牲、沒我……進んでは一切を自己として愛する迄、愛の厚きを望ましいのだ。藝術の神祕に感得する優雅性を有し、功利雜念から離脱して、純粹創造の境地に入り、法悦の享樂に心行くまで味ひ得る人たるを要するのである。自家修養の念強く、自家人格の向上に對する猛烈の意力を有する事を望むのである。同時に敬虔の念厚く、徹底したる信念の上に安住し得る人たるべく、敬天の人にして、始めて愛人の人たり得るのだ。己を持する事謙慮、如何なる艱

難が身に攻め來ても、少しも周章狼狽もしなければ、さりとて落膽失神する事もなく、動かざる事山の如く、激すれば、千波萬波を蹴起して、勇往邁進する勇氣も、此敬虔心から生るゝものである。人生を常に感謝し、孜孜として責任遂行の位地に進み得る人は、此の境遇に入った人であるのだ。此等眞善美聖の生活を實現するには、勞働を神聖視し、生産創造の享樂を感じ得る人たるを要するのである。不勞所得に依て生活せんとし、或は父祖の遺産に寄生して、安逸遊惰の生活を求むるが如きは、文化人の探らざる所である。自家の額に汗を生じ、自家の手に賦を握つて、勤勞し、能率の増進を謀り、獨立獨行の生活を導く事を必要條件とするのである。功利生活以上に、勤勞、享樂、創造、享樂を味ひ得る生活に入るのが殊に文化人の必要條件であるのだ。食ふが爲に生きるに非ず、生きるが爲に食ふ生活は、如上の如き汎勞主義によつて、始めて體現し得るのである。富の増殖は生活上の基調ではあるが、さりとて之を功利私慾の用にすべきではない、必ず社會奉仕の意義に於てすべきである。斯くして生活に餘融あらば、享樂、修養の方面に全力を傾注して、始めて文化價値の實現を期し得るのである。

上述の如き生活が、文化人の具備すべき要件であると思ふ、之を要するに、自然人の野性を洗練し、美化、淨化、深化、合理化して平等、自由、正義、聰明の生活をなし、吾人の知見で考察し得る範圍内で、個人が最合理的の生活となし得るを文化生活と謂ふのである。反言すれば、發展可

能を豫想せらるゝ、自由意志が、經驗を統整し、生活を不斷に改造して行く創造生活が、文化生活である。だから愛、創造、見識、高尚なる享樂をなし得る人、何れをも具備する全人。此が現代人の要望する點であるのだ。斯る個人主義の徹底したる性格の人が、家庭を組織すれば、必ずや男女聯帶責任の生活をなし、男女相信じ相許して、相互の間に何等の祕密がなく、子女を中心にして、子女の天分發揮に全力を注ぎ、然かも子女を自家の方便とする陋劣の心なく、舅姑、奴僕に對しても、よく之と調和し、之を愛用して、圓滿平和なる生活を實現するであらふ。文化人の組織する社會は、萬人協同の聯帶責任の社會であつて、各人は平等の人格を以つて、人類協同の生活に參與し、相互扶助、人格尊重、互讓、互調の生活を實現し得るに至るべく、勞働と享樂とを共に、自家表現の悦びとするに至り、勞働を社會奉仕の爲にすると同時に、自己の教化と享樂とに生活を善用する事を怠らざるべく、美術館、教會、公會堂、遊園は設けられ、宗教、哲學、科學、藝術乃至工藝に關する講演研究が、隨時に開かるゝに至り、演奏會、展覽會等の藝術味が常に催され、性の理解を深くする丈の品性ある集會も建てらるゝし、赤裸々なる魂同士の隔意なき交際も催されて、民衆の教化、娛樂の向上も出來、民衆の文化價値實現に參與するに至るのであるのだ。斯る民衆の靈の覺醒があつて始めて社會の改造が出来るのであるのだ。マックス等が、唯物、功利の主義に立脚して、第四階級を煽動する如き口吻では、百年河清を待と同

じく、到底理想的の實現は期待し得らるゝものではないのだ。個人の徹底的自覺に依て、社會の改造も生ずべく、國家の基礎も確立し、國際間の平和も確保せらるべきである。家に至孝の子、社會に同情深き隣人、君國に對する至誠の忠臣は、斯る修養の人から輩出するものである。四海同胞主義の人道家も、斯る素養の泉から頻出すべきである。列強互に競ふて劍を磨き、相反するが如き野性は、文化生活の徹底によつて、煙散霧消すべきは、自然の勢と謂つてよからふと思ふ。

近時生活改善を論ずる事甚だ急であるが、此が只單に、衣食住の改良に偏するが如きあらば、此は大に警戒を要すべきである。勿論我國民の生活程度は、先進國の夫に比しては、極めて低級である事は事實であるのだ。生活少くとも人としての生き甲斐ある生活から一瞥して見たならば、此方はより急なる事には相違ないのである。食の方にしても、一人一日三千五百カロリーの營養量を攝取し得る生活をなし得ざるもの多數を占めて居る我國家としては、何よりも先に國民を富ましむる事を第一とすべきであるのだ。此には時間尊重の念を養成し時の有効使用に馴れしめ、能率増進を圖ると同時に、生活法の各般の改良を促し、無益繁瑣の事は、一日も早く全廢して有効に就くべきである。風俗習慣の改むべき其例蓋し少からざる事と思ふ。冠婚葬祭の大から、日常の作法儀禮の小に互りて、改廢すべきは改廢に躊躇すべ

きではないのだ。歐洲大騷亂中、交戦國民が決行したる事相を思ひ合はしたならば、我國民の警省すべきもの多々あるのである。我國民は衣食住の中で、衣に最も不經濟的に金を使用して居るのである。三千年間の慣習であると同時に、我國の國風をなして居るから、一時に改廢は困難ではあるが、近年は特に華美贅澤の風が流行し、少からざる濫費に流れて居る事は事實である。和洋の二式の衣服を調ふるが如きは、我國民としては最過重の負擔であるのだ。同時に高價なる絹物を惜氣もなく之を濫用して居る。北米の婦人が、生活改善に努力し、外國品絹物の使用を節約せんとして同盟を組織したが如きに鑑みたならば、如何に手製の品でありとは謂へ、天の賜物を無益に使用するものには非らざるが、一生涯に二三度より使用せざるものに、相當多額の金を支拂ふて支度せるは、我國婚禮の弊風であるが、一千一百二十萬戶の各戸が、此心掛けを以て生活の改善に注意したならば、普通教育費一億五千萬圓の負擔位は何んでもない事である。文化價値の向上を云爲する中にて、教育の如きは、何れ後に論ずるのであるが、其最樞軸たるべきものであるのだ。貧乏國民の警戒すべきは、此の點であるのだ。衣食住中でも、吾人の最改良を要し、然かも其全力を傾注すべきは、食物の改良であるのだ。朝粥、茶漬飯、香物、梅子が我國民の好物と來て居るのは、保健上は勿論、文化人の生活をなす上からも、特に改良を要すべき第一であるのだ。食料自給自足の聲に驚いて、俄に米の食ひ足しを

謀り、豆飯、玉蜀黍飯、馬鈴薯飯の流行は、餘りに感心は出来ないのだ。一食の料理に、數十金を投ずる成金輩の不心得は例外として、今少しく食物の營養量攝取には改良を促すべきであるのだ。飲酒の量が、年一年と高まり行くが如きも戒むべき點であるのだ。要は食、性、衣の順序に國民の生活法が改良せられ、無駄なる費用は省きて之を有用使用に馴れしめ、大に活動し、大に勤勞して、富の増殖に留意せしむると同時に、進んでは生産率増加、有用物生産に工夫を凝らさしむる事を要するのである。家屋の構造の如き、庭園の如きは、生活改善上の好研究題であるのだ。臺所の不整頓不潔は謂ふも愚かである。子供は家國の寶であるが、我國の家屋では子供の室を特設する民屋は千に二三に過ぎないのだ。一年に數回使用するに過ぎない表座敷に、比較的多額の費用を支出し居る状態、文化生活から眺めたならば、外面的、表面的の設備からが、片端から改善を促さなくてはならないのだ。此等衣食住の改善から、國民生活の年中行事を細に研究したならば、貧乏なる世帯、何だか行詰つたる生活、此が鬱結し沈滞したる氣分が、國中に充溢して居るではないかと思はしむるのである。北米加州は、ロサンゼルス市郊外にある、パサドナ町を觀た目から、我國東都の上町邊を眺めて見ても、到底比較にならないのだ。これ、世界五大國の一であるなど、謂へた事ではないのだ。況んや東都を去る我帝國の津々浦々に行つたならば、生活法に何たる合理的生活の認むべきものはないのである。國

民が覺醒して文化生活に入るのは、後れたりとは謂へ、今が其改善の道程に入るべき秋であるのだ。パン、ガロース式の獨立家屋に、四時花と縁とで飾られたる世界隨一の花園都市とは、此の土地を謂ふ事と思はるゝ、國民の質の改善をなし、此が生活法の改善を來たすが順序である。頭腦の改質を先にして、外面的生活法が改善さるゝのであるが、又一方外面的生活の改善から内部的に民衆の質の改造に行くのも、社會改良策の一法であるから、強ち拒斥すべきではないと思ふのである。只餘りに生活改善を物的、外的の方の方に限り、此のみを力説宣傳するのは、不可なる事と思ふのである。時の宣傳が、昨年一聲に全國に叫ばれたが、民衆は日頃生活の上に此を織込まないのは、如何にも残念である。汽車、汽船の便なき山間の僻地、豆腐屋に二里、酒屋に三里の地ならば、いざ知らず、相當に人家稀比し、交通の便も開け、生活難の風も烈しく吹き荒むで居る都市に於ても、時の有効使用さへ行はれず、民衆は傳習に捕へられ、過去を夢みて、生々潑潑たる文化の花をかざさうとはしないのである。文化の警鐘を亂打して、鈍感なる國民に、何時自覺を與へ得るであらふか、誰か其の任務の衝に當るべきであらふか、大正十年度の我國家の歳出入は、正に十五億圓に上つて居る。此等多額の財政中で、如上文化主義の宣傳費が、幾許支出さるべきであらふか、歐洲大騷亂を機會に、外來の思潮は、我國民は受取つた、此が爲に、一時は思想上に大影響を與へたが、萬事に覺醒しない民族であるから、昨



年頃からは漸次下火になつたのは寧ろ歓迎すべき現象ではあるが、然かも國民をして文化主義に目醒めて文化價値の實現を自家人格實現の標的とし進むべき此の文化主義こそは、今後我民衆の誰人の頭にも打込んで堅實なる思想の根柢を啓培すると同時に、世界に我帝國文化の創造發展をなさしむる事は、我國民凡ての雙肩に擔へる責務であるのである。

#### 4 文化生活と教育

社會改造、文化創造と謂ふ事が如何に喧しく論議せられたりとして、人間の質の改造をなすには、結局は教育を離れては不可能であるのだ。一體教育は、人類經驗の連續的統整改造であつて、此は精神改造の中心であり、樞軸であるべきだ。世界大騷亂から得らるべき教訓を、余の鈍眼に映じたる印象からして、曲らない筆で、前篇に其概略を述べたが、興國活人の根本義も歸する所は教育である。社會改造も、個人の質の改造であるのだ。茲に於ては各個人の質を改造するが爲には、普通教育の年限を延長して、八ヶ年にすべきは、戦後經營の第一義でなくしてはならないのだ。此事業に放資するのが、最經濟的の放資である。國家の發展も、民心の覺醒も、何もあつたものではないのだ。然して國民各個人に、國家發展、社會共同聯帶責任感、社會奉仕の念を旺盛にすれば、國家の總動員計畫は忽ちにして成就すべく、人的動員は勿論、物的動員も自然に伴生すべきである。此すら出來上がれば、國防の如きは深く憂慮すべきでないの

だ。其動員計畫を周密にせざるのが、寧ろ國家の禍であると思ふのだ。義務年限の延長の上に、更に補習教育の義務制を斷行して、先進國が既に實行期に入り居る十一年制を實施し、此の上、國民の十分八は、夫々職業に従事するのであるからして、其遺傳生理、心理嗜好、性癖、能力等の調査を嚴密にして、各自の天性發揮に達する職業的訓練を施し、國家社會は、職業紹介所を全國に附設して、國民の職業を指導し、大に産業獎勵、刷新の原動力たらしむる様にすれば、國民は自家の才能發揮に、機會の均等を得られ、自然に自家生活に反省自覺するに至り、合理的生活の實現を必要とするに至るべく、全人生活を實現するに至るや火を睹るよりも明かである。尙中等以上の學校も門戸を解放し、學校の數を多くして、機會均等の恩典に浴せしむる様にすべきである。此等の經費の支出の如きは、國家百年の長計から眺めた時に、左程右顧左盼する用なくして、決斷ある政治家の一鐵腕に依つて容易に實現し得べき事と思ふのである。ある制度の上の改良は、右の通りとして、教育の内容の方面に入つて論じたいと思ふ。文化生活は全人生活である。一方に偏すべきではないのだ。眞善美聖の四文化價値を創造し得る陶冶を理想とすべきで、眞理愛好、科學尊重の念慮を旺盛し、科學的訓練をなすべきである。此には、兒童を補導して、創造發見の過程に入らしむべく、自學の念を養成すると同時に、學習訓練に努力すべきは勿論である。美の教育は、殊に人の生活として力を入れるべきであつて、人性

を醇化し、美化する職能を發揮せしむるは、此の教育を旺盛ならしむべきである。美の鑑賞、創作の訓練を國民に與ふるは、我國今日に於て殊に必要であるのだ。文學、藝術の各方面に互つて、其好尚を向上せしむべきである。宗教的生活は、先にも述べたが如く、人を安住の地に導き、人生好個の伴侶として缺くべからざる修養である。現代宗教の何れに依ると謂ふ事は別論として、文化生活……反言すれば、自覺ある生き甲斐ある生活を理想とする上からは勿論である。此等眞美聖の生活は、要するに人をして人格價值、社會的人格價值實現の道德生活に入らしむる上からして、道德生活に歸すべきであるのだ。此等個人的修養の内容も一方には經濟生活を基調にして始めて出来るものであるから、能率増進、勤勞主義、獨立自活の修養を教育の上では鼓吹すべきだ。富國、富家……一人として貧民なからしむる生活を希望すべきである。分。産。主。義。が社會改良家に依て力説せらるゝが、此經濟生活に適應すべき生活を訓練するのが先決問題である。國家生活は、自治國民の訓練が出来て始めて其機能の發揮を完うし得るのであるから、政治的公民訓練は教育上努力すべき要機であるのだ。命あつての物種である。個人の生存はさる事ながら、國家的生活には國民の保健は更に重大なる關係があるのだ。身體をして虚弱ならしむべき色々の誘惑物が、或は突飛的に、或は潜在的に絶えず、身體を襲はんとして居るのである。個人の體力を強健にして、元氣旺盛、長生して能率増進するに至

らば、社會國家の幸福も此等から生ずべきであるのだ。國民體育の發展は、文化生活の根本基調であるのだ。

此等教育の制度、陶冶の理想に就きて、尙詳述すべきであるが、現代思潮の發展する徑路と、此に對する見解を述ぶるが、本書の主眼であるから、此を略述するのは止むを得ない譯である。何れ機を見て發表し、江湖諸君の嚴正なる批判を得たい事と思ふ。

## 世界大戦の教訓と現代思潮批判終

大正十年九月廿五日印刷  
大正十年拾月二日發行

定價金參圓八拾錢

著者 淺賀辰次郎

發行者 大葉久吉

東京市日本橋區本石町二丁目拾五番地

印刷者 竹內喜太郎

東京市牛込區榎町七番地



發行所

東京市日本橋區本石町二丁目  
振替口座東京二八〇番

東京寶文館

關西專賣

大阪市東區淡路町四丁目  
振替口座大阪四三番

大阪寶文館

印刷所 日清印刷株式會社

手寫：參圓八拾錢

東京實文館發行書目

京都帝國大學教授 文學博士 朝永三十郎著

近世に於ける「我」の自覺史

東京帝國大學教授 文學博士 今福忍著

增訂最新論理學要義

東京商科大學教授 文學博士 高田保馬著

社會學的硏究

東京高等師範學校教授 萩原擴著

倫理學概論

文學博士 吉田靜致 北海道函館師範學校校長 橋本文壽著

民本主義と國民教育

送定布 料價裝 金金裝 拾貳圓全 貳貳拾 錢錢冊

送定布 料價裝 金金裝 拾參圓全 八八拾 錢錢冊

送定布 料價裝 金金裝 拾貳圓全 貳五拾 錢錢冊

送定布 料價裝 金金裝 拾四圓全 八五拾 錢錢冊

送定布 料價裝 金金裝 拾壹圓全 貳五拾 錢錢冊

東京實文館發行書目

京都帝國大學助教授 文學士 成瀨清著

文學に現れたる笑の硏究

東京帝國大學講師 文學士 松浦一著

生命の文學

文學博士 吉田靜致 北海道函館師範學校校長 橋本文壽共著

家族制度の將來

文學博士 吉田靜致 藤本慶祐共著

國民道德要領

東京帝國大學教授兼 東京高等師範學校教授 文學博士 吉田靜致著

倫理學演義

送定布 料價裝 金金裝 拾貳圓全 貳五拾 錢錢冊

送定布 料價裝 金金裝 拾貳圓全 貳五拾 錢錢冊

送定布 料價裝 金金裝 拾貳圓全 八七拾 錢錢冊

送定布 料價裝 金金裝 拾貳圓全 貳五拾 錢錢冊

送定布 料價裝 金金裝 拾貳圓全 貳六圓全 拾五拾 錢錢冊